を見るべし。

第五に因圓淨とは、論に出出世善法功能所生と云ひ、釋に二乘善名出世、從八地已上、乃至佛地、名出出世、出世法爲世法對治、出出世法爲出世法對治、功能以四緣爲相、從出出世善法功能、生起此淨土、故不以集諦爲因、此句明因圓淨、何者爲出出世善法、無分別智、無分別後智所生善根、名出出世善法、と云へる是れなり。是れ淨土の因を明せるものにして、往生論國土莊嚴の中の第二性功德の文に、正道大慈悲、出世善根生と云ふに合するを見るべし。此の中、正道とは無分別智、大慈悲とは後得智なり。唐譯攝大乘論卷下には勝出世間善根所起と云ひ、出出世と言はず。卽ち往生論の文に相近し。

第六に果圓淨とは、論に最清淨自在唯識爲相と云ひ、釋に菩薩及如來唯識智、無相無功用、故言清淨。離一切障無退失、故言自在。此唯識智爲淨土體、故不以苦諦爲體と云へる是れなり。是れ淨土の果體を論じたるものにして、往生論の一法句に當る。彼の文に、一法句者、謂清淨句。清淨句者、謂眞實智慧無爲法身故。何等二種、一者器世間清淨、二者衆生世間清淨。器世間清淨者、如向說十七種莊嚴佛土功德成就、是名器世間清淨。衆生世間清淨者、如向說八種莊嚴佛功德成就、四種莊嚴菩薩功德成就。是名衆生世間清

淨。如是一法句攝二種清淨義、と云へる卽ち其の意なり。

第七に主圓淨とは、論に如來所鎭と云ひ、釋に如此相淨土、如來恆居其中、最爲上首、故言鎭と云へる是れなり。是れ往生論國土莊嚴の中の第十二主功德の文に、正覺阿彌陀、法王善住持と云ひ、佛莊嚴八種功德の文に、無量大寶王、微妙淨華臺、座功德、相好光一尋、色像超群生、身業功德、如來微妙聲、梵響聞十方、口業功德、同地水火風、虛空無分別、心業功德、天人不動衆、清淨智海生、大衆功德、如須彌山王、勝妙無過者、上首功德、天人丈夫衆、恭敬繞瞻仰、主功德、觀佛本願力、遇無空過者、能令速滿足功德、大寶海、不虛作住持功德、と云ふに相當するを見るべし。又國土莊嚴の中の第十光明功德及び第十一妙聲功德の兩句も、亦之に攝すと謂ふべし。

第八に助圓淨とは、新に輔翼圓滿と名く。論に菩薩安樂住處と云ひ、釋に自受行正敎、敎他受行正敎、名安樂。菩薩於淨土助佛助道、具此二事、故名安樂住處、と云へる是れなり。是れ往生論の菩薩四種莊嚴の文に、安樂國清淨、常轉無垢輪、化佛菩薩日、如須彌住持、偏至十方、無垢莊嚴光、一念及一時普照諸佛會、利益諸群生、一念供佛、雨天樂華衣、妙香等供養、讚諸佛功德、無有分別心、供讚彼佛、何等世界無佛法功德寶、我願皆往生、示佛

法如佛(住持三寶)と云ふに相當するを見るべし。

第九に眷屬圓淨とは、論に無量天、龍、夜叉、阿修羅、迦樓羅、緊那羅、摩睺羅伽、人非人等所行と云ひ、釋に淨土中實無此衆生欲令不空故、佛化作如此雜類と云へる是れなり。是れ往生論國土莊嚴の中の第十三眷屬功德の文に、如來淨華衆、正覺華化生と云ひ、佛莊嚴の中の第五大衆功德の文に、天人不動衆、淸淨智海生と云ふに當る。

第十に持圓淨とは、新に住持圓滿と名く。論に大法味喜樂所持と云ひ、釋に大乘十二部經名大法、眞如解脫等爲味、緣此法味、生諸菩薩喜樂、長養諸菩薩五分法身と云へる是れなり。是れ前の八部等の衆生並に諸菩薩の所食を明せるものにして、往生論國土莊嚴の中の第十四受用功德の文に、愛樂佛法味、禪三味爲食と云ふに合するを見るべし。

第十一に業圓淨とは、新に事業圓滿と名く。論に一切衆生、一切利益事爲用と云ひ、釋に凡夫二乘名一切衆生、隨其所能爲說正敎、令如說修行、離四惡道、離生死、離二乘自愛行、名一切利益と云へる是れなり。是れ菩薩所行の事業を明せるものにして、往生論の菩薩四種莊嚴の中の敎化利生の事に當る。

第十二に利益圓淨とは、新に攝益圓滿と名く。論に一切煩惱災橫所離と云ひ、釋に三界集諦名一切煩惱、三界苦諦名一切災橫、此二悉離能行行處と云へる是れなり。是れ前の事業に由りて得る所の利益を明せるものにして、往生論國土莊嚴の中の第十五無諸難功德の文に、永離身心惱、受樂常無間と云ひ、第十六大義門功德の文に、大乘善根界等無譏嫌名と云ふに相當するを見るべし。

第十三に無怖畏圓淨とは、新に無畏圓滿と名く。論に非一切魔所行處と云ひ、釋に淨土中無陰魔、煩惱魔、死魔、天魔故、離一切怖畏と云へる是れなり。是れ前の無諸難功德の文に、永離身心惱と云ふに當るべし。

第十四に住處圓淨とは、論に勝一切莊嚴、如來莊嚴所依處と云ひ、釋に非唯是有一切所受用具最勝無等、是如來福德智慧行圓滿因所感、如來勝報依止此處、是故最勝と云へる是れなり。是れ淨土の中に、六根所受用の法悉く具有することを明せるものなるも、往生論の中には、之に恰當すべき句なし。宜しく國土莊嚴の總說と謂ふべし。

第十五に路圓淨とは、論に大念慧行出離と云ひ、釋に大乘正法名大法、於大法中、聞慧名念、思慧名慧、修慧名行、此三於淨土是往還道、故名出離と云へる是れなり。是れ三慧

を淨土出入の路と爲せるものにして、次の奢摩他、毘鉢舍那の依止となることを明す。往生論には、之に對當すべき文なし。但し五門功德の下に、此五種門、初四種門成就入功德、第五門成就出功德と云へるは、元と五念門は、三慧を以て其の依止となすが故に、卽ち之に由りて入出二門の德を成就することを得と謂ふべし。

第十六に乘圓淨とは、論に大奢摩他、毘鉢舍那乘と云ひ、釋に大乘中、五百等定名奢摩他。如理如量智名毘鉢舍那。以此二爲乘と云へる是れなり。是れ卽ち奢摩他、毘鉢舍那の二を所乘となし、前の聞思修三慧の路に由りて、以て淨土に往還することを明す。往生論五念門の中の第三作願門に、云何作願。心常作願、一心專念、畢竟往生安樂國土。欲如實修行奢摩他故と云ひ、第四觀察門の下に、云何觀察、智慧觀察、正念觀彼、欲如實修行毘婆舍那故と云ふに正に相合するを見るべし。蓋し奢摩他 Śamatha は、譯して止と言ひ、毘鉢舍那 Vipaśyanā は、譯して觀と名く。天親の六門敎授習定論の釋に依るに、奢摩は是れ寂止の義、他は是れ處の義なり。謂ゆる其の心寂止の處に據りて、心凝住することを得て、定に依止す。此の定卽ち是れ凝心住處なるが故に、奢摩他と名くと云ひ、又衆義を緣じて觀察を起すを、毘鉢舍那卽ち衆觀と名くと云へり。又同論に依るに、或時但有寂處而無衆觀、或有衆觀而非寂處、或時俱有、應知卽是止觀雙運とあり。彼の往生論に、如是菩薩奢摩他、毘婆舍那、廣略修行成就柔輭心、如實知廣略諸法と云へるは、卽ち此の中の止觀雙運を說けるものなるを見るべし。又同論に修定の方便として、三圓滿を說く中、作意圓滿は、卽ち往生論の所謂作願門に相當するものゝ如し。

第十七に門圓淨とは、論に大空無相無願解脫門入處と云ひ、釋に於大乘中三解脫門一體由無性故空、空故無相、無相故無願。若至此門得入淨土と云へる是れなり。但し往生論には、三解脫門の說なく、之に相當する文なしと雖も、禮拜等の五念門及び近門等の五種の功德門を說ける如き、卽ち皆其の意に出でたりと謂ふべし。

第十八に依止圓淨とは、新に依持圓滿と名く。論に無量功德聚所在、莊嚴大蓮花王爲依止と云ひ、釋に以大蓮華王譬大乘所顯法界眞如。蓮華雖在泥水之中、不爲泥水所污。譬法界眞如雖在世間、不爲世間法所污。又蓮華性自開發、譬法界眞如性自開發、衆生若證、皆得覺悟。又蓮華爲群蜂所採、譬法界眞如爲衆聖所用。又蓮華有四德、一香、二淨、三柔輭、四可愛、譬法界眞如總有四德。謂常樂我淨。於衆花中最大最勝、故名爲王。譬法界眞如

於一切法中最勝此花爲無量色相功德聚所莊嚴能爲一切法作依止譬法界眞如爲無量出世功德聚所莊嚴此法界眞如能爲淨土作依止復次如來願力所感寶蓮華於諸花中最大最勝故名王無量色相等功德聚所莊嚴能爲淨土作依止と云へる是れなり。是れ往生論の五門功德を擧ぐる中に、以一心專念作願生彼修奢摩他寂靜三昧行故得入蓮華藏世界と云ふに合するを見るべし。

又往生論に、菩薩の巧方便廻向を明かし、三種の菩提門相違の法を遠離し、三種の隨順菩提門の法を滿足すべきことを說けり。三種の菩提門相違の法を遠離すとは、彼の文に、一者依智慧門不求自樂遠離我心貪著自身故二者依慈悲門拔一切衆生苦遠離無安衆生之心故三者依方便門憐愍一切衆生心遠離供養恭敬自身心故是名遠離三種菩提門相違法と云ひ、三種の隨順菩提門の法を滿足すとは、彼の文に、一者無染清淨心以拔一切衆生苦故三者樂清淨心以令一切衆生得大菩提故以攝取衆生生彼國土故是名三種隨順菩提門法滿足と云へる是れなり。是れ蓋し攝大乘論十八圓淨の連文に、五業を說けるものと其の意頗る相似たるものあるを認む。五業とは、一に災横を救濟するを業となす。是れ盲聾狂等の疾惱災横を滅除するものにして、卽ち佛の大悲力を明す。二に惡道を救濟するを業となす、是れ衆生を惡處より引拔して、善處に安立せしむるものにして、卽ち正行力を示す。三に非方便を行ずるを救濟するを業となす、是れ諸の外道等の加行は非方便なるを以て、之を降伏して佛の正敎に安立せしむるものにして、卽ち威德力を明す。四に身見を行ずるを救濟するを業となす、是れ身見を離れて三界を出さしむるものにして、卽方便力を示す。五に乘を救濟するを業となす、是れ諸の菩薩をして小乘に墮せしめず、及び未定根性の聲聞をして、小を轉じて大に入らしむるものにして、卽ち眞實敎力を明すものなり。此の中、初の三業は、通じて一切衆生の苦を拔くを其の趣旨となすが故に、往生論の所謂慈悲門に當り、第四業は、卽ち自身を貪著することを遠離するが故に、往生論の所謂智慧門に當り、第五業は、一切衆生をして、等しく大乘に趣き、大菩提を得せしむるものなるが故に、往生論の所謂方便門に相當するを見るべし。又彼の往生論に、禮拜等の五念門を、次第に身業口業意業智業方便智業の五業に分配せるは、亦今の攝大乘論五業の說に由漸する所あるを察すべし。之を要するに、往生論の所說は、無著の攝大乘論十八圓淨の說に淵源したるものな

るを見るべく、但だ彼れは總じて諸佛如來の受用土を說き、是れは別して阿彌陀佛の安樂淨土を明せるを以て、其の間、多少の出沒異同あるは、寧ろ當然の事と謂ふべし。若し然らば、往生論は、作願觀察の二門を以て往生の正業となし、奢摩他、毘鉢舍那を成就して、以て蓮華藏世界に入るべきことを說けるものと謂ふべく、彼の曇鸞の註解の如き、此の意を以て之を見るに、往々、論旨に愜はざるものあるを覺ゆ。學者宜しく之を研詳せざる可からず。若し夫れ天親も無著に同じく、凡夫往生を別時意となすの意あるや否やに至ては、別に論究する所あるべし。

一九　兜率上生の起源と婆須蜜菩薩

兜率往生の思想と、淨土往生の思想と、どちらが先きに起つたものであらうかといふのに、例に依つて善くはわからぬが、まづ兜率の方が早からう。何故せとなれば彌勒當來出現の考は極めて早く起つた考で、恐らく是れは釋尊の直說と見て善からうと思はれる。その彌勒が兜率天に住居を定めるやうになつたのは、釋尊の八相成道といふ考が發達してからの事に違ひないから、それは多少時代が後れてゐるかも知れぬ。

釋尊は御入滅になり、御弟子達は漸次涅槃に入つて仕舞つて、眞に落寞の感に堪えぬ。佛陀は嘗て彌勒當來出現のことを說かれたけれど、其の彌勒は中々近々に出現しさうにもない、そこで釋尊が八相成道されたといふ考から、彌勒が必ず兜率天に現在して居ねばならぬことを想ひ起して、遂には其處へ往つて、佛陀の候補者たる彌勒の說法を聞かうといふ順序になつたものだらうと思はれるが、果して如何であらう。

彌陀の方は彌勒の考とは餘程趣が違つてゐるやうに見える。兜率へ往かうといふのは其處で樂をしやうといふ考ではなくて、彌勒の說法を、釋尊の說法を聞くやうに聞かうといふ考らしいが、淨土往生の方は、彌陀の說法を聞かうといふ考は勿論あつても、それは眞の目的でなくて、眞の目的は此の世界は五濁爛熳の穢惡の世界で、宛がら火宅の如くであつて、安心が出來ないから、そんな憂のない安樂な淸淨な花ふる淨土へ生れ換つて、靜かに遊戲三昧に耽らうといふ考らしい。どうも彌勒の

方は純粹佛敎の思想のやうに見えるが、彌陀の方は幾分婆羅門の考を帶びては居ないかと疑はれる。何にしろ淨土往生の思想は、兜率往生とは大分發達の徑路を殊にしてゐるだけは慥なやうだ。

樂土を豫想したといふ考は、印度の餘程古い處にもあるらしいから、淨土往生の思想も決して新らしくはない。が然かし四阿含などには上天の事は頻りに說いてあるけれど、淨土往生の事は全く無い。して見ると佛經の中では淨土往生は上天の思想の後に出來たものと謂はねばならぬやうだ。

それに又佛敎の中では、過去未來に賢に佛が出た、又は出るといふ考が先きに發達して、現在に橫に竝んで佛が出て居るといふ考が後に發達したやうであるから、當來成佛の彌勒の思想は、定んで現在說法の彌陀の思想に先んじたであらうと思ふのである。勿論前後といふても唯其れだけのことで、これが何年代に彌勒の思想が發生し、それから何年後れて彌陀の思想が起つたなどいふことは、迚も今日にわかるものでない。

前田博士の「兜率往生思想發生時代考」といふ論文の中には、婆須蜜所集論の序文を引いて、婆須蜜菩薩といふのが、兜率へ上生したのが兜率往生の初であつて、此の人は佛在世から佛滅後へかけて生きて居つた人であるから、兜率往生は佛滅後間もなく、卽ち佛滅第一世紀頃に旣に發生したものであらうと書いてある。が然かし此の說は少し如何であらうか。

婆須蜜卽世友といふ人は印度に幾人もある。故小山憲榮氏の宗輪論發軔に依ると、品類足論、及界身足論を造つた三百年出世の世友を初出として、それから婆沙會の四百年出世の世友を第二出、世友問論を造つたといふ經部の異師の世友を第三出、それから又俱舍釋を造つた(此の俱舍釋は英國劒橋圖書館に在つたのを荻原雲來君が寫して來たさうだ)世親門下の世友、玄奘が渡天した時逢ふたといふ迦濕彌羅國の世友。都合此の五人を出してゐる。

斯ういふ鹽梅に竝べて見ると、まだ一人ある。前田氏が引かれた婆須蜜論の序、それから又師子月佛本生經といふお經の中にも、佛在世に婆須蜜といふ菩薩が居つて、その菩薩が兜率天に上生して、彌勒の後を承けて當來成佛して、師子月佛といふ佛になるといふことが書いてある。此の佛在世の婆須蜜を加へると世友といふ人が

總計六人あることになる。

が併し後の三人は兎に角、初の三人は實際三人の世友があつたのではなくて、結局は唯だ一人であると思ふ。それは又何といふ理由かといへば、品類足を造つた世友と婆沙會の世友とは恐らく別人でなからう、隨て宗輪論を造つた世友も、それと同人らしい。是れには色々の考證も要るが、それは暫くお預りして置いて、本問題に關係のある佛在世の世友卽婆須蜜が、何せ品類足や宗輪論を造つた世友と同人であるか、言を換へて云へば、佛在世の婆須蜜が、なぜ幽靈であるか。それを少し述べやうなら、

一體婆須蜜といふ人は非常に豪ら物であつたらしい。品類足も書いた、界身足も書いた、宗輪論は無論、乍去婆須蜜菩薩所集論は彼れが書いたものではなくて、其の弟子か若くは其の崇拜者が書いたらしい。それは所集論の中に「尊婆須蜜說」とか「尊作是說」とかいふことが處々にある所から見ると、決して自分で集めたものでない。此の論の體裁は恰度婆沙とおんなじ體裁で、其の以前若くは同時に居つた諸大論師の說をいろ〳〵集めたものである。此の論の中には尊曇摩多羅(卽法救で此の人が一番多い)尊僧伽多羅、尊彌沙塞、尊摩訶僧耆、尊曇摩崛、尊僧迦蜜、尊因陀摩納、尊摩醯羅などの名が順々に出て居る。斯ういふ人の說を擧げて、其の中で尊婆須蜜卽世友の說を標準とした所から、婆須蜜所集論といふたのであらう。此の筆法から考えて見ると、婆沙會の席に四大論師などの人が、必ずしも列席して居なくても可いことになる。法救とか世友とかいふ少し以前に出世して居つた四大論師の說を、主もに集めたものだから、其の席上に四大論師が實際居つたやうに後から說傳したものかも知れぬ。

兎に角世友といふ人は佛滅三四百年頃に居つた傑出の高僧であつて、當時の敎界の大明星であつたに相違ない。そこで此の世友といふ人に色々の神話が附いて來たのである。それは外でもない、卽世友といふ人は非常な豪ら物であるから、此の人は定めて彌勒の後を承けて當來成佛して、釋尊のやうに說法敎化するであらうといふ想像が起つて來たのである。師子月佛本生經は、その想像の結果で出來たものに相違ない。

此の師子月佛といふものは、賢劫の第六佛であつて、卽彌勒の次に成佛する順序に

なつて居る。增一阿含の第四十五に、釋尊の次に彌勒が出る、彌勒の次に師子應、師子應の次に承柔順、承柔順の次に光焰、それから無垢佛、寶光佛といふ順序が書いてある。賢劫經は少し順序は違ふが、名前は殆ど同じい。寶網經には、彌勒佛、離垢佛、光焰佛、師子佛、月英佛の順序で、其の名前が說いてある。それから面白いことがある、先きにもいふた婆須蜜所集論の序文に、婆須蜜大士は彌勒に繼いで作佛し師子如來と名く、彌妬路刀利は光焰如來、僧迦羅刹は柔仁佛だと、斯う書いてある。大悲經第二には、祁婆迦は當來成佛して無垢光如來となると云ふことが說いてある。さういふ風に段々豪らい人には神話が附いて來るやうになつたのであるが、一體當來出現の佛が澤山あるといふ考が先きに在つて、それから實際の人物を其れに當てたのか、但しは實際の人物が其處に先づ在つて、それから當來多佛出現の考が起つたのか、その邊の研究も餘程興味がある。

が併しそれは又他日の話題として、今は世友の本問題に立歸つて述べやう。上いふ通り世友は彌勒の候補として當來作佛するだらう、否な作佛する人に違いない。して見ると佛陀がそれを懸記せぬと云ふ筈がない。斯ういふ想像が次第に行はれて

來る者であるから、師子月佛本生經といふお經が何時の間にか出來て、それは釋尊が疾くの前に懸記をして居られる婆須蜜といふ菩薩は、元來佛在世に居つたもので、佛陀から直々に師子月佛の授記を被つたものだと眞面目に相槌を打つたものだらう。

して見ると、婆須蜜論の序文に、婆須蜜は釋迦文に從つて鞞提國に降生し、佛に侍すること四月云云と書いてあるのも、別に怪むに足らぬ。全く其の時の印度の傳說を寫したもので、師子月佛本生經の筆法に相違はない。

斯ういふことは獨り婆須蜜に限らぬ、現に馬鳴にもある。馬鳴といふ人は佛滅四五百年頃に出た人だが、それに藏經の中に在る馬鳴菩薩大神力無比驗法といふ書には、馬鳴が佛在世の時に居つたものだといふことを書いてゐる。さういふ鹽梅に豪い人を、後から段々と釋尊と結び附けるやうにしたもので、決してそんなことは本當の事實ではないのである。

かう考へて見ると婆須蜜といふ人が、兜率往生を願つた發頭人とはいへないやうだ。僧伽羅刹も同じことで、此の人は當來柔順佛となる人であるといふことから、自

然兜率へ往つたものであらうと考へられたに過ぎなからう。然かし此等の人が實際兜率往生を願つたとした所で、それは時代が餘程後だから、其れを以て兜率の起源といふことは出來まい。

上天といふ思想は非常に古いので、四阿含などには三十三天等に生れた者があるといふことを澤山書いてゐる。兜率へ往つたといふ記事も少なくない。が併かしまだ是れは彌勒崇拜と結合した兜率往生の思想ではない。

二〇　兜率上生に對する淨土諸家の辯難

彌勒菩薩が釋迦牟尼の候補者として、當來成佛すべく、現に兜率天に住世すといへる信仰は、頗る早き時代より存在し、印度以來絶えず其の崇拜の行はれたるを見る。付法藏因緣傳第一に依るに、摩訶迦葉滅度せんとする時、鷄足山に入り、佛の與へたる糞掃の衣を著け、自ら己が鉢を持し、以て彌勒の出世を待たんと願言せしことを記し、西域記第三には、烏杖那國の舊都に大伽藍あり、刻木の慈氏像高さ百餘尺なるを安ず。末田底迦阿羅漢の造る所なりとあり。以て其の由來する所の甚だ遠きを知るべし。婆藪槃豆法師傳に依るに、無著は數〻兜率天に上りて、彌勒に大乘の經義を諮問し、後、無著の請に由りて閻浮提に降り、四月の間、每夜無著及び諸の有緣の衆の爲に、說法堂に於て十七地經を誦出し、其の義を解せりと云ひ、西域記第五には、無著は世親及び師子覺等と相約して、兜率に生ぜんことを願じ、師子覺先づ彼に生じ、次で世親亦上生して、爲に慈氏の相好を無著に報せしことを記せり。

蓋し藏中、彌勒成佛に關する經數部あり、彌勒下生經は、西晉竺法護の出に係り、傳譯最も古し。彌勒成佛經、竝に彌勒下生經は、姚秦鳩摩羅什之を翻す、彌勒來時經は、失譯にして古來東晉錄に附せり。觀彌勒菩薩上生兜率天經は、宋沮渠京聲の譯する所、彌勒下生成佛經は、唐義淨の出す所に係り、共に一卷にして、當來彌勒下生成佛の事を說けり。

此等の經、支那に翻傳せられてより兜率上生を願求せしもの少なからず。就中、始めて僧史に見ゆる者は、晉の道安なるが如し、安は彌勒の像を造り、每に弟子法遇等と彌勒の前に於て誓を立て、兜率に生ぜんことを願せり。其の後、竺僧輔、僧旻、法上、靈幹

等の師、相次で兜率の業を修し、玄奘、彌勒を篤信するに及で、其の門人之に傚ふ者漸く多し。慈恩の如き、彌勒上生經を疏釋し、大に其の皷鼓に努むる所あり。吉藏、元曉、義寂、太賢、憬興、貞辯、守千等の諸德亦各〻疏を製して義理を闡明せり。日本には、尊意、平忍、眞興、高辨の諸師、兜率欣慕者として有名なり。其の他、僧傳を檢するに、或は像を造り、或は天宮に往來し、若しくは其の業を修せしもの、尙幾十を以て數ふべし。

案ずるに、無著は親しく彌勒に承けたるの故を以て、玄奘、慈恩を始め、法相に屬するの徒は、自ら兜率を願求するの風あり。又兜率は此の界にして其の處近く、極樂は十萬億を隔てゝ甚だ遙遠なるのみならず、攝大乘論に、極樂往生を別時意となし、順次往生を許さゞるを以て、西方の業を廢して、彌勒に歸敬するの念を生じたるが如し。淨土往生に比しては、其の隆替固より年を同くして語る可らずと雖も、未來教の一として、隱然其の勢力を持續したるは事實なり。

支那淨土諸家の中、吉藏、道綽、迦才、智儼、元曉、懷感を始め、十疑論、西方要決、阿彌陀經通讚等に、兜率西方を比較し、難易勝劣を判ずる頗る詳密なるものあり。今左に諸家の所說を錄出すべし。

一　吉藏の四義比較

嘉祥大師吉藏は、觀經と彌勒經との同異を比較し、四義を擧げたり。その說に依るに、凡そ如來に兩種の敎化あり、竪化と橫化となり。三世の佛化を竪化と名け、十方の佛化を橫化と名く。然るに此の兩種の敎化に具に通別あり。通と言ふは、大乘の中には竝に十方の佛化と三世の佛化とを明かす、故に通なり。若し別して論をなさば、大乘には具に二化を明すと雖も、小乘には十方を論せず、但三世の佛化を明すが故に、唯竪化ありて、而かも橫化あることなし。是の故に小乘を謂つて半字となし、復不了義經と名け、大乘を滿字となし、復了義經と名くるなり。加之、同く竪化を明すと雖も、大乘の中には具に三世無三世の兩化あり。小乘には唯三世を明かして無三世の化を明すことなし。何者、大乘には具に眞應二身を辨ず。中に於て、眞身には三世なく、應身には三世あり。是の故に大乘には具に三世無三世の兩化あることを得ると雖も、小乘には生法二身を說くも、竝に有爲なるが故に、唯三世に墮して無三世の化あることなければなり。是の故に復小乘を名けて半字不了義となし、大乘を滿字了義となすなり。今觀經は十方の佛化を明かし、彌勒經は三世の佛化を明す。此の二經は竝に

大乘たりと雖も、若し爲縁の不同に約する時は、觀經は是れ大乘、彌勒經は是れ小乘なり云云。是れ一なり。次に復彌勒經は遠見佛の縁となり、觀經は近見佛の縁となる。遠見佛の縁となるとは、彌勒は五萬七千九百億載(五七九〇〇〇〇〇〇〇〇)を歴て乃成佛す。衆生福を修すれば、卽此の時に於て方に見佛することを得。故に彌勒經は唯遠見佛の縁なり。近見佛の縁とは、觀經に依るに、一生修善すれば三輩九輩の者卽捨命の時に臨みて、彼の佛及菩薩現に來て迎接することを見る。是卽近見佛の縁なり。是れ二なり。又彌勒經を說くは小乘の衆生の爲なり、觀經を說くは大乘の衆生の爲なり。何者、彌勒經は唯諸の聲聞の爲に說き、觀經は具に諸の菩薩の三忍具足する者の爲に說く所なればなり。是れ三なり。又彌勒經は福德淺薄の人の爲に說き、觀經は福德深厚の人の爲に說く所なり。何者、彌勒の佛土は猶是娑婆界の內に在りて、地に七珍を具せず、身に三患を免れずと雖も、無量壽佛の土は淸淨にして、此と懸に殊に、樹は五音を出し、波は四忍を生じ、無極の身泥洹に次げる者なればなり。此れ卽衆生の福に淺深の不同あるが故に、如來の敎門に種々の異ある者なり。是れ四なり。之を二經の別となすと(觀經疏)

二　道綽の四義比較

道綽禪師は、復四義を以て兜率と西方との二處の優劣を比較せり。四義とは、一には彌勒世尊その衆生の爲めに不退の法輪を轉じ玉ふに、法を聞いて信を生ずる者は益を獲ると雖も、樂に著して信なき者は其數甚だ多し。加之、兜率に生ずと雖も、彼の處は三界の攝なるが故に安きことなく、猶火宅の如く、必ず當さに退失すべし。然るに西方は一たび生を得る者は、皆悉く阿鞞跋致にして、更に退人と雜居することなく、又復その位は無漏にして、三界を出過するが故に、退失輪廻あることなし。二には兜率に往生する者は、壽命唯四千歲にして、命終の後は退謝を免れずと雖も、西方はその壽命佛と齊ふして、算數の能く知る所に非ず。三には兜率は水鳥樹林ありと雖も、但諸天の爲に樂を生ずる縁となりて、聖道に資せずと雖も、西方は水鳥樹林皆妙法を說いて、人をして悟解して無生を證會せしむるなり。四には姑く音樂の一種を以て比較するも、西方は世の帝王及六天の音樂に勝ること萬億倍なりといへり。されば兜率の音樂は西方に劣ること萬億倍なりといはざるべからず(安樂集上)

三　迦才の三義比較

弘法寺迦才は、三義を擧げて復二處の優劣を評判せり。三義とは、一には化主に就いて論ず。然るに此の兩處の化主は齊く是れ法王にして、俱に善逝と稱する者なり。是の故に衆生を化せんが爲に、或は穢土に居し、或は淨刹に居すと雖も、其の佛德を比較する時は則優劣あることなし。二には處居に就いて論ずるに、兜率は空居、極樂は地居なり。若し一應之を論ずれば、空居は天の所居にして、地居は人の所居なり。故に天は優れ、人は劣なりと雖も、若しその淨穢を論ずれば、兜率は天空なりと雖も、女人あるが故に穢土なり。極樂は地居なりと雖も、女人なきが故に淨土なりといふべし。若し委細に分別する時は、此の淨穢に十種の異あり。一には有女人無女人同からず。所謂兜率は男女雜居し、極樂は唯男にして女人あることなし。二には有欲無欲同からず。所謂兜率には上心の欲ありて境界に染著すと雖も、極樂には上心の欲なし、故に常に菩提心を發す。三には退不退。所謂兜率は所居是れ退なりと雖も、極樂は所居是れ不退なり。四には壽命。所謂兜率は壽命四千歳にして乃中夭あり、極樂は壽命無量にして而かも中夭なし。五には三性心。所謂兜率は三性心ありて間起するが故に、惡心は地獄に墮すと雖も、極樂は唯善心のみあり、故に永く惡道を離る。六には三受

心。所謂兜率は三受心互に起り、極樂は但樂受のみあり。七には六塵境界。所謂兜率の六塵は人をして放逸せしめ、極樂の六塵は人をして菩提心を發さしむ。八には受生同からず。所謂兜率の受生は男は父の膝上に在り、女は母の膝上に在りと雖も、極樂の受生は七寶池の內蓮華の中に生ず。九には說法同からず。所謂兜率は唯佛菩薩說法するも、極樂は水鳥樹林皆能く說法す。十には得果同からず。所謂兜率に生ずるには或る者は聖果を得、或る者は之を得ずと雖も、極樂に生ずる者は定んで無上菩提を得べし。已に是の如く淨穢二土十種の不同あり。是に由りて極樂は大に優れ、兜率は大に劣れりといふべし。三に所化の衆生に就いて論ず。西方に往生する者は易く、兜率に上生する者は難し。此の難易に七種の差別あり。一に所別とは。極樂は是れ人、兜率は是れ天なり。然るに天は生ずること難く、人は生ずること易しと。但し才は極樂の有情を唯人となし、是に由りて往生の難易を論ずと雖も、而かも彼の國の有情は是れ唯人に非ず、故にその比較は首肯し難き者あり。二に因別とは、極樂は唯五戒を持して、亦往生を得るが故に易生なりと雖も、兜率は具に十善を修するに非ればは上生することを得ず、故に難生なり。三に行別とは、極樂は乃至十念成就すれば卽往

生を得、觀經に出す所の如し。兜率は施戒修三種を具して始めて上生することを得べし、是れ彌勒經に說く所なり。四に自力他力別とは、極樂は阿彌陀佛四十八願の他力に憑りて往生すと雖も、兜率は願の憑るべきものなし、故に唯自力を以て上生せざるべからず。五に有善知識無善知識とは、極樂は觀音勢至あり、常に此土に來りて往生を勸進し、命終の時に臨むで金剛臺を擎げて行者を來迎し、種々に讚嘆して其の心を勸進し、卽往生を得ると雖も、兜率は此の二菩薩なきが故に、但自ら進んで上生せざるべからず。六に經論勸生處多少別とは、極樂は經々讚し論々勸むと雖も、兜率は經讚稀れに論勸少し。七に觀古來大德趣向者多少別とは、極樂は上古以來、大智名僧の趣向する者多しと雖も、兜率は上古以來、大德願樂の者甚だ少し。此の七義によるに、西方に往生することは易く、兜率に上生することは難しと(淨土論卷下)蓋し總別合して之を數ふる時は、才に總じて十九種の比較あり。その中、若し化主に就いて論ずれば二處優劣なく、空居地居に就いて論ずれば、兜率は優にして西方は却て劣、その餘の淨穢の十種、難易の七種は皆西方を以て優とし、兜率を劣となせることを知るべし。

四　智儼の一義比較

智儼の孔目章第四に依るに、若し煩惱を斷せんと欲する者は、引て西方に生せしめ、煩惱を斷せざる者は、引て彌勒佛の前に生せしむ。何を以ての故に、西方は是れ異界なるが故に、須らく惑を伏斷すべく、彌勒處は是れ同界なるが故に、斷惑を假らず、業成ずれば卽ち往生すと云へり。是れ土體を判ずるには、西方を勝とし、兜率を劣となすも、往生を判ずるには、却て西方を難とし、兜率を易となすの意なるを見るべし。

五　元曉の三義比較

新羅元曉に依るに、略、迦才に同じ。その說に言く、若し化主の實德を論ずれば、誰れか優誰れか劣ならん。齊く是れ法王にして、俱に善逝と稱すと雖も、若し權化を論ずれば、衆生を化せんが爲に、或は穢土を現じ、或は淨土を現ずるを別となすのみ(化主)次に若しその處所を論ずれば、兜率天宮は空に構へて立ち、極樂世界は地に就いて安す。此れ則人天趣別なる者なり。是に由る時は空居は優、地居は劣なりといはざるべからず(處所)されど若し二土の淨穢を比較する時は、兜率は穢界にして、極樂は淨刹なり。是に十四種の異あり。一には兜率は界地狹隘なり。二には男女雜居す。三には現

行の欲染あり。四には退轉あり。五には壽命短促なり。六には仍中夭あり。七には身量短小。八には仍不同あり。九には三性の心起るが故に、若し惡心を以てすれば地獄に墮することあり。十には三受互に起る。十一には六塵の境は人をして放逸ならしむ。十二には男は生れて父の膝に在り、女は母の膝に在り。十三には唯菩薩を以て說法の主となす。十四には或は聖果を得、或は得ざる者あり。極樂は其相正に之に反す。是の故に若し此の義に就かば、極樂は大に優、兜率は大に劣なり(淨穢)次に復往生の難易を論ずるに、有人(迦才を指す)は七種の差別を擧げて、西方を易生とし、兜率を難生となすといひ、有人は(窺基を指す)兜率は此界に在り、故に生じ易く、極樂は報土なるが故に少善根の因緣を以て生ずることを得べからず、所謂別時意の說なり。此の故に西方を願ずるも萬が一も生せずといへり。然るに此の兩說竝に盡理に非ず。凡そ往生の難易は因緣に一任す。緣とは諸佛菩薩同體の大悲、因とは四衆九輩の所起の願行なり。同體の大悲は人を局ることなしと雖も、衆生の業は猶自ら參差あり。中に於て若し業因成熟する者は、願に隨つて卽生ずることを得べし。人天の別あるを以て往き難く、淨穢の異あるを以て礙をなすべきに非ず。若し之に反して願行虧缺する時は、同界といへども生ずべからず、化身といへども豈に輙く謁すべけんや。蓋し衆生無始已來、勝緣繫屬各別なり。或は性自ら彌陀に屬するあり、或は本來慈氏に屬するあり。若し各〻の所屬に就かば、道を得ること速なりと雖も、無屬に於ては勞多くして益少し。是の故に心を所屬に委して各〻その業を務むれば、往生の易きこと彈指よりも速なり。何すれぞ徒らに難易の論を構へんや。但だ剋舟の學徒、守株の行者、千界を覆ふ舌相の誠言を疑つて、一心に愚なる井蛙の說を信せんとす。燕石を藏遺して隋珠を疑慮する者に似たり、豈に哀れならずや(遊心安樂道)

六　懷感の十二義比較

又懷感禪師は、十二義を擧げて二所の優劣を校量せり。一に主とは、兜率天主は補處と名くと雖も、未だ妙覺を成ぜず。又縱令當に成佛するも、只化身を現じて報身を現ぜず。然るに阿彌陀佛は現に今淨土に居して、多くは受用身を現じ玉ふ。若し實に就いて之を論ぜば、優劣なしと雖も、化物の邊は當來現來、化佛報佛、覺滿未滿、現粗現妙其優劣同からず。二に處とは、兜率は娑婆の穢土にして欲界の劣天なり、極樂は淨土の勝方にして衆の妙刹に超えたり。故にその美醜顯然とす。三に眷屬とは、所謂兜率

天宮は多く男女をまじえ、極樂淨刹は女人を絶つ。四に壽命とは、兜率天壽は人間の四百年を以て一日一夜となし、彼の日夜三十日を一月となし、十二月を一年となして、その壽四千歳なり。蓋し倶舍論第十一に依るに、人の五十歳を四王天の一日一夜となして、彼の壽は五百年。人の百歳を忉利天の一日一夜となして、彼の壽は一千年。人の二百歳を夜摩天の一日一夜となして、彼の壽は二千年。人の四百歳を兜率天の一日一夜となして、彼の壽は四千歳。乃至增陪して欲天の壽量を量るといへり。之に由りて兜率の天壽は、人間の五十七億六千萬歳なるを知るべし(30×12×4 10×4000＝576000000)但し此の中、彌勒の如きは別業を以て其の定壽を延ぶることを得ると雖も、而も彼の天衆は獨り之を延ぶること能はざるのみならず、却てその壽を盡さずして中夭する者あり。然るに西方は壽命無量阿僧祇劫にして中夭等あることなし。五に內外とは、兜率天宮には內外院あり、內院は彌勒に親近して永く退轉なしと雖も、外院は五欲に耽りて輪廻を免れず。然るに西方は縱令下品も、蓮華開發すれば觀音に遇ふて、甚深の諸法實相除滅罪の法を聞いて、永く輪廻を免るゝことを得。六に身色とは、兜率の身色は是天形にして、淸淨淑妙なりと雖も、然れども其の終時には五衰の相現じて其苦患あり。五衰とは倶舍論第十によるに具に、大小の二の五衰あり。小の五衰とは、一には衣服嚴具悲愛の聲を出す。二には自身の光明忽然として昧劣なり。三には沐浴位に於て水滴身に著く。四には本と性囂馳なりしも、今は一境に滯る。五には眼本と凝寂なりしも、今は數々瞬動す。大の五衰とは、一には夜埃塵に染む。二には花鬘萎瘁す。三には兩腋より汗出づ。四には臭氣身に入る。五には本座を樂はず。諸天の終時には、必ず此の五衰の相現ずることあり。然るに極樂は純眞金色にして、光明百千由旬を照曜し、六欲の諸天に比するに、金山を聚墨に況するに同く、復五衰の相を現ずることなし。七には相好とは、諸天の身相端嚴なりと雖も、三十二相なく、又その中、美醜あり、西方淨土は悉く三十二相あり、美醜あることなし。八に五通とは、極樂に往生する者は、願力によるが故に五通(天眼天耳他心宿命如意)滿足し、能く界域を超え、諸佛に歷事供養することを得と雖も、兜率に生ずる者は、唯僅に報通あるも、界域を超えず、亦諸佛に歷事供養すること能はざるなり。報通とは、具に論ずるに三種あり。一に生得通、宿習に依るが故に、鬼畜等の中に於て神通を發することあるをいふ。二に報得通、諸の天人等の飛騰自在なる是なり。三に修得通、禪定により

て聲聞及外道等の修行する所、卽定果の神通なり。又此の中、唯五通をいひて漏盡をいはざるは、彼の國に生ずと雖も、その初心の者は未だ煩惱所知の二障の漏を盡さざるに由ればなり。九に不善とは、兜率に生ずる者は、旣に是れ凡夫にして、欲界に居住す。縱令彌勒に逢ひて親しく大乘を聞くも、具惑の凡夫更に願の攝する者なきが故に、還つて諸惑不善の心を起すを免れず。然るに極樂に生ずる者は、此の惡境に對せず、本願に乘ずるが故に、不善永く亡ず。十に滅罪とは、彌勒經によるに、若し一念の頃も彌勒の名を稱せば、千二百劫の生死の罪を除き、又唯彌勒の名を聞いて合掌恭敬すれば、五十劫の生死の罪を除き、若し彌勒を敬禮する者は、百劫の生死の罪を除くといへり。然るに觀經によるに、一聲阿彌陀佛と稱する時は卽八十億劫生死の重罪を除き、必定して西方に生ずることを得るといふ。滅罪の多少固より同日にして論ずべからざるなり。十一に受樂とは、兜率は五受間はり生ずと雖も、極樂は憂苦あることなく、唯喜樂捨のみ。十二に受生とは、兜率の受生は、或は男女の膝上懷中に在るも、淨土の受生は、唯華裡或は寶殿の中に居す。已上略して十二種の義を出す。廣く論せば無邊にして具に說く可らず。但し此の如く二處の勝劣懸かに殊れりと雖も、

幷に佛經に勸讚する所なれば、人の所願に隨つて幷に往生することを得べし。故に兜率を志求するものは、西方の行人を毀ること勿れ、西方に生せんことを願ずる者は、兜率の業を謗すること勿るべし。然るに古今の碩實高僧、皆かくの如く西方は兜率に勝ること百千萬倍なりと知ると雖も、而かも淨土は殊方なるが故に、恐くは往生すること難かるべしと謂つて、自ら兜率の業を修せり。是れ併しながら未だ經意を明めざる者の言なり。凡そ兜率と西方との所修の行を比較するに、十五同八種異あり。十五同とは、一には觀行同とは、上生經に說く、一一に兜率天上の妙快樂を思惟せよ、是の觀を作す者を名けて正觀となし、若し他觀するを名けて邪觀と爲すと。觀經に亦說く、寶地寶樹寶池佛菩薩等、一一に觀察せよ、是の觀を作す者を名けて正觀となし、若し他觀する者を名けて邪觀となすと。此れ卽各、その所願に隨つて、天宮と淨土との依正莊嚴を觀ずるなり。卽觀行相同し。二には持戒同とは、上生經に說く、佛の禁戒を持すべしと。觀經に亦說く。三歸を受持し、衆戒を具足して、威儀を犯せずと。此れ卽持戒同なり。三には十善同とは、上生經に說く、十善を思惟し、十善道を行せよと。觀經に亦說く、慈心にして殺さず、十善業を修すと。此れ卽十善同なり。四には懺悔

同とは、上生經に說く、是の菩薩大悲の名字を聞いて、五體を地に投じ、誠心に懺悔すれば、諸の惡業速に淸淨なることを得と。鼓音聲經も亦復說く、六時に專念して五體を地に投ずる等と、此れ卽その同なり。五には造立形像有爲功德同とは、土生經に說く、形像を造立し、香花衣服繒蓋幢幡を以て供養すと。無量壽經に亦說く、多少に善を修し、齋戒を奉持し、塔像を起立し、沙門に飯食せしめ、繒を懸け、燈を燃し、花を散じ香、を燒くと。此れ卽有爲功德同なり。六には聖迎同とは、上生經に說く、彌勒菩薩眉間の白毫、大人相の光を放つて、諸の天子と與に曼陀羅華を雨して、此の人を來迎すと。觀經に亦說く、阿彌陀佛、大光明を放つて行者の身を照らし、諸の菩薩と手を授けて迎接すと。此れ卽來迎同なり。七には稱念同とは、上生經に說く、若し一念の頃も彌勒の名を稱すべしと。觀經に亦說く、合掌叉手して南無阿彌陀佛と稱すと。此れ卽その同なり。八には禮拜同とは、上生經に說く、禮拜係念すと。淨土論に亦說く、身業恭敬門とは、彌陀佛を禮拜するをいふと。此れ卽禮拜同なり。九には廻向願生同とは、上生經に說く、此の功德を以て回向して彌勒の前に生せんと願ずと。觀經に亦說く、此の功德を以て回向して極樂國に生せんと願求すと。此れ其の同なり。十には讀誦經典同とは、上生經に說く、經典を讀誦せよと。觀經に亦說く、大乘方等經典を讀誦すと。此れ卽讀誦同なり。十一には往生同とは、上生經に說く、譬へば、壯士の臂を屈伸する頃の如くに、卽兜率陀天に往生することを得と。觀經に亦說く、彈指の頃の如く、或は一念の頃の如く、或は壯士の臂を屈伸する頃の如くに、卽西方極樂世界に生ずと。此れ卽ち其同なり。十二には見聖同とは、上生經に說く、彌勒に値遇すと。觀經に亦說く、佛の色身衆相具足せることを見ると。此れ卽同なり。十三には歸敬同とは、上生經に說く、頭面に禮を作すと。觀經に亦說く、卽金臺を下りて禮佛合掌すと。此れ卽歸敬同なり。十四には聞法同とは、上生經に說く、未だ頭を擧げざる頃に便ち法を聞くことを得と。觀經に亦說く、光明寶林妙法を演說すと。此れ卽同なり。十五には不退同とは、上生經に說く、無上道に於て不退轉を得すと。阿彌陀經に亦說く、衆生生ずる者は皆是阿鞞跋致なりと。此れ卽不退同なり。之を十五同となす。八異とは一には本願の有無異れり。所謂兜率上生は彌勒に本と誓願なし、西方往生は法藏比丘、昔し四十八願を發せり。願なき時は自ら浮んで水を渡るが如く、願ある者は舟に乘じて遊ぶが如し。二には光明の攝不殊れり。所謂兜率の業を作すと雖、慈氏の神光來りて攝受せず。西方の

業を修する者は、阿彌陀佛の白毫、毛孔、及相好等の一切の神光、皆念佛の衆生を照らして、攝取して捨てず。凡そ光照ある者は、晝日に嘻遊するが如く、光照なき者は、闇中に來往するに似たり。三には守護の有無異れり。所謂兜率の業を修すと雖も、慈氏菩薩來りて守護せず。西方の業は然らず。觀經によるに、無量壽佛化身無數にして、觀世音大勢至と常に此の行人の所に來至すと。稱讚淨土經によるに、必ず是の如き十方面に住する十殑伽沙の諸佛世尊の爲に攝受せらると。十往生經に依るに、佛二十五菩薩を遣はして、常に行人を守護せしむと。然るに守護ある者は、多人共に遊びて强賊の逼らんことを畏れざるが如く、守護なき者は孤り嶮徑を行きて必ず暴客に侵掠せらるゝが如し。四には舒舌の有無同からず。所謂兜率の業は十方諸佛の舒舌の證なしと雖も、西方極樂を勸むるには十方の諸佛皆舌を舒べて不虛を證誠す。若し兜率は往き易く、淨土は生じ難からば、十方の世尊何を以て西方を證勸せんや。五には衆聖の誓不異れり。所謂兜率の業は衆生の守護あることなしと雖も、西方は華聚菩薩山海惠菩薩等あり。此の菩薩は誓願を發して、若し一衆生も西方に生ずることを盡きざるあらば、我れ正覺を取らずと。六には滅罪の多少同からず。上生經によるに、彌勒を稱念すれば、千二百劫の生死の罪を除くと。然るに觀經には、南無阿彌陀佛と稱すれば、念々の中に於て八十億劫生死の罪を除くと。七には重惡の生不同からず。上生經によるに、若し善男子善女人諸の禁戒を犯し、衆の惡業を造ると。然るに觀經には、或は衆生あり、不善の業五逆十惡を作り、諸の不善を具すと。是れ卽五逆罪を造るものは、兜率に生ぜずと雖も、西方淨土には生ずることを得るなり。八には教說の有無異れり。所謂兜率生じ易く、西方往き難しとは、此れ卽凡夫の輩の言にして、之を聖典に窮るも、竟に經說なし。曷ぞ指南とするに足らんや。然るに西方易生は自ら經說あり。無量壽經に、橫截五惡趣、惡趣自然閉、昇道無窮極、易往而無人と。此れ卽佛敎顯然たる者なり。之を八異となす。是の如く十五同あるが故に、獨り西方を難生と說くべからず。況や八異あるが故に、却て西方易生の理成すべきおや。諸の學者、理及敎を尋ねて、審かに難易二門を鑒み、永く其の疑惑を除くべきなり(群疑論第四)

七　十疑論の二義比較

十疑論(天台の作と傳ふ)に二種の比較あり。一には兜率は縱ひ十善を持すれども、恐くは生ずることを得ず。何となれば彌勒上生經に云く、衆の三昧を行じ、深く正定に

入りて方に始めて生ずることを得、更に方便接引の文なし。阿彌陀佛の本願力光明力を以て、但念佛の衆生を攝取して捨て玉はざるには如かず。又釋迦九品の教門を開き、方便引接して慇懃に發遣して、彼の淨土に生せしむ。故に衆生但能く彌陀佛を念ずれば、機感相應して必ず生ずることを得るなり。二には兜率天宮は是れ欲界なれば、退位の者多し。水鳥樹林風聲音樂ありて、衆生聞く者皆悉く佛を念じ、菩提心を發して、煩惱を伏除すること有る事なく、又女人あるが故に、皆五欲に愛著するの心を生ず。彌陀の淨土には、水鳥樹林風聲音樂ありて、衆生聞かん者佛を念じ、菩提心を發し、煩惱を伏除することあるには如かず。又女人二乘の心なく、純一大乘清淨の良伴のみあり。此の故に煩惱の惡業畢竟起らず、遂に無生の位に至る云云。又云く、彌勒當來出世するも、當さに聖果を得ざる者あり。未だ彌陀淨土の但彼國に生じ已れば、悉く無生法忍を得て、一人として三界に退謝して、生死の業の爲に轉せらるゝ者なきに如かず。師子覺の如きすら、尚兜率に生じて五欲に耽著す、況や凡夫おや、是の故に兜率に生ずることを求むべからず。

八　西方要決の十義比較

西方要決(慈恩の作と傳ふ)に復十種の優劣をかゝぐ。一に命有長短とは、兜率の壽命は只四千年、西方の壽命は一百千萬億那由他阿僧祇劫なり。二には處居內外とは、兜率は惠業若し多きは、卽內院に生じて、親たり彌勒に侍するも、惠少く福多き者は、外院に生じて、慈尊を見ず。淨土の中には一に內外なし、報優劣ありと雖も、俱に是聖賢なり。三には境分穢淨とは、若し兜率の內院に生じて、彌勒を見る者は、能く淨緣を發す、外院は香華樓臺音樂皆染想を生ず。西方は然らず。樹鳥水網音樂等、總べて六根に觸對するもの、皆道を長ぜざる者なし。四には身報兩殊とは、天中の有情は男女兩殊なり。故に更に相染著して諸の道業を障ふ。西方に生ずる者は、皆是丈夫、故に淸潔にして染なし。五には種現差別とは、若し天上に生ずる者は、種現の惑俱に行ずるも、西方に生ずる者は、唯種にして長く現惑なし。六には進退修異とは、若し天上に生ずれば、惠力輕微、亦男女あるが故に、多く退を免れず。極樂に往生する者は、惠力增强にして、既に欲行を絕す。唯轉進ありて退轉なし。七には界非界別とは、兜率に上生する者は、未だ欲界を離れず、故に火災起る時は、焚燒せらるゝを免れず。然るに西方に生ずれば、永く三界を辭す、故に水火風皆幷に害すること能はず。所謂彼の淨土は形質あ

るが故に無色界に非ず、地に依りて居するが故に色界に非ず、婬及段食なきが故に欲界に非ず、故に總じて三界の攝に非るなり。八には好醜形乖とは、生れて天中に在る者、男女同からず、好醜異れり。若し淨土に生ずれば、悉皆金色にして好醜あることなく、悉く丈夫の相を具す。九には捨生不同とは、天に生ずる時は、人の接引する者なきも、淨土に生ずる時は、聖衆來迎すと。然るに彌勒上生經に依るに、彌勒菩薩眉間の白毫を放つて、此の人を來迎すといふ。今接引なしといふは誣妄なり。十には經勸多少とは、兜率に生ずることを勸むるは、唯上生經のみ。且又慇懃ならず。淨土を勸勵するは、經論極めて多く、其の說亦誠に慇懃なり。

九　彌陀經通讚の十義比較

又彌陀經通讚(慈恩の作と傳ふ)に、兜率の十劣、淨土の十勝あり。十勝とは、一に化主所居勝、二に所化命長勝、三に國非界繫勝、四に淨方無欲勝、五に女子不居勝、六に修行不退勝、七に淨方非穢勝、八に國土莊嚴勝、九に念佛接情勝、十に十念往生勝なり。天宮の十劣とは、一に所居國土劣、二に所化壽促劣、三に界繫攝屬劣、四に彼天有欲劣、五に男女雜居劣、六に修行有退劣、七に穢方非淨劣、八に國土莊嚴劣、九に善念攝情劣、十に修行勞苦劣なり。此の十種の勝劣を出せるも、而かも之を詳釋せず。

十　袾宏の三義比較

又雲栖の袾宏は、略して三義を擧げて二土の殿最を評判せり。一に因の難易同からず。凡そ兜率內院に生ずるには、必ず智斷功德を具足して、聖流に與かる者ならざるべからず。然るに極樂は但生を求むる者は、淨念成就して卽克く願の如く往生す。惑業の斷不を論ぜざるなり。故に因の難易同からず。二に境の勝劣殊れり。所謂內院は三界の中を超えずと雖も、極樂は三界の外に出過せり。加之、疑城すら尙女人なしと雖も、兜率には卽五欲あり、故に極樂の下品も、尙兜率天宮に勝るべし。三に主師資別なり、彌陀は已に佛果を證すと雖も、彌勒は尙等覺に居す、故に彌勒は觀音勢至等と同く彌陀導師の側に侍せざるべからず。卽彌陀は師にして、彌勒は資なり。故に彌陀を見る者は卽彌勒を見るも、彌勒を見る者は未だ必ずしも彌陀を見ること能はず(彌陀經疏鈔四之一)

十一　元賢の十義比較

鼓山元賢は亦十種の優劣を較量せり。一には極樂は十念して生ずべきも、兜率は必

ず須く衆の三味を修し、深く正定に入らざるべからず。故に上生を難となす。二に極樂は阿彌陀佛大悲願力を以て、誓つて接引を垂るゝも、兜率は則彌勒に接引の誓なし。三に極樂は阿彌陀佛大光明力を以て、行人を照觸し、身心慈和して其の刹に來生すべきも、兜率には是の如き事なし。四に阿彌陀佛の說法は、諸佛に十倍し、又衆生その志樂に隨つて、聞かんと欲する所の法、自然に聞くことを得るも、兜率には無き所なり。五に極樂は女人の衆生を擾亂することなきも、兜率は天女微妙諸天耽玩して、自ら勉ること能はず。六に極槃に生ずる者は、皆三十二相八十種好を得て、神通具足するも、兜率には無き所なり。七に極樂に生ずる者は、自然に煩惱を伏滅して、卽不退に登るも、兜率は日に不退の法を說いて、衆生を敎化すと雖も、而かも未だ必ずしも不退に登ること能はず。八に極樂に生ずる者は、卽此の一生に直に道場に至りて、無上覺を成ずるも、兜率は然らず、佛の下生に隨ふも、未だ必ずしも盡く聖果を證せず、況や無上覺をや。九に極樂に生ずる者は、無量壽を得て、佛と齊等なるも、兜率には無き所なり。十に極樂に生ずる者、若し十方諸佛に供養せんと欲せば、其の所欲に隨つて、供具自然に現前し、須臾の間に遍く十方に至りて、諸佛に供養し、卽食時に於て還つて本國に到るも、兜率には是の如き事なし。蓋し其の顯然なるものを較量せば、卽此の十種に過ぎずといへども、細にして之を求めば、應に無量あるべし(淨慈要語)

又往生要集卷上末、選擇本願念佛集卷上等にも、兜率西方比較の說あり。文を繙て之を知るべし。

三　安世高の事蹟に就て

安世高は、支婁迦讖と共に後漢譯經の泰斗として、又始めて無量壽經を翻傳(聊か疑あるも)せし三藏として有名なる者なり。其の事蹟は出三藏記集第十三、梁高僧傳第一、乃至開元錄第一等に出だす所なり。此等の諸傳に依るに、世高は安息國王正后の太子なりといへり(安息は今の波斯の地にして、曾ては一たび榮えたる國なり。安息の稱は國名にはあらずして、國都 Antioch を漢人は安息の二字を以て顯はし、遂に國名として呼ぶに至れる者なりといふ。アンチヨクは今の露領メルブの故地なり)然るに世高の父なる此の安息國王は如何なる名にてありしか、素より古人の說もな

き所なりと雖も、この頃、偶、後漢書西域傳を讀むに、安息國の條下に、後漢和帝永元十三年(西紀一〇一)安息國王滿屈なる者、師子及び條支の大鳥を獻ぜしことを記せり。滿屈王に關しては、此の單なる事實の外、いづれの書にも何事をも記載せざれば、其の生死の年月及び子孫の有無等を知ること固より能はざる所なりと雖も、世高の支那に渡來せし年時より考ふる時は、滿屈王こそ其の父ならめと推定せらるゝ者の如し。

道安目錄に依るに、世高は後漢桓帝建和二年(西紀一四八)より靈帝建寧中に至る二十餘年に三十餘部の經を譯出せしことを記せり。然るに此の建和二年は、思ふに世高が譯經に從事せし最初の年なるべく、而して其の洛陽に達せしは恐らく其の以前に在るべし。何となれば異域の三藏が始めて支那に來るも、其の初は日常の言語すらも猶自由なるべからず、況や深遠なる經典を譯出するに於ては素より若干の習語時間を要すること言を俟たざればなり。されば出三藏記集等には、高は桓帝の初を以て、始めて中夏に到るといひ、加之、若し開元錄第一に依れば人本欲生經は、高が永嘉二年(西紀一四六)に譯出する所なりといへり。若し此の開元の說に從へば高

は永嘉二年以前に支那に渡來せざるべからざるも、智昇は高が本傳中に、出三藏記集に同く、以漢桓初始到東夏と記し居れば、永嘉二年は其れより七年以後の元嘉二年(西紀一五二)の誤寫なるやも知るべからず。是に由りて高の渡來は、桓帝の初め卽ち建和元年(西紀一四七)と定むるを先づ〳〵安全とすべし。

開元錄に依るに世高の死は、靈帝の建寧三年(西紀一七〇)に在りといへり。享壽詳かならざるも、試みに七十を以て終れる者とすれば、高が生誕は西紀一〇一に在らざるを得ず。若し然らば滿屈王の子として時代殆ど相應するが如し。高が位を避けて後諸國を遍歷し始めて支那に入りたるは西紀一四七に在れば、今諸國を遍歷せし時間を凡そ七年と假定して、滿屈王の死を西紀一四〇頃に置くことを得べきか。さすれば滿屈王は西紀四〇頃に卽位せし安息國王アルサケス十四世の孫、若くは曾孫に當れる者にして、羅馬帝國と干戈を交へつゝありし最も多事の日に君臨せし者の如し。

梁高僧傳に依るに、別傳には世高は晉太康の末(西紀二八九頃)桑垣に來至し、尋いで豫章に往きて郡亭の廟神を度せりと記し、廈中雍の荊州記には晉の初(西紀二六五

頃)に沙門安世高あり、郏亭の廟神を度して財物を得、白馬寺を荆城東南隅に立つと記し、又曇宗が塔寺記に丹陽の瓦官寺は晉哀帝(西紀三六二―三六五)の時、沙門惠力の立つる所、後沙門安世高、郏亭廟の餘物を以て之を治せりと記すといへり。是に依るに世高渡來の年時には當時異說ありしことを知る。然るに現今史學者の說に據れば、安息國は西紀二二四頃、波斯人アルタ、クセルクゼス一世の爲に亡されたる者なりといへり。若し然らば世高は斷じて魏の建興以後の人なるべからず。何となれば出三藏記集等に明かに高を安息國王正后の太子となし、又後王薨將嗣國位乃深悟苦空厭離名器行服既畢遂讓國與叔出家修道といへば、世高の當時は安息は未だ亡びざること言を要せざればなり。荆州記等の說は或は安法欽と混同せしにあらざるか。

三　支道林の阿彌陀佛像讚と極樂有女人說

極樂淨土に女人なしとは、諸經論の殆ど一致して說く所なり。平等覺經第一に、其國中、悉諸菩薩阿羅漢、無有婦女、壽命無央數劫。女人往生、卽化作男子とあり。大阿彌陀經卷上、無量壽經卷上、大寶積經第十七、無量壽莊嚴經卷中、梵本無量壽經、及悲華經第三等には、彌陀の本願の中に轉女成男の願あることを說き、天親の往生論には、女人及根缺、二乘種不生とあり。之に依りて古來何人も極樂淨土には女人あることなしと說けども、獨り支道林の阿彌陀佛像讚序には女人ありとなせり。廣弘明集第十五に其の序を出せる中に云く

其佛號阿彌陀、晉言無量壽、國無王制斑爵之序、以佛爲君、三乘爲教。男女各化育於蓮華之中、無有胎孕之穢也。

支道林は、梁高僧傳第四に依るに、諱を遁と云ひ、王洽、劉惔、許詢、郗超等と塵外の交を結び、頗る聲譽あり。東晉太和元年閏四月、五十三歲を以て寂す。時已に草創に屬するが故に其の說甚だ興味あり。

蓋し支道林が斯の如き說をなせるには、必ず其の所據なかるべからず。仍て阿彌陀鼓音聲王陀羅尼經を案ずるに、其の中に果して言へることあり。

西方安樂世界、今現有佛、號阿彌陀。若有四衆、能正受持彼佛名號、以此功德、臨欲終時、

阿彌陀佛卽與大衆往此人所令其得見見已尋生慶悅倍增功德以是因緣所生之處、永離胞胎穢欲之形純處鮮妙寶蓮華中自然化生。

阿彌陀佛與聲聞俱如來應正遍知其國號曰清泰聖王所住其城縱橫十千由旬於中充滿剎利之種阿彌陀佛如來應正遍知父名月上轉輪聖王其母名曰殊勝妙顏子名月明奉事弟子名無垢稱智慧弟子名曰賢光神足精勤名曰大化爾時魔王名曰無勝有提婆達多名曰寂靜阿彌陀佛與大比丘六萬人俱。

此の中、阿彌陀佛に母ありと說けるは、卽ち彼の國に女人ありと爲せるものにして、又「永離胞胎穢欲之形純處鮮妙寶蓮華中自然化生」と言へるは、彼の支道林の所謂「男女各化育於蓮華之中無有胎孕之穢」の語に吻合するを見るべし。

又此の鼓音聲王經の所說は、頗る他の淨土の諸經と其の趣を殊にせり。彌陀に父母及び子等ありと言ふのみならず、極樂世界中、別に彌陀聖王所住の城あり、縱橫十千由旬にして淸泰城と號し、中に剎利種充滿すと說ける如き、宛然釋迦及び其所住の國土たる娑婆の都城と相似たり。然るに阿閦佛國經を案ずるに、其の所說、今の經と相類するものあり。彼の經中には、阿閦佛の淨土たる阿比羅提世界に女人ありと言ひ、又其の國中には王及び王治あることなく、但だ法王阿閦如來のみありと說けり。是れ支道林の序に「國無王制斑爵之序以佛爲君」と云へるに符契するを見るべし。阿閦佛國經は、後漢支婁迦讖の譯にして、歷代三寶紀第二等には、之を桓帝の建和元年所出となせり。兎に角翻譯の年代古く、淨土の說相としては頗る醇朴なるものあるを覺ゆ。鼓音聲王經は失譯にして、始めて梁錄に見ゆと雖も、支道林が之を引說するを以上、東晉以前既に其の翻傳ありしことを知るべく、內容の記載に依りて察するに、他の淨土の諸經よりも其の成立最も早きに在るが如く、極樂淨土の說として、恐くは原初的のものなるべし。

三　曇鸞法師の傳及び著作

曇鸞法師は、支那の淨土敎史上で極めて重要なる位置に居らるゝ人である。菩提流支から天親菩薩の往生論を受けて之を註解されたが、之が支那で淨土敎に關する著作の始めであり、又天親の淨土思想を支那に弘傳された最初の祖師である。天親

の思想だけではなく、論註の始に十住毘婆沙論の難易二道の說を引かれてある處から見ると、曇鸞法師は、龍樹菩薩の淨土思想と天親の說とを融和せられた人と言はなければならぬ。道綽禪師は面受では無いけれども、曇鸞法師の芳蹟を慕ふて淨土門に歸入された方であり、其の門人に善導大師が出られて、それから日本の淨土宗も開かれた譯であるから、つまり曇鸞法師は、支那日本の淨土敎の最初の祖師であることが解かる。

曇鸞は北魏の人で、魏孝文帝承明元年に雁門と云ふ處(今の山西省代州)に生れられた。其家は五臺山の附近であつたが、十餘歲の頃、往いて此の山に登り、其遺跡を見て心神歡悅し、尋いで出家せられたのである。乃ち廣く內外の經籍を研習し、殊に四論及涅槃に精通せられた。是の故に古より鸞を三論宗の人だともいふてゐる。嘗て大集經を註解せんとしてその過半の功を終はつたが、忽ち氣疾を感じたに由つて卽筆を停めて周く醫療を行ふた。疾癒えて後は、復前作を繼がうとしたが、人命は危脆である、何時命終するかも解らぬ。寧ろ仙方を究め修習して置いて、後に佛法を弘傳する方が宜からうと思ひ立ち、江南の陶隱居と云ふ者が深く方術に長じて居ると聞いて、意を決して建康(南京)に赴いたのである。時に梁の大通年中であつた。乃名を有司に通じて北國の虜僧曇鸞陛下に拜謁を遂げたいと述べたが、當時梁と魏とは數〻兵を交へて居た。有司は一時その異圖あるかを疑つたが、やがて其の疑も解けて之を武帝に奏聞した。武帝は鸞を引いて太極殿に入り、階を降りて禮接し其の來由を問ふた。鸞曰ふ、佛法を學ばうとするも生命の短促なるを恨む、故に遠く來りて陶隱居に就て仙術を求むるのである。帝曰ふ、彼れは厭世隱遁の士で、比ろ屢〻徵せども決して來ぬのである、乞ふ往いて之を訪へと。鸞は乃で陶の所に往つたが、陶は鸞の爲めに欣で仙方十卷を與へ以て鸞の意に酬ふたのである。鸞は已にその所志を果した。辭して魏境に還り名山に往いて方に依りて修治せんとし、行く〳〵洛下(洛陽)に至つた時、適〻三藏菩提流支に逢ふたのである。鸞卽ち流支に向つて佛法の中に長生不死の法の此の土の仙經に勝るものありやと問ふた。時に流支地に唾して曰ふ、是は何の囈語ぞ、元より相比すべきものでない。此の方何處にか長生不死の法があらう。縱ひ長年を得るといふも、たゞ少時死せずといふに過ぎぬ。終にはまた三有に輪廻するのみであるといふて、卽觀經(或は謂ふ往生論)を以て之に授けて、此れこ

そ大仙の方である、之に依りて修行するならば當に生死を解脱する事を得べしといはれた。鸞因て之を頂受し卽悉く賫す所の仙經を燒き捨て、それ以來は自行化他專ら淨業を勸進し、遠近その化を被る者甚だ衆かつた。魏主之を重じて神鸞と號せしめられたのである。因てまた勅を下して、並州(今の太原)大巖寺に住せしめたが、晩に復移つて汾州(今の汾州)北山石壁玄中寺に住せられた、時には仙山の陰に往きて徒衆を聚めて西方を敷講せられたのである。嘗て一居士が鸞に向て十方佛國皆淨土である、法師が獨り意を西方に注ぐは偏見に非ずやと謂ふた。其時鸞は之に對へて、吾既に凡夫にて智惠淺短である、未だ地位に入らぬゆへに須く念力を一に均うすべきである。草を置て牛を引くに、恆に心を槽櫪に繫ける樣に徒らに縱放にして、全く歸する所なきを得べからずといはれた。其後も復た難者が澤山にあつたが而も決然としてその心を動かされなかつたのである。是の故に一切道俗一たび鸞と相遇ふ者は、若し未だ正信を生ぜざる者は勸めて信を生ぜしめ、若し已に信を生ずる者は、皆勸めて淨國に歸せしめたのであつた。魏の興和四年五月廿日、鸞は平遙の山寺に在り疾によりて將に終らんとせられた。乃ち半夜使を遣して遍く諸村に告げしめた。白衣及出家の弟子三百餘人一時に雲の如く集つたのである。鸞卽沐浴して新淨衣を著け手に香爐を執り、正しく西に面して坐し、門徒を敎誡して、西方の業を勸め、翌廿六日、日初て出づる時、大衆と聲を齊うして彌陀佛を念せられ奄然として寂せられた。春秋六十有七。壽終の日には旛花幢蓋高く院宇に映し香氣蓬勃音樂繁鬧、寺に集る者普く皆之を見たといふことである。勅して汾西秦陵の文谷に葬り、塔を營み碑を立てたと云ふ。其著す所の書は、往生論註二卷、讃阿彌陀佛偈一卷、略論安樂淨土義一卷、調氣論等である。

此の中、往生論註二卷は天親の往生論を註解した者で、上卷にはその偈頌を、下卷にはその長行を釋して居る。讃阿彌陀佛偈は、無量壽經によりて造つたもので七言の偈が百九十五行ある、彌陀及國土の功德を讃嘆したものである。

略論安樂淨土義は亦無量壽經の單なる論釋と見ることが出來るが、其の中に極樂の三界攝不、莊嚴の多少、三輩の機品等を解說して居る。然るに安樂の靈空は獨り此の書を疑ふて曇鸞の眞撰に非ずといふて居る。卽ち

世所刊行略論安樂淨土義、其文鄙野俚俗、決非曇鸞菩薩撰、具如或問餘說辨。後偶讀

妙玄私記引大論問生他方佛國者爲是欲界非欲界等文乃云什公安樂土義引之爲極樂始知有羅什所撰安樂土義而未敢信因檢興福寺沙門永超寛治八年所集東域傳燈目錄云無量壽經論偈註解一卷曇鸞又云讚嘆阿彌陀佛偈一卷羅什略論安樂淨土義一卷同上。此錄先私記七十二年則信私記不誤安樂土義唯有羅什撰而無曇鸞作矣。然則見行安樂土義本邦無識者株持羅什安樂土義曇鸞註天台十疑論道綽安樂集妄加鄙言糅爲一卷僞名曇鸞必矣。古今蓮宗尙爲菩薩眞書何味歲享保己酉秋九月上旬幻幻庵記

幻々庵とは靈空の別號である。卽心念佛を主唱し談義或問或問餘說等を著はし、その中に安樂土義はその文が鄙拙で和臭が少なくない、まして約心觀佛の義に背けば必ずや曇鸞の眞撰であるまいといふて居る。しかし迦才の淨土論に、鸞は天親菩薩の往生論を註解し、裁して兩卷とし、又無量壽經奉讚、竝に問答一卷を撰集したと記して居る。此問答一卷といふは卽安樂土義を指せることは明かであるから、鸞に安樂土義の著なしといふは、恐くは不可であらう。加之、珍海の決定往生集、記主の論註記、凝然の源流章、皆同く之を眞撰としてゐる。尙その中に記する所を見るに、論註等とその義旨正に相同じく、毫も疑許すべき點もない樣である。尋讚可知不復重序といふたのは、自著の無量壽經奉讚を指せること、また疑ないのである。惟ふに此書は讚阿彌陀佛偈の餘論と見るを至當となすべきものであらう。且つ今東域錄を檢するに、安樂土義の書名はなく、讚嘆阿彌陀佛偈一卷も亦曇鸞撰と記して居る。但彼の錄は寫本であつて訛脫も少くない、靈空の所覽は果して如何であつたか解らぬ。讚阿彌陀佛偈は鸞の著作として古今疑はざる所なれば、之れと同上なる安樂土義も亦鸞の著作たること疑はあるまい。若し然うでなければ讚阿彌陀佛偈も却つて羅什の造る所といはざるを得まい。是れは論據なき臆斷ではないか。又證眞の妙玄私記第六に什公の安樂土義云云といふたのは稍惟むべきである。是は何によりて此の言をなしたのか明かでないが、其の文を見るに、正しく今の安樂土義の三界攝不の說と同じである、且又元曉の無量壽經宗要(遊心安樂道亦同之)の中にも、今の安樂土義に出してある所の渡河著脫の譬喩を引きて、その初に「什公說言」と明記してある。是れ復た甚だ疑べふきことではあるが、さりとて今の安樂土義は羅什の撰に非ざることは言を要せない。何となればその中に什已後の翻なる觀經及往生論を

引き、又向にいふが如く無量壽經奉讃をも指して居るからである。蓋し是れ或は此の書の古本に、誤つて羅什撰と署せし者でもあつたに由るかも知れぬ。更に學者の研鑽をまつ。

二四　無問自筆

經論の僞作は昔から決して尠くはない。いづれの經藏目錄にも大抵僞妄錄といふのがある、これはその當時々々に各〻經論の眞僞を鑑定した者であるが、まだ〳〵其鑑定に洩れて居る者が多い。まして近頃は大乘經といはるゝ幾千卷の經が皆僞說であらうといふ說がある、これは大問題であつて一朝一夕に孰れとも定めることが元より出來ぬ。夫故夫は今姑くお預りにせうが、さて淨土敎に關する著書で色々研究して見ると、先づ天台と慈恩の署名してあるものに僞作が多い樣である。天台の十疑論はいふ迄もなく眞作ではなからうが、眞作として餘り疑はれて居らぬ觀經疏でさへ能く繙續して見ると怪しむべき個所が少くない樣に思はれる。貞享年間に居つた日蓮宗の日堯といふ人は七疑をあげて此の疏を天台の眞作でないと云つたことがある、又享保年間同じ宗旨の日諦といふ人も五難を數へて僞作だといつて居る。委しいことは別に論ずることにせうが兎に角觀經疏も多少問題であるには相違がない。又天台の彌陀經疏といふ極簡單な書がある、これには惠心僧都が略記といふ註釋を一卷書いてゐるが、是れは讀んだ所で別段これといふ疑點もない、而已ならず山家敎典志の中にも天台の著述として列ねてある。けれど孤山の智圓や淨覺などは尙之を附託の文だと謂つて居る。その他、西方淨業文、出離生死要文、勸修淨業記、五方便念佛文など長西錄には皆天台の作だといつて居るが、勿論怪いものであらうと思はれる。慈恩の淨土に關する著書に就いては予が嘗て論じた通り西方要決も通讚も恐らく眞撰ではなからう。かく天台と慈恩の署名してある書に僞作の多いのは、此二師が支那佛敎史上に非常の位置を占めて居るからである、殆ど支那佛敎の思想は此の二三師で支配せられてゐるからである、此の二三師の云つたことなら一般に信憑さるゝからである。これで天台や慈恩の眞價は側面から能くわかる、而已ならず其のお蔭で淨土敎も餘程弘布したのである。古人の色

色の辛苦は洵に感謝するに餘りありだが、眞正の淨土教史の研究には第一に是等のことを揀判せねばならぬ。

麒麟聖財論が菩提流支の作でないことは固より論ずる迄もない。あれは日本出來であつて尤も拙い擬託の遣方であつた。曇鸞の略論安樂淨土義は多分眞撰であらうが、是にも昔から異論はある、享保十四年に幻々庵といふ人が略論安樂淨土義非曇鸞撰といふ一篇の文を書いた。この人の意見で見ると、安樂土義といふ書は、素と羅什の作であつて、東域錄や妙玄私記に其事を書いて居るが今は傳つてをらぬ。現に流行してある略論は本邦無識の者が羅什の安樂土義や論註などを採摘して僞作した者であつて、決して曇鸞の眞撰ではないといふのである。しかし東域錄をしらべて見ると略論のことは一向その中に見えてをらぬ。なれど此の錄は昔から寫本で傳つてゐるのであるから、傳寫の間に種々錯脫があり又異本がある。それで幻々庵の見た本には略論も羅什撰と書いてあつたかも知れぬ。それは兎も角、妙玄私記の方には現に什公安樂土義云々と明記してある。これが一つ怪むべき點である。或る人は迦才の淨土論に曇鸞法師は天親菩薩の往生論を註解し、又無量壽經奉讃七言偈百九十五行竝に問答一卷を撰集すと書いてある。此の問答一卷といふのは疑ひもなく略論のことであるから、曇鸞が略論を作つたのは、尤も明白であるといつて居る。勿論見行の略論その儘が元より羅什の作ではない。あの中には羅什の死後に翻譯になつた觀經も引いてあり往生論も引いてある。而已ならず「尋讃可知不復重序」とあるのは恐らく大經奉讃を指すのであらうから、今の略論は定めし曇鸞の撰であらうと思ふが、しかし玆に今一の有力の違證がある。それは外でもない、元曉の無量壽經宗要の中に今の略論にある著脫の思云々の譬の全文をあげて、これを什公說言と書いてをることである。羅什には外に淨土に關する著書もないから、什公說言が眞實なら、是も確かに安樂土義を指した者と見なければならぬ。さすれば安樂土義といふ書は羅什も作り曇鸞も造つた者であらうか。但しは元曉も謬り證眞も誤つた者であらうか。若しさなくば幻々庵のいふ如く今の略論は後人の僞作であらうか。更に宗學者の研究を要する所である。

羅什が若しも安樂土義を作つたとすれば餘程面白いと思ふのである。羅什は彌陀經の最初の翻譯者であり、又思惟要略法を譯出して、利鈍の二根が無量壽佛を觀ず

る相を明した人である、天竺往生驗記は羅什の眞譯ではあるまいが、それにしても兎に角淨土敎を傳譯したことは事實である。まして廬山の慧遠と數回の往復をして親密に交際した計りでなく、其の弟子の僧叡、道生、曇順、曇翼など皆蓮社に入りて念佛を事としたことから考へると、師の羅什も多少淨土敎を修したかも知れぬと思はれるのである。若し多少でも修した事蹟が擧れば、必ずしも羅什が安樂土義を作らぬと斷言することが出來ぬ。之も一つ研究を要する所である。

二五　天台觀經疏の眞僞を論ず

觀無量壽佛經疏は、古來天台智顗禪師の眞撰と謂へり、題下に天台智者大師說と署す。然るに文義を精讀するに頗る疑僞に亙る者なきに非ず、今少く之を論評して大方の批正を待たんと欲するなり。蓋し此の疏を初めて本邦に齎せし者は最澄にして、彼が延曆廿四年(西紀八〇五)に撰せる將來台州錄の中に、觀無量壽經疏一卷廿四紙智者大師出とあり、是れ恐くは此の疏が記錄にあらはれたる最初の者ならん。其

の後永超の東域傳燈錄、義天の敎藏總錄、志磐の山家敎典志等に皆此の疏を列ねて智顗の撰となせり。又初めて此の疏を注釋せし者は法聰にして、唐元和十二年(八一七)已前に在り。その後宋の義通、竝に行靖は各、觀經疏記を撰し、智禮は尋いて妙宗鈔三卷を、從義は往生記四卷を、如堪は亦淨業記四卷を撰述して此の疏の文義を鈔解せり。其の他遵式、源淸等亦皆之を信じて智顗の出となせり。本邦に在つては慈慧を初め、證眞といへども處々に之を引用して未だその眞僞を疑ふ所あらざるなり。然るに吾が三祖良忠上人は曾て源信の往生要集の中に一も此の疏の文を援引せざることを怪しみ、乃記して云く

宿善有無等者、疑問云、此一段料簡有多不審、二者何不載天台觀經疏乎、非唯此中、一部三卷(往生要集)都不引用此疏有何意乎、若疑此疏不用者、師匠慈慧僧正依疏註九品往生義、門人何不用哉(中略)有會云、不載天台疏、與淨影疏無少不同、淨影天台出時雖同時、淨影是前記、大師(天台)或時引諸師釋、切入自章疏、今觀經疏取淨影釋爲自解釋、知此子細有人知、非大師御釋、强不翫之歟、法聰、智禮作末書者、重大師御釋之故歟

(往生要集記第八)

是れ實に天台觀經疏の眞僞相半ばすることを唱破せられたる者に非ずや。後に記すべきが如く此の疏の文義は殆んど全く淨影の觀經疏に相同じ、縱令或時は諸師の釋を引いて之を自の章疏に切入することありとするも、豈に智顗にして他の十中七八の文を引いて、之に己れの名を署すべけんや、此れ疑議の尤も大なる者なりとす。後又貞享年間(一六八四―一六八七)大野山日蕘なる者あり、七疑をあげて此の疏の僞作なるべきことを論ぜり。其の言に云く

私謂此疏二帖、和漢諸師皆謂天台之所說、且如知禮作鈔、證眞引此而未見勘辨眞僞矣、今案恐非大師之說章安之記、何者、一者一部始終都無四敎五時之判、亦無敎部之名、敎相玄下、雖云大乘方等敎攝、恐非指第三時之文、如此經云讀誦大乘方等經典、只是理性方等耳、而妙宗釋云、於大小乘中此屬大乘、於五時中是第三時方等時也、已上此釋難信云云二者敎相之中、但約二藏漸頓、而判是出淨影疏、何但用他解、而不論今家四敎等乎、非但此文、壽經觀經逆謗除不、亦全用淨影之料簡云云三者現行二卷無量壽經言晉法護譯、然護譯失不傳于世、今大本者曹魏康僧鎧之譯也、何云護乎然源清救云、隋朝錄誤云云大師不知錄誤者不應道理、而憬興等師云法護譯、故知今文非大師耳。四者判三輩等位、皆用別敎地位、既釋題中有六卽判、而正釋中何無圓位乎、但云初住無生忍之一文、粗出今家圓位也。五者經云世尊我昔何罪生此惡子、世尊復有何等因緣與提婆達多共爲眷屬、已上文中二箇世尊、是只夫人指召佛之言、故復有何等因緣者、乃世王與提婆爲親友之義也。然今疏者、約世尊與提婆爲眷屬之義、以引摩納須摩提之往緣、是不應當文矣、此疏及善導疏者、正當嘉祥所斥之義、大師何有麤見乎。六者頻婆夫人俱請侍者、而夫人請世尊自往、頻婆不往、此會釋疏在兩所、其義不同、又安養二乘生不、經論相違會釋亦有二所、其下釋中言異義同、但加攝引之一義而已、上下二卷僅五十紙、一事兩出或同或異、何煩漫乎。七者序說之後五重之前、有宗體釋題之一段、今家章疏餘部無例、故知是他家異疏。今家末學加五重六卽等補續出之、漫傳爲大師之說、其序後釋題、是在他師本書之釋名也云云

加之鳴瀧金映山日諦なる者が享保十五年に輯錄せる聰燈塵壺にも、亦七種の疑目を列ねて、此の疏は智者の眞撰にあらず、好事の者の附託なるべしと言へり。其文に云く

天台觀經疏、智禮作鈔弘通遐邇、人皆爲眞疏、而不疑矣、今詳恐僞非天台所出也、何者、

一者此疏多參用淨影觀經疏故、故台疏上四十云、正爲韋提希及諸侍女、幷是凡夫未證小果。故知是頓不從漸入。遠疏本疏云、此經正爲韋提希說、下說韋提是凡夫、爲凡夫說不從小入、故知是頓(中略)二者此疏上八紙佛本已下二十六行餘文、全同金光明疏禮記卷二而無有一字之差故。三者此疏上云、調達此云天熱、亦云天授、是載唐譯、名義集一云、無性攝論云唐云天授、西域六云提婆達多唐云天授。既引唐譯、故定非隋時所述也。四者天台所覽本、觀字在下、故止觀七云無量壽觀、妙句八云無量壽觀經、輔行一中亦爾。然今疏題、觀字卽在上、是同淨影疏準向可知。又有觀字上下異本、出于諸錄、武周刊定三、觀無量壽經一卷亦名無量壽觀經出長房錄、內典錄四云無量壽觀經、開元錄五上同刊定也、玄義分傳通記三擧諸師所覽異本、同糅鈔十三往看。五者章安荊谿章疏中未見此疏名、故、又撿諸錄中、大唐內典錄第五隋朝傳譯佛經錄第十七之餘、同第十歷代衆經有目闕本錄第五、列出天台所撰圓頓止觀等一十九部中無之也。六者此疏會往生論二乘不生云、經說現今論擧本始等、然往生論約報土故、如瑜伽論曰第三地菩薩生無異生菩薩及二乘得生彼、具如玄眞記第六云云。若同居淨土則凡夫二乘生故、卽如維摩疏第一、何有此會釋耶。七者明九品位、乃別敎伏斷位也、然是以淨影種性解行等六種性位相釋之、而對當九品殊於彼而已。略以此七條辨觀經疏是非天台所出矣、故知好事者拾纂台家諸文、兼糅雜淨影疏附託名於天台歟

その他日賢亦九由をあげて之を議せりといふ。蓋し此等の諸僧は幷に日蓮の徒黨なるが故に、此の疏の僞作ならんことを希ふの事情なきに非ず。所謂像法迹化の祖たる智顗その人に、彌陀鼓吹の思想ありしとすれば、彼等一輩の標榜たる念佛無間を鼓說するに少からざる支障を感せざるを得ず。是の故に彼等の論說は始より眉に唾して之を批讀するを要すと雖も、今の言議の如きは自ら允正なる者なきにあらず、此れ卽此の二師を援引する所以なりとす。

但し日堯の中第一疑は、知禮の如く(法聰亦同)之を解するも敢て不可なき者の如し。已に此の經を釋するに五重玄義ありといへば、その第五は言ふ迄もなく敎相ならざるべからず。敎相は卽五時八敎なれば、此の經を第三時方等の攝となせること寧ろ當然といはざるべからざればなり。第二疑は固より疑ふべし、されど淨影を用ゆるの文は決して此の一二に止らざるを知るべし。第三第四第五亦甚だ重要ならずと雖も、疑端となす而かも可なり。第六第七は此の疏の錯雜煩漫なるを指摘せるも

のにして疑議の稍大なる者といふべし。且く第六疑の中、頻婆夫人云云の會釋兩所に在りとは卽ち

問頻婆何故遣人說法韋提何故如來自往答父願聞法遣人傳授爲化義足母求生淨土非佛不開故須自往（台疏上二十右）

問前頻婆請弟子意在如來今夫人亦請弟子意在佛何故前請遣弟子今請自往耶解有二義一閣王與調達殺父如來若躬赴恐世王起怨嫌心爲護彼故不得自往二者佛法寄在國王頻婆定死閣世當爲國王如來若往者王得國主佛法不行故不得往夫人無此諸事如來自往（同二十四左）

此の兩所の會釋を見るにその義互に同からず、僅々五十紙內外の書にして已に兩所の會釋を設け、且つ其の義を殊にするが如きは眞に疑となすに足れり。況や前段の會釋は卽淨影觀經疏の全文なるを見ば、何人といへども更に大に驚かざるを得ざるべきをや。試に淨影疏を見るに左の如し

以何義故前宜遣人後身自往釋言前者頻婆沙羅宜願聞法遣人傳授爲化義足故身不往韋提夫人求生淨國淨土之化非佛不開故須身趣（本十六左）

彼此豈に殆ど全同に非ずや。又二乘不生の會釋兩所に在りとは卽ち

釋會經論者問依往生論二乘不得生此經中輩小乘得生答正處小行不生要由垂終發大乘種爾乃得生經說現今論舉本始何故復證小果問釋雖復垂終發大心先多學小至彼聞苦空無常發其本解先證小果得小果已於小不住亦還入大（台疏下十四右）

釋會者論明小乘不生者決定（種性）不生此中明生退菩提心得生至彼處無漏道熟卽證第四果大論亦然或接引小乘至彼實無（同下十八左）

此の中復前段の會釋は淨影觀經疏の撮要なり。豈に驚かざるを得んや。淨影疏の文左の如し。

釋會經論問曰依如往生論中說二乘種不得往生此經何故宣說中輩學小得生釋言彌陀菩薩正處唯修小行不得往生要由垂終發菩提心雜大乘種方乃得生故大經中宣說其人發菩提心彼往生論據終爲言故說二乘種子不生此經就始故說中輩學小得生問曰若此要由垂終發菩提心方得生者至彼應證大乘道果何故但得小乘果乎釋言此人雖復垂終發菩提心先多學小故至彼國聞苦無常發其本解先證小果以其垂終發大心故得小果已於小不住必還入大（末一十七）

中に就いて二の問答あり、天台疏の文は全く之に取れること言を俟つべからず。寧ろ剽竊の太甚き者に非ずや。然るに智顗に依るに、彼れは西方を判じて凡聖同居の淨土となせる者なり、若し然らば彌陀の正處(知禮、正處の語を誤解す)といへども、猶小行の者の往生を許すべし、何ぞ必ずしも大心を發すを要とすべけんや。況や台疏後段の通釋の如く、唯卽小乘を接引せんが爲に此の說をなすのみ、彼には實に小果を得る者なしといはゞ、是れ明かに維摩經疏第一の說に背戾する者と云はざるべからず。そは日諦の第四疑に指摘する所の如し。又堯が第七疑に序說の後、五重の前に、宗體釋題の一段あるは、智顗の他の章疏に都べてその例なき所といへり、此れ亦好個の疑案なりといはざるべからず。惟ふに此の一段は重複にして若し下の五重玄義を存せば、自ら不用ならざるを得ず。法聰は略廣を以て之を分ち、知禮は却て序の中に攝すと雖も、而かも繁重なるは幷に解すべからざる所なり。

復次に日諦の第一疑は堯の第二疑に同じ。諦の第二疑は一種の疑難とするに足れり。所謂此の疏の佛本已下廿六行餘、四百廿餘字は、全く金光明經疏第一の全文にして實に一字の差なし。此の二疏は同一人の著作なるが故に之を援引するも固より

妨げずと雖も、而かも四百有餘字全く相同きことは他にその例甚だ稀なる所なり。第三疑の所謂此疏の中に唐譯を載するの一事に至ては、大に惟むべし。是れ適、此の疏の眞の作者が、唐玄奘已後の出なることを證して餘りあるものに非ずや。されど此の單なる一語は、或は後人の過つて雜入せし者と見るを得ざるにもあらざるべき歟。第四疑の如きは必ずしも一概すべからず。第五疑の中、大唐內典錄の智顗撰述の條下に此の觀經疏を列ねずといふも、彼の錄には獨り此の疏のみならず、菩薩戒義疏、觀音玄義等の十數部の書をも錄せざれば、之を以て直に眞僞を考定すべき證憑となすは不可なり。但だ章安、荊溪の章疏中に未だ此の疏の名を見ずといふに至りては、聊か怪訝すべき者ありといはざるべからず。第六疑は前にもいへる如く淨影疏の文を謄寫せし者にして、智顗の創意に非ず。復その文意は生平の主張に違反せり、向きに論ずるが如し。第七疑は九品の位を判ずるに、全く別敎伏斷の位次を用ゐて圓敎の階位に約せず、幷に疑端とするに足るべし。

然るに予を以て見るに、是等の種々の疑端ありと雖も、未だ此の疏の十中七八が、全く淨影疏に出づることを知らざる者は、尙その眞僞を疑ふこと甚だ深からざるべ

きを信ずるなり。いでや之より逐次に淨影疏と天台疏との同似を比較せんか。

教相の下台疏に「二藏明義菩薩藏收、漸頓悟入此卽頓教、正爲達提希及諸侍女、幷是凡夫未證小果、故知是頓不從漸入」といへるは淨影疏末（右初）に

教判二藏謂聲聞藏及菩薩藏（中略）此經乃是菩薩藏收（中略）大從小入目之爲漸、大不由小謂之爲頓、此經是其頓教法輪、何故得知、此經正爲韋提希說、下說韋提是凡夫、爲

凡夫說不從小入、故知是頓

といへると其の意全く相同じ。惟ふに智顗は頓漸等の化儀を論じて、華嚴を頓となし鹿苑等を漸となすと雖も、未だ大の小より入るを漸となし、小に由らざるを頓となすといへることなく、隨つて方等（觀經の如き）を頓教法輪と判じたるの文を見ず。復或は化法の中の圓を名けて頓となすことあり、圓頓止觀といへる如き卽その例なりと雖も、而かも此の義を以てするも、觀經等を純圓頓教となすの意なきことは、智顗の他の章疏に徵して明かなり。若し然らば智顗は淨影に同く、觀經を判じて頓教となすべき根基を有せざる者といはざるべからざるなり。又その連文に「題稱佛說簡異四人弟子諸仙諸天化人等說也」といふは、亦卽淨影疏本（右二）の文を撮略せし者と知るべし。復次に經の分文の下、序を分つて證信發起の二とし、正說を淨業妙觀の二とし、流通を王宮鷲山の二となせるも、亦全く淨影疏の文意にして、中に就いて唯正說の分文を稍異にするに過ぎず。耆闍崛山の下、翻名靈鷲云云、法身無像云云は淨影疏本（右十）の文意にして、與大比丘衆の下、顯示教中云云、大義有三云云は亦同（右十一）の要略なり。又一一發起序の下、難答あり、是れ全く淨影疏と相同じ、卽ち

何故舉此逆事爲發起耶、爲彰此界極惡令人厭棄親所生子猶尙危害、卽欲令同欣淨土、下韋提希願爲我說無憂惱處不樂閻浮提濁惡之世（天台疏上（左十九））

何故舉此惡逆之事而爲起發、爲彰此界極惡可厭令人棄背親生之子猶相危害、何況他人、卽欲使人同悕淨土、故下韋提對佛說言、唯願爲我說無憂處我當往生不樂閻浮濁惡之世、卽其事也（淨影疏本（左十三））

復此の一段の科文、二疏全く相同じ。試に對比すべし

二發起序（中略）就中爲二、初爾時下正明殺父、次問守門人下明欲害母（中略）初段爲四、一頻婆爲子幽禁、二國大夫人密奉王食以濟王命、三漱口畢下、理爲說法以潤王心、四如是時間下、明因食兼由聞法多日不死（中略）次害母中爲四、一爲子幽閉、二因禁請

佛、三佛與弟子、因請往趣、四見佛傷歎、初中又三、一欲害母、二臣諫不聽害、三勅內官幽閉、初閣世問守門者王今在不、二守門者以事實答、三王聞瞋怒名父爲賊、母爲賊伴（天台疏上二十五右）、

第五明起化事、於中有二、一明頻婆爲子幽禁如來遣人爲之說法、二時阿闍世問守人下、明韋提希爲子禁閉如來自身往彼攝化（中略）就初段中、文別有四、第一明其頻婆沙羅爲子幽禁、二國大夫人名韋提下、明其夫人密奉王食以濟王身、三嗽口畢下聖爲說法以潤王心、四如是時間逕三七日下、明王因食兼由聞法多日不死（中略）第二中有四、一明夫人爲子幽禁、二時韋提希被幽閉下、因禁請佛、三未舉頭下、佛與弟子因請赴就、四時韋提希見佛世尊下、因見傷嘆、初中有三、一明世王欲害其母、二時有臣下、臣勸不聽、三勅內官下、餘瞋禁母、初中三句、一阿闍世問守門者王今在耶、二守門者以事具答、三王聞瞋怒即欲害母（淨影疏二十三左）

豈に驚くべき暗合（？）に非ずや。加之その大科の下、頻婆夫人云云の答問あり、前にも引ける如く此れ卽淨影疏二十三の全文にして、唯中に於て頻婆沙羅を父と改め、韋提夫人を母と改めたるに過ぎず。又未生怨の因事を明せる下、未生之日云云の一節は、淨影疏二十四左の全文、頻婆の往日を敍する毘富羅山云云の一段は、同二十五の文なり。但し頻婆の下に脫落あり、故に天台疏の文は自ら解し難し。授八戒の下、八戒の名目を列ぬ、是れ卽淨影疏二十六の全文、富樓那の下「說法第一巧開人心故偏遣之」の句は、同二十六の全文、韋提希幽閉の下「請如來令遣弟子與已相見」の句は、同二十八の全文、請法の下韋提何故云云の答問は、同二十八の全文にして、唯一兩句を節略せるのみ。悲泣雨涙の下の一行半は同二十九の撮要、三途地獄の下の三行は同二十の抄略なり。但し三途の下に脫落あり、故に天台疏の文は甚だ解し難し。試に淨影の原文と對比すべし

三途地獄名泥犁、譯云不可樂、畜生云傍行、從主蓄養爲人驅使食噉、餓鬼飢虛怯畏、三千刹土同有中惡、故同盈滿、多不善聚惡道因也、無人不起故名曰多、人常現行、殺盜婬等逢理在物爲不善、植聚稱聚也（天台疏上二十六右）

地獄畜生餓鬼盈滿、明有三途惡道果也、地獄外國名曰泥犁、雜心釋言不可樂故名爲地獄、地持釋曰增上可厭名曰泥犁、此皆約就厭心、以釋非是當相、當相論之地下牢獄、是彼罪人受報處故曰地獄、言畜生者雜心釋言、以傍行名爲畜生、此乃辨相非解名義、名義云何、蓋乃從主畜養爲名、一切世人或爲驅使、或爲噉食、畜養此生故曰畜生、言餓

鬼者、雜心釋言、以多求、故名爲餓鬼、此亦辨相非、解名義、正解名義者、飢渴名、餓虛怯多畏目之爲鬼、三千刹土同有此惡故曰盈滿、多不善聚惡道因也、無人不起故名爲多、又常現行亦名爲多、殺盜婬等違理損物說爲不善、積集稱聚、以此濁世具有何來不善因果所以不樂（淨影疏本二十右）

又懺悔の解も亦全く淨影に依る所なり、その文を見るに左の如し

懺摩梵音、悔過漢語、彼此并舉故云懺悔、將果驗因知過去有罪、然償未盡、當來更受故須懺悔（天台疏上六十左）

懺摩胡語此云悔過、胡漢并舉故曰懺悔、彼韋提希何時造罪今求懺悔、謂過去世韋提希、何緣知過有罪今求懺悔、釋言韋提今生惡子爲之被幽閉、得果驗因明過有罪、恐此罪業現償不盡、當更受之故須懺悔滅（淨影疏本二十五）

然るに懺悔の解に關しては、智顗は尤も有名なる誤謬を貽せるの人なり、所謂智顗の金光明經文句第三（呂三十右）釋懺悔品の下に

懺者首也、悔者伏也、如世人得罪於王、伏首順從不敢違逆、不逆爲伏、順從爲首、行人亦爾、伏三寶足下、正順道理、不敢爲非、故名懺悔、又懺名白法、悔名黑法、白法須尚黑法須捨、又懺名修、成悔名改、往、又懺名披陳衆失、悔名斷相續心、又懺者名慚、悔者名愧

此の中、懺は梵音懺摩の略にして、悔は漢譯悔過の略なることを知らず、却て懺悔の二字を一の漢譯せる熟語の如く誤解したるが故に、懺と悔とに各五義の不同あるを論じたるなり、是を以て知禮は同記三上（呂三四十九右）に智顗の誤解を辯護せり、卽ち

然懺悔二字乃雙擧二音、梵語懺摩華言悔過、以由悔過是首伏等五種之義、今旣華梵二音并列、是故大師以首釋懺、以伏釋悔、乃至慚愧對釋懺悔、欲令稟者修首伏行及慚愧等、斯是善巧說法之相、故不可以華梵詁訓、而爲責也

之に由りて見るに智顗は始めより懺悔の解を誤了せること明かなり、今然るに此の疏の文に懺摩は梵言、悔過は漢語、彼此并べ擧ぐるが故に懺悔と名くといへるは、此れ卽此の疏が智顗の眞撰に非ざるを反證する者に非ずや。

又唯願佛日の下の一行半は淨影疏本二十の全文（已上天台疏上卷畢る）如來眉間の下の四行半は同二十の撮要、三種淨業の下の一行半は同二十の全文、初乘共凡夫、次共二乘、後是大乘不共之法、といふは、同二十の「初門共凡夫法、第二是其共二乘法、第三大乘不共之法」といへるを謄寫せしことを言をまたず。孝養父母の下亦彼の疏を剽竊す。但だ

文略にして意通じ難し。修十善業受持三歸、皆卽彼の文と同じ。具足衆戒の下「道俗備受微細」の語あり、果して何の意ぞや。淨影を用ゐずして乃自解するの處往々此の如き誤謬あり。起意趣向の下の一行餘は淨影疏五二十右の全文、讀誦大乘の下の一行半は同五二十左の文を巧に抄略せし者なり。試に對比すべし。

汝是凡夫彰其分齊、不能遠觀、韋提實大菩薩、此會卽得無生忍、示同在凡夫、心想羸劣未得天眼、不能遠照見彼國土(天台疏下四右)

汝是凡夫彰其分齊、不能遠觀彰所不堪、韋提夫人實大菩薩、此會卽得無生法忍、明知不小亦化爲凡、心想劣等正明不堪、心想羸劣明心不能遠照彼土、未得天眼明目不能遠見彼國(淨影疏二十左)

或是五惡の下は同八二十の謄寫にして、十六觀の名稱亦全く同五二十の文に同じ、唯だ自往生觀を改めて普往生觀となせるのみ。又一作水想の下の科文は同九二十の全き剽竊なること言を要せざるも、中に於て最も笑ふべき滑稽の一事あり、そは淨影疏に莊嚴有四、一以衆寶間錯其地、二寶出雜光成諸樓觀等とあるを、天台疏に一二等の科語を略したるは猶可なれども、二寶云云の二の字を誤寫して一一寶出雜色光明光明成諸樓觀と書せること是なり。些少の字句に過ぎずと雖も、此の疏が淨影疏を模寫するの外別に創意なきことを知るには、却つて有力の徵證といはざるべからざるが如し。第四樹觀の科及八功德の解は同九二十の全文、第六總觀の下の五行は同右三十の撮略なり(已上淨影疏本畢る)。又第八像觀の中、是心是佛是心作佛の解は全く淨影疏と相同じ、卽

始學名作、終成卽是佛。若當現分別諸佛法身與己同體現觀佛時心中現者、卽是諸佛法身之體名心是佛、望已當果由觀生彼名心作佛也(天台疏下左八)

云何名作云何名是、兩義分別、一就佛觀始終分別、始學名作、終成卽是。二現當分別、諸佛法身與己同體、現觀佛時心中現者、卽是諸佛法身之體名心是佛、望已當果由觀生彼名心作佛(淨影疏末二左)

多陀阿伽度の下、淨影疏末三右によるに佛の四號を擧ぐといへるも、此の疏には唯三號を擧ぐといへり。此れ卽誤謬なり。何となれば經の本文に「諦觀彼佛多陀阿伽度阿羅訶三藐三佛陀」と說けるは、卽四號を擧げたる者にして三號に非ざればなり、謂ゆ

る佛と多陀阿伽度と阿羅訶と三藐三佛陀との四號是なり。剽竊の痕を蔽はんとして淨影を取捨するの處、往々是の如き誤謬あり、寧ろ憐れならずや。第九觀の觀身大小の下は亦全く淨影疏末(右四)を謄寫せり。中に就て脫落誤謬少からず。故に台疏の文は到底解すべからず。是れ亦剽竊の痕を掩はんが爲か、或は全く解する能はざりし爲めか。今二疏の文を對比すべし。

觀身大小、高六十萬億那由他恆河沙由旬、毫相如五須彌山、須彌山擧高三百三十六萬里、縱廣亦爾、彼佛毫相過此五倍、眼如四大海水、準眼量以度身身量太長、世人身長七尺者眼長一寸餘、四大海水一海八萬四千由旬、四海合三十三萬六千由旬、身過其眼五十六億倍。假令極多無出萬倍。何緣佛身得長六十萬億那由他恆河沙由旬、準眼定身、正長六十萬億那由他由旬、言恆河沙者譯人謬耳(天台疏下(左九))

一觀身大小、高六十萬億那由他恆河沙由旬。二擧毫相大小、如須彌、須彌擧高三百三十六萬里、縱廣亦然、彼佛毫相過此五倍。三眼大小如四大海、准此白毫及眼大小、以度其身、身量大長。准身度其白毫及眼、其量太小、是事云何。凡世人身五尺者一寸之眼、身於其眼不過長短五六十倍。佛亦應然、無量壽佛眼如四大海、一海縱廣八萬由旬、四海合有三十三萬六千由旬、身過其眼五六十倍。縱令極多無出百倍、何緣佛身得六十萬億那由他恆河沙由旬、準眼定身正長六十萬億那由他由旬、言恆河沙者或傳譯者謬而置之。若身實長六十萬億那由他恆河沙由旬、白毫及眼便是極小。當亦是其傳者謬矣(淨影疏末(右四))

復卽是佛心の下の一行半、及佛心者大慈悲の七行半は同(左五)の撮略なり。第十三觀の下、所觀若人云云の三行餘は同(右十)の全文、第十四觀の下、釋會經論云云の六行は前にも引ける如く同(右十)の謄寫なるのみならず、根缺不生及逆謗除取の二問も亦同(右十)の連文にして字句殆ど殊らず、唯少く略せるのみ、總じて二十行三百餘字は卽悉く淨影疏の全文なり、豈に驚くべき剽竊に非ずや。第十五觀の下、復た戒の釋あり、前の序に已に八戒の名を列ぬ、繁重知るべきなり。三明六通八解脫、亦悉く淨影を模すること言を待つべからず。流通の下、科文更に多し、幷に皆淨影疏(八十右)已下の拔錄なり、文に對して之を見るべし。

予惟ふに此の觀無量壽經疏一卷(坊本二卷に作る)は斷じて天台智顗禪師の眞撰にあらず。後代好事の者、名を天台に藉りて專ら淨影の疏文を剽竊し、以て此の一本を

成せしこと決して疑を容るべからず。擬托の年代は固より明かならずと雖も、唐順宗永貞元年(八〇五)卽本朝延曆廿四年已前に在ることは、最澄が同年に撰せる將來台州錄に此の書を列ぬるの事實に徵して知ることを得べきのみ。

二六　天台十疑論は僞作たる可し

淨土十疑論は一卷にして、現に明藏に收む。卷首に天台智者大師說と署す。宋の澄彧其の註を造り、贊寧之が序をなす。贊寧は宋高僧傳の著者にして、其の序は宋大平興國八年に撰する所なり。世に之を註十疑と稱す。元祿年間、諦全なる者、更に冠考を註十疑に附し、分つて二卷となし、現に世に行ふ。又元照は十疑論科を製し、禪瑜は雜十疑を述し、其の他不必の十疑翼註二卷、玄心の十疑樞鑰三卷等あり。

然るに此の十疑論は、古來多く天台の眞撰と謂へり。澄彧贊寧は固より言ふに及ばず。柳子厚が撰せる龍興寺淨土院記の中に、遂以天台十疑論書于墻宇使觀者起信焉と記し、永明の萬善同歸集、知禮の妙宗鈔、遵式の淨土西方略傳序等に、竝に此の論を

引載し、加之、楊傑は十疑論序を製し、其の中に、然贊輔彌陀敎觀、其書山積、唯智者十疑論最爲首冠、引聖言決群惑、萬年闇室日至頓有餘光、千里水程舟具不勞自力、非法藏後身不能也といひ、元照は觀經義疏等に處々に此の論を引いて天台の作と信じ、王日休の、龍舒淨土文卷十一に、天台智者大師、修行人を勸めて專ら淨土を修せしむる文と題して、十疑の中の第一疑の全文をかゝげ、又大佑の淨土指歸卷下に、淨土に關する古今著述を列ぬる中、天台智者大師觀經疏一卷及び淨土十疑論一卷を出だし、且つ其の下に、天台智者大師說淨土十疑論、門人記爲一卷、宋初吳山澄彧法師有注本、僧統贊寧序冠其首、盛行於世と記し、又智旭が選定せる淨土十要には、其の第四に、此の十疑論をおき、其の初めに述して左の如くいへり。

若夫作論通經闡揚淨土、則當以天台智者大師十疑論奉爲頰辨、厥義有三、一智者乃釋迦後身人是大聖故、二陳隋之世接踵遠祖時亦在先故、三此十問答統淨宗一切疑問、振菩提大道之綱、斷疑生信厥功最巨故、

其の他、志磐の山家敎典志、周克復の淨土晨鐘、及義天錄、東域錄、諸宗錄、長西錄等、皆之を信じて天台の眞撰となせり。

天台十疑論は僞作たる可し

此の如く古來多くは此の論を天台の眞撰となせり。然るに中古比叡の博識家として有名なる寶地房證眞は、此の論の僞作たる可きことを論じ、其の著法華玄義私記（具さに三大部私記あり、此の書は西紀一一六五起稿一二〇七脫稿す）卷五末に記して云く、

且如極樂十疑等、非是天台所出、而和漢皆云大師說、彼引唐譯雜集論故、定非隋時之所述也、又引世親師子覺事、

と、此の文簡なりと雖も、實に十疑に對する一大鐵槌なりといふ可し。卽十疑論に

雜集論云、若願生安樂國土卽得往生、若人聞無垢佛名卽得阿耨菩提、

是れ雜集論第十二に四種の意趣を明かす中の別時意趣の文なり。然るに現藏を見るに、大乘阿毘達磨雜集論十六卷は、玄奘三藏が唐太宗貞觀二十年に始めて譯出する所にして、其の日附は天台の死を距る實に五十年の後に在り。左れば雜集論は天台の所覽に非ざるや明かなり。此の一事を以てするも十疑論が天台の眞撰に非ざることを證して餘りある者に非ずや。

又十疑論に世親、師子覺の事を引く、其の文に云く、

又聞、西國傳云、有三菩薩、一名無著、二名世親、三名師子覺、此三人契志同生、兜率願見彌勒、若先亡者得見彌勒、誓來相報、師子覺前亡、一去數年不來、後世親無常臨終之時、無著語曰、汝見彌勒、卽來相報、世親去經三年、始來、無著問曰、何意如許多時始來、世親報云……

古來此の西國傳といへるは、隋彥琮が西域傳なる可しと言ふ者あり。されど茲に記載せる事實は、玄奘の西域記第五に出す文と甚だ相肖たり。卽

二三賢哲每相謂曰、凡修行業願覲慈氏、若先捨壽得、遂宿心、當相報語、以知所至、其後師子覺先捨壽命、三年不報、世親菩薩尋亦捨壽、時經六月、亦無報命（中略）其後無著菩薩于夜初分方爲門人敎授定法、燈光忽翳空中大明有一天僊乘虛下降云々

彼此の文辭稍〻同からず、復來報の年月互に殊なれりと雖も、予は十疑の本據は必ず西域記なる可しと推想する者なり。何となれば伐蘇畔度を翻じて世親と譯することは、玄奘の始めて唱ふる所にして、隋の世には曾て無き所なり。故に法華玄義、摩訶止觀等皆天親といひて世親といはず。然るに今十疑に却つて世親の譯名を用ゆるのみならず、所載の事實が唐譯の西域記に依據するより考ふれば、益〻此の論が天台十疑論は僞作たる可し

台の手に成れる者に非ることを知るに足る可し。矧むや眞諦三藏が譯せる婆藪槃豆傳を見るに、無著は却つて世親に先ちて歿せるが如く、而して傳中一言の所謂師子覺等と兜率に生ずることを說かず。彼の傳に云く

阿僧伽(無著と翻ず)法師殂歿後、天親方造大乘論解釋諸大乘經(中略)異部及外道論師聞法師名莫不畏伏、於阿踰闍國捨命年終八十

且つ夫れ無著は彌勒を閻浮提に請して四月夜の間、十七地經(卽瑜伽論)の講說を聽けりと稱する者、而かも何を苦んで師子覺等と俱に彌勒に覲へんことを誓言すべき。之を要するに西域記の記事は孟浪にして、單に一種の巷說を傳錄せしに過ぎざるが如し。設令彥琮が所謂西域傳(此の書今傳にらず、故に其の內容の如何を審かにすゝに由なし)に、既にかゝる傳說を記せりとするも、聰慧なる天台の智者は必ず此れを捨てゝ彼の眞諦所傳を取りしや明かなり。孰れの點を以てするも十疑の中に世親師子覺の事緣を載することは甚だ疑ふべき所なり。

然るに往生要集記の中には、此等の雜集論及西域傳の文は、言ふまでもなく後人の竄入する所なりと雖も、而かも此の一兩の竄入あるが爲に、十疑の一論を全く天台の眞撰に非ずと斷ずるは不可なり。先人の書を後世に至りて修治する時、その說を莊嚴せんが爲に種種の加書をなすことはその例決して少からざる所なりといへり。卽

問、十疑引雜集論云等者、疑問云、此集一部往往引用十疑、以爲天台正釋、今引新譯雜集論如何、荊溪釋云、六足者幷唐三藏將來、隋時未有不合指之云云 今引新譯誰信天台所述乎已上 有會云、天台十疑引新譯論誠雖至難、天台章疏中亦引新譯書、後人書入歟、故新渡書中從義治定云云 如彼大日經義釋智儼治、溫古再治、今亦如是。新渡十疑題入論字、後人作釋、彼土賞翫書歟、依之再治莊嚴也云云 毘會云、顯密聖敎中、此例蓋多。四敎義載新譯俱舍天地此界多門室等之文也。是皆後人釋加歟。玄目錄云、十疑湛然作 背今集意云云 尋云、十疑是妙樂釋也。依之有本題下妙樂造云云 妙符引新譯雜集論如何、答有云、此義違今集、加之註十疑云、註十疑論幷序天台智者大師說、沙門澄彌敎觀者其書山積、唯天台智者大師淨土十疑或註、沙門贊寧序云云 樂邦文類一云、彌敎觀者其書山積、唯天台智者大師淨土十疑論最爲首冠已上 靈應傳一云、天台智者大師別傳、門人灌頂撰、乃至於是隨便出山、至石城寺乃云有疾、語智越云、王欲使吾來、吾今不負、但命盡、此不成、前進、石城是天門西

天台十疑論は僞作たる可し

門、大佛當來靈像處所既好、最後用心、言竟、右脇向西臥、而專稱彌陀般若觀音、著述西方十疑別行於世、已上 章安御作傳中、既載著述西方十疑之言、誰題疑乎、加之、雜十疑禮瑜云、夫十疑者、是天台大師爲憐末世衆生所製也(要集記第四)

十疑十中引新譯雜集論西域傳等、此後人所書如彼善無畏三藏爲唐玄宗皇帝讃大日經弟子一行阿闍梨記之名、大日經疏、斯疏引後譯狗醯經文(要集記第三)

此の通釋ありと雖も、未だ深く信とするに足らず。何者設令雜集等の文を後人の附加する所となして之を取除くとするも、猶その外に更に疑ふべき個所甚だ多ければなり。且く攝論宗は眞諦三藏(四九九——五六九)の創唱する所にして、此の宗流行已後方に十念往生を別時意となすの說あり。蓋し天台は眞諦に後るゝこと僅かに三十餘年に過ぎずして、その前半は實に同時に在り。然るに十疑論に

上古相傳、判十念成就作別時意者、此定不可、何以得知、攝論云、唯由發願故全無有行といへり。若し此の十疑が果して智顗の眞撰ならば、何を以て上古相傳といふべけんや。是に依りて少くとも此の論の眞の作者は眞諦を距る一二百年の後に在ることを知るを得べし。加之、十疑の中の第八疑に無始造罪の者、臨終に纔に十念成就して卽往生を得るに三種の道理あることを論せり。卽

今以三種道理校量輕重不定不在時節久近多少、云何爲三、一者在心、二者在緣、三者在決定、在心者、造罪之時從自虛妄顚倒心生、念佛心者從善知識聞說阿彌陀佛眞實功德名號、一虛一實、豈得相比、譬如萬年闇室日光暫至闇頓除、豈有久來之闇不肯滅耶、在緣者、造罪之時從虛妄癡闇心緣虛妄境界顚倒生、念佛之心從聞佛淸淨眞實功德名號緣無上菩提心生、一眞一僞、豈得相比、譬如有人被毒箭中、箭深毒穆傷肌破骨、一聞滅除藥鼓聲、卽箭出毒除、豈以箭深毒穆而不肯出也、在決定者、造罪之時以有間心有後心也、念佛之時以無間心無後心、遂卽捨命善心猛利、是以卽生、譬如十闇之索千夫不制、童子揮劒須臾兩分、又如千年積柴以大豆火焚、少時卽盡、

章句少しく出沒ありと雖も、此の一段は曇鸞法師の往生論註卷上の本文を寫せる者に非ずや。年代よりいへば固より天台は曇鸞の後出にして、其の著書を引用するを怪まずと雖も、然かも曇鸞ともいはず論註ともいはず、却て二三の文字を改竄して之を自說の如く裝ふは、豈に學德竝び高く、中古に獨步せる天台智者の忍むで爲す所ならんや。又第十疑の下にも、廣く論註卷下の三種の障菩提法及び順菩提法の

釋文を引けり。其の他曇鸞に依りて立論せりと覺ゆる所鮮からざるなり。但し智者大師別傳の中に天台西方十疑を著述す云云と記せることは、有力なる違文たるに相違なしと雖も、而かも此の傳は古より章安の眞作に非ざるべしといへる說あり。設令之を安の眞作なりとするも、かゝる僅々の數語こそ吾人は寧ろ後人の雜糅なりと信せざるべからず。

之を要するに、十疑論は天台の眞撰に非るべし。その所揭の問答を見るも、多くは卑近にして、天台平生の豪宕に似ざるのみならず、その文字の如き、復章安、法愼の典雅に類せざる者多し。蓋し最澄が延曆廿四年に撰せる將來台州錄の中に、多くの著書を擧げ、その下に一一に智者等の名を署せるも、阿彌陀經決十疑一卷五番の下には、闕いて誰人の名をも署せず。是に由りて最澄の當時已に此の論の著者の分明ならざりしことを知るべし。又唐飛錫(太歷年間)の念佛三昧寶王論及び法聰の釋觀經記(元和十二年以前の撰述に係る)等に、此論の文を引用せるも、亦著者の名を擧げず。是れ恐くは此の書、本と署名なかりし者か。但だ延曆寺玄日の編せる目錄には、此の論を湛然の作と記せりといふ。若し然らば年代に於て寧ろ矛盾することなきが如しと雖も、而かも玄日は如何なる證左によりて此の說をなしたるや、詳にするに由なし。

二七　慈恩大師の淨土に關する著書及び其の所說

慈恩寺窺基法師は、玄奘三藏の嫡弟にして、瑜珈唯識の敎理を唱道し、述作する所頗る多し。世に百本の疏主と稱せらる。義天錄、東域錄、諸宗章疏錄等に、其の數十部を載せり。かく多數の著書の中には、淨土に關するものも之れなきに非るが如し。今嘗試に諸錄に就き之を見るに左の如し。

阿彌陀經疏一卷　義天錄、東域錄、長西錄、諸宗錄
阿彌陀經通贊二卷　義天錄、長西錄、諸宗錄
阿彌陀經述贊一卷　長西錄
西方要決一卷　東域錄、長西錄、諸宗錄

右淨土に關する四部の中、初の三部は今現に流行せり。唯述贊は諸方に索むるに之を獲ること能はず、恐くは通贊疏若くは單疏の異本に過ぎざるべしと想像するも、長西錄には此の三本を列記し通贊疏は五十四丁、單疏は四十六丁、述贊は二十二丁ありと記すれば、安貞二年(西紀一二二八、この年同錄の作者覺明寂す)頃には、竝に見行せしものなるやも未だ知る可らず。兎に角、今日傳はらざる所の書なれば、之に就いて何等の研究をもなす能はずと雖も、通途の例を以て之を考ふる時は、いかに慈恩が述作に富むとはいへ、一の彌陀經に三本の疏釋を造りしや否やを疑はざる可らず。加之、東域錄に阿彌陀經疏一卷基撰と記し、其の註に此疏有兩本、一本云贊述、贊述者傳法院本、疏者北院本也といふに依れば、長西錄の所謂述贊はこの贊述の寫倒にして、單疏の異本たる傳法院本なりしやも復未だ識るべからざるなり。

述贊は姑く措き、餘の見行せる三部に就いて之を見るに、其の眞僞亦頗る疑ふべきものあり。西方要決に關しては、古來之を僞作となす者少からず、仁和寺濟暹律師(延喜六年、西紀九〇六歿す)は、夙に五種の疑難を付して、慈恩の所造に非ることを斷定し、法相宗の徒は文狀義理太だ自宗に違すとなして、定むで慈恩の正釋に非ずと揚言せり。蓋し支那朝鮮に在りては、古へより以來、此の書を引用せし者絶えて是れ無きが如し。高麗の僧統義天が、西紀一〇九〇に編纂せる新編諸宗教藏總錄三卷には、華嚴、涅槃等を始め、當時支那朝鮮に流行せる諸宗の章疏を殆ど遺漏なく登錄せりと雖も、其の中に此の書の名を列ねず。又予が今日迄見聞せし所を以てするも、支那及び朝鮮撰述の中に、この書を引用せし者なきが如し。素より淺學寡聞にして、之れあるも未だ之を知らざる者なるやも知るべからずと雖も、兎に角本邦に於けるが如く公然行はれざりしは事實なるが如し。此れ豈に怪訝すべき所ならずや。本邦に在りては、濟暹の時已に其の本ありしは言を要せず。その後、延喜十四年(九一四)東大寺圓超等勅を奉じて五宗章疏錄を製し之を朝廷に進獻せしが、其の中、東大寺平祚の法相錄に、西方要決一卷基述と記し、又寛治八年(一〇九四)興福寺永超の撰集せる東域傳燈錄に、西方要決一卷基と錄し、その他、源信の往生要集、永觀の往生十因及び吾が宗祖の選擇集、初學抄等に之を引用し、展轉依憑して以て今日に及べり。吾が宗の如きは、之を慈恩の眞作となすべき事情なきに非ずと雖も、若し事實然らずんば、予は之を曲庇することを好まざるのみならず、淨土教史の討究上少からざる困迷

を感ずるを以て、今試に諸種の文理に照會し、公平に判斷して、その薫蕕を辨せんと欲するなり。

西方要決は、具さに西方要決釋疑通規といふ。文に十四段あり。その中、初の六段は、金剛般若、佛藏、維摩、彌勒問、最勝妙定、涅槃等の諸經の所說が、往生淨土の旨趣に相違せるものあるを通釋し、第七は西方と兜率との優劣を比較して、十種の異點を出だし、八九十の三段は、次の如く不退と少善根と二乘の生不とを問答し、第十一は、三階行者の五種の小疑を會釋し、第十二は、攝論の別時意趣を通じ、第十三は、法華を引いて云云し、後の一段は、略して作業の方軌を明かし四修の行法を解釋せり。文意懇切にして差したる疑難とも見えざる者迄、一一に通解會釋し、熱心なる淨土の宗師も猶及ばざるべき仰信を表明し、還つて支那法相宗の第二祖として雄風古今を空くせる慈恩法師その人の著に似ざる者甚だ多し。敍述の體裁は十疑論に酷肖し、經論相違の文を擧げて之を會通するを一意勉めたる者なり。その前序の文に、

當今學者特懷疑慮、爲諸經論文有相違、若不會通、疑端莫絕。略陳十四種釋、湍流博識通才幸尋取悟耳

亦以て此書製作の因由を察すべきなり。されど唯敍述の體裁のみを以て、其論本の眞僞を判定せんことは素より失當にして、若しその中に記載せられたる事項が、その人の主張に反せざる限り、吾人と雖も之を救護するに敢て躊躇する者に非ずといへども、如何せん此の書の中に記述せられたる事項は、概ね慈恩が平生の主張及其の事蹟に矛盾するものあれば、之を眞作と定めむことは恐らく沒事實ならん。今先づ濟遲が五種の疑難をあげ竝に私見の一二を付加せん。往生要集記第三に云く、

凡於西方要決、若言慈恩寺基法師所造者、有五種相違文。一者總相相違義、謂要決云、西方爲易往生、兜率爲難上生、而上生經疏云、但業行淺願往生西方、萬一不生恐成自悞、故當己行應修此業。二者始覺本覺相違義、慈恩從本立始覺菩提義、而要決云、本覺圓明卽爲眞佛。三者一乘權實相違義、慈恩從本立一乘方便、而要決云、敎迹萬差同歸一乘。四者兜率退不退相違義、上生經疏云、若生外院衆離第九品任運後時還成不退、而要決云、若生天上惠力輕微多不免退。五者迎不迎相違義、上生疏云、時彌勒菩薩放眉間白毫光來迎此人、要決云、命終生天無人攝引、而於上生疏者、基門弟惠照等師、旣判云慈恩所造、於要決者不云爾。知非慈恩所造也（已上仁和寺濟遲律師勘文也）

五難の中、第二及第三は、法相の宗義上大體に矛盾するを指摘したる者にして、第一第四第五の三難は、慈恩の著作なる彌勒上生經疏に違するを疑難せるものなり。法相の宗義は、三乘眞實一乘方便の旨を談じ、又始覺菩提の義を論じて、本覺眞佛の理を明さず。故に第二第三も有力の疑難たるを失はざる者なり。されど要集記に

會第二難者、唯識論中立四種涅槃。第一性淨涅槃卽是本有理性、本有故名爲本、亦是二身覺悟平等自性故名爲覺、雖有客染而本性淨、具無量德、能離雜染、故名圓明。或又法爾無漏本有種子名爲本覺、若存此義、雖相宗何不名本覺眞佛耶。此二義順慈恩釋楞伽經八九種種識文言。楞伽經中兼說識性、或以第八染淨別開、不可輕忽也。會第三難者。依法華意、約不定性、會三歸一名同歸一乘、彼宗盛所談也。

剴切を缺くの感なきに非ずと雖も、亦以て一種の通釋と見ることを得べし。唯上生經疏に違するの難に至ては、恐くは和會することかたかるべし。何となれば彼の疏は慈恩の眞撰にして、自作の章疏中之を例指すること五三に止らざるのみならず、前きにも記する如く、宋高僧傳第四に窺基は嘗て五臺山に遊びて靈夢を感じ、仍て彼の疏を造るといへば、其の中に記載せられたる事項は、自ら窺基の心腑を披瀝したる者と認め得べく、同時に之に違背する所の章疏は、その眞撰たるの價値に於て甚だ薄弱なるを感ぜざるを得ざればなり。況や法相宗は、彌勒をその敎祖となし、彌勒は無著に、無著は世親に、護法戒賢次第に稟承するを以て、彼の徒は皆自ら彌勒を信敬し、兜率上生を願求するの心あるべきに於ておや。加之、彌勒上生經疏卷上に

且上聖上賢皆修此業、西域記說、西方卽有無著、天親、師子覺等菩薩、高僧傳說、此方亦有彌天釋道安、廬山惠遠、惠持等、近親所見大唐卽有三藏和尙、文備神泰法師等、皆修彼業、兼有上生靈感、或有身在現相、或有將終現相、或有生後現相、人所共知、具如別傳。

といへるを見れば、窺基も亦此の上聖上賢の跡を追ふて、兜率を願求せしことを見るに足るべく、ましてや宋高僧傳に、慈恩は生常勇進にして、彌勒の像を造り、其の像に對して日に菩薩戒一徧を誦し、以て兜率に生せんことを願ぜりといへば、彼れは明かに兜率上生の勇進なる修行者にして、極樂往生の求願者にあらざることを知るを得べし。已に然らば慈恩が西方要決を撰述し、淨土の宗師と雖も猶多く及ばざる熱誠を披瀝し、「必須遠跡娑婆棲神淨域」といひ、或は「仰願同緣正事敬發身心」依此一宗定爲拒割」といひ、經論の群疑を會通して、懇切鄭重に極樂往生を鼓吹する如きは、

殆ど有り得べからざる事なるが如し。勿論同一人の主張が、年と倶に豹變するの例なきにはあらざるも、未だ慈恩が唯識宗を捨てゝ浄土宗に歸し、三乘教を捨てゝ一乘教に入りしを聞くことなし。然らざる已上は全く矛盾せる思想を鼓吹し、讃毀正に相反せる法門を主張するの理なかるべき者なり。いでや少しく此の二書に就き、その矛盾の點を出さん。

濟暹は第一の疑難として、兜率西方の難生易生を擧げたり。是れ自ら疑難の尤も力ある者にして、二書の乖角の甚だ大なる所なり。上生經疏卷上に、往生難易の一章を設け、極樂は報土にして凡小の生ずべき地境に非ず、故に難生なり。兜率は此の界に在り、六事十事等の法を修して生ずることを得、故に易生なりと論じ、種々の文理をあげて之を證明せり。今參考の爲め之を抄錄すべし。

第四往生難易者、且如西方天親淨土論、無著往生論俱言報土女人及根缺二乘種不生。又阿彌陀經云。非少善根因緣而得生彼。又言、其中皆是阿鞞跋致諸大菩薩。又觀經云、上上品生得無生法忍(中略)上品中生經一七日得不退轉、經一小劫得無生忍、上品下生者(中略)經三小劫住極喜地、中品上生應時卽得阿羅漢果、中品中生者(中略)逕半劫成阿羅漢、中品下生者(中略)經一小劫成阿羅漢、下品上生者(中略)經十小劫具得百法明門、得入初地、下品中生者經六劫(中略)方發道心、百法明門說初地得、豈阿羅漢勝初地耶、又中品生得阿羅漢、下品始發心卽迂會者勝直往耶。又言、得須陀洹等豈由片時修、故遂便得果、處處皆說阿羅漢果若練根者六十劫成、豈由小善遂超生死成利根阿羅漢。又云、作諸觀成得生西方、豈學心已諸觀便成、若由小善便得果者便同說假部、由福故得聖道、道不可修道不可長、觀無相等資粮加行便徒施設。又無垢稱經云、若諸菩薩行于八法、行無瘡疣方生淨土(中略)豈生淨土者皆具八法也。又對法第十二卷云、別時意趣者、如說若有願生極樂世界皆得往生、意在別時故。攝大乘云、譬如一錢而得千錢、意在別時、非唯由發願卽得生故。又云、對治祕密者(中略)三對懈怠故作如是言、若有願生極樂世界皆得往生、四對治小善生喜足故於一善根或時稱讃爲令歡喜勇猛修故或時毀呰、五治貪行者稱讃淨土富樂莊嚴(中略)又佛毫相如五須彌豈凡地前能見。此相身量大小可得初地所見、凡若能見皆爲超越。又念彌陀彌勒功德無有差別現國現身相成勝劣、但以彌勒惡處行化慈悲深故、阿彌陀佛淨土化物慈悲相淺。又淨土多樂欣生者多厭心不深念令福少非奇特

故、惡處多、苦欣、生者少、厭心深重故念福多甚希奇(中略)西方勝處人所樂生、此土穢方誰能願住、但以經論明證賢聖同修、背苦求樂誠非上士、故無量壽經下卷云、閻浮提一日一夜受持齋戒、勝無量壽國百年修善、以彼佛國無有惡故、又維摩經云、閻浮提修道一日一夜過諸佛土百千大劫、良以此世界中有十勝事、謂以布施攝貧窮等、厭苦心深有苦可拔、西方淨土便無是事、處穢方而修淨行、寔聖者之利他、居淨域而嚴淨因、非上士之弘濟、願於盲暗世界爲作燈明、邪見衆中安立正道、但業殘缺願往西方、萬一不生恐成自悞、故當己行應修此業

これ西方難生を說ける文なり。文に數段ありと雖も、要を取つて之を言はゞ、極樂は報土なり、阿鞞跋致の諸大菩薩の所住にして、凡夫二乘の生ずべき所に非ず。觀經等の所說は、所謂別時意趣の說にして、一錢を以て千錢を得べしと敎ゆるに殊らず。又對治祕密の說にして、文の如く義を取るべからざるなり。加之、苦に背き樂を求め、淨域に居して獨り淨因を嚴るは、上士の弘濟にあらず。穢方に處して淨業を修し、盲暗の爲めに燈明となり、邪見の衆の中に正道を安立するは、寔に聖者の利他といふべし、況や行業殘缺して西方に往んことを願ふも、萬が一も生ぜず。故に己行に當つて宜く兜率の業を修すべしといふに在るなり。是れ要決に力を盡くして、西方の往生を勸奬し、佛力加持去之甚易といひ、大聖慇懃專誠使往といひ、言今時濁惡不合念佛願生西方者此非博見といひ、及び種種に極樂の勝利を鼓說せる所と正さに相反するなり、矧んや又要決の第七章に、西方淨土と彌勒天宮とを比較し、其の優劣を論じて、略して十異を出だし、一一の下に、兜率は下劣にして、西方は尊勝なりと判せるに對合する時は、何人もかゝる撞著せる論議が同一人の手に成りしことを信ずる能はざるべし。且夫れ要決の第十二章に、攝大乘論の別時意趣の文を會釋し、念佛は別時意趣に非ず、但發願に由るは未だ卽生ずべからず、願に依りて念佛すれば乃淨業を成ず、願行前後故說別時、非謂念佛不卽生也といへり。これ豈に向きに引ける上生疏の往生極樂を別時の意となせるものに明かに矛盾するにあらずや。啻に之れのみならず。要決の第三章に、無量壽經竝に維摩經を引き、娑婆の修道は淨土の作善に勝る、何ぞ勞しく彌陀を念じ、極樂に生ずることを願せんや、勝を捨てゝ劣を取らば業行成じ難かるべしと問難し、その答文に、自行既に成じ、輪廻を免るゝ者は、娑婆に在りて宜く作善すべし。若し未だ不退に登らざる者は、穢土に居しがたく、要ず彼國

に生じて自利の因を成ずべしといへるも、上生經疏には、向きにあげたる如く、同一の經文を引きて、婆婆の修道は厭心深重なるが故に、念福多く甚だ希奇なりといひて、還つて兜率の行業を勸進せり。若し此の二書を竝に眞作とせば、慈恩は詭辯を弄して徒づらに後人を過らしむる者といはざるべからざるなり。況や上生經疏下卷に、

去佛時遙病重行闕、受佛付囑欣當佛度、末代津梁眞爲正觀、業淺識微智量疎拙欣生報土越分所行不稱病行名爲邪觀

といひ、又

又釋迦末法持戒犯戒有戒無戒釋迦皆囑彌勒度之自揣解行難生淨土可爲彌勒作弟子者於上所說天宮處所應作是觀

といへり。之に由て見るに、業淺く識微に智量疎拙なる者は、淨土に生じ難し。持戒犯戒有戒無戒釋迦皆彌勒に囑して之を度せしむ。上生の行は末代の津梁、眞に正觀にして淨土の業を名けて邪觀となせること審なり。これ豈に前の要決に未だ不退に登らざる者は、要ず彼國に生じて自利の因を成ずべしと說けるに全く乖角するにあらずや。

蓋し上生經疏に依るに、極樂を報土となし、彌陀を報身となすが故に、凡小の往生を許さずと雖も、若し義林章第七に明す所によれば、兼て化身化土に通ずるの義なきにあらず。彼の佛土章に云く、

觀經所說諸觀及孝養父母等乃至十念爲淨土因者、此有二義。一云、準攝大乘等西方乃是他受用土、觀經自言阿鞞跋致不退菩薩方得生故、非以少善根因緣而得生故。無著天親淨土論言女人根缺二乘種等皆不生故、攝大乘云非唯由願方乃得生別時意故、如以一錢貨得千錢別時方得非今卽得、十念往生亦復如是、十念爲因後方漸生、非由十念死後卽生、爲除懈怠不修善者令其念佛說十念因生淨土故。又說阿彌陀佛身量毫相如五須彌非他受用何容乃爾、又觀音授記經言阿彌陀佛滅度之後觀音菩薩次當補處十地大形說當補處非他受用是何佛耶。

二云、西方通於報化二土。報土文證如前所說、化土證者鼓音王經云、阿彌陀佛父名月上母名殊勝妙顏有子有魔亦有調達亦有王城若非化身寧有此事故觀經說九品生中有阿羅漢須陀洹等故生彼者通有三乘其土通是報化二土若依前解此是佗受用

身示現亦有父母王國實卽無女人惡道怖等九品生中阿羅漢等借彼名說實是菩薩二釋任情取捨隨意

此の中、第一說は西方を他受用報土となす、卽上生經疏と同意なり。後說は報化二土に通ずとなす、所謂通報化の義是なり。若し後說によれば、凡夫二乘も西方に生ずることを得べし。是の故に慈恩といへども必ずしも凡夫の淨土往生を許さゞるに非ずと雖も、已に「二釋任情取捨隨意」といふ以上は、唯報非化の義に依りて、凡小の得生を遮するも敢て不可なき所なり。況や若し通報化の義を用ゐて、其の化土には凡夫の得入を許すとするも、而かも西方は淨土なるが故に、前にも引ける如く上士の弘濟にあらざるを以て、必ずその往生を勸勵せざるや言を俟たざるなり。上生經疏下卷にも亦左の如くいへり。

三者欲爲彌勒作弟子者願於惡界爲作善利苦衆生所希行救濟不願淨土作餘佛弟子彼無苦有情可行濟度無苦可厭欣心不深故

かゝる文は一二にして止らず、以て慈恩が兜率を奬說するの底意を察すべきなり。

次に濟遲が第四難に、兜率退不退相違の義をあげたり。こは要決に兜率と西方とを比較して、十異を出せる中、第六に進退修異を論じ、若生天上多有男女惠力輕微多不免退といへるも、上生經疏には之に反して兜率も定て不退なることを論じ、却つて「兜率可有退」といへる義を破斥せるを指せる者なり。試みに上生經疏の文を見るべし。

或有釋言生西方者決定不退生兜率者或可有退故不願生理亦不然此經亦言諸有敬禮彌勒如來聞名稱名暫覩毫光下至聽聞彌勒所說一句法義歸依生彼定不退於無上正覺(中略)雖有天女種種侍衛或佛菩薩所化爲或實天女彼聞能說不退之法厭欲過患必無退轉佛力所加心生決定豈由欲界卽皆退耶位至不退處處皆不退未至不退彼何必不退

之に由るに兜率は欲界なりと雖も、佛力の加する所、心決定を生ずるが故に退することなく、又女人ありと雖も、欲の過患を厭ふが故に、必ず退轉することなしといふなり。是れ豈に反つて要決の文を通會せし者にあらずや。加之彌勒上生經の說を見るに、上生內衆の機に具さに九品あり、其の內、下品生の者と雖も、天に生じ彌勒に値遇し、頭面に禮敬し未だ頭を擧げざる頃に、便ち聞法を得て、無上道に於て退轉せざ

ることを得といへり。慈恩亦此の文を釋して「善根久熟見便禮敬慈悲自起疾得聞法除不信心速得不退」と記すを見れば、兜率上生の者も不退を得ること明かなるが如し。況や外衆に生ずる者といへども「任運後時還成不退」といへば則ち兜率と西方とを比較して、進退修異を論じ、其の優劣を判ぜんことは慈恩が耄せざる限り、決して爲し能はざる所なるを信ぜざる可らざるなり。

又濟暹が第五難に、迎不迎相違の義をあげたり。是れ卽ち要決十異の中、第九に捨生不同を論じ「捨命生天無人接引若生淨國聖衆來迎」といへるも、彌勒上生經の中には、明かに彌勒來迎して行人を接引すと說くに相違するを指摘せる者なり。上生經に云く

此人欲命終時彌勒菩薩放眉間白毫大人相光與諸天子雨曼陀羅華來迎此人此人須臾卽得往生

此の文に准ずるに、彌勒も亦行人を迎接すること甚だ明かなり。慈恩安んぞ之を知らざらんや。若し之を知らば自ら捨生不同を論じて兜率西方の優劣を判ずるの理斷じて無かるべき所なり。

その他、十異の中、第三境分穢淨、第四身報兩殊、第五種現差分及び第七界非界別等、皆多少の葛藤を生ずべき題目なりと雖も、其の主要にあらざるを以て今は之を略すべし。又往生要集記に更に一難あり、所謂要決の中には唯專ら舊譯の文をあげて、新譯の經を引かざる是なり。玄奘の譯場に參し、其の上足として唐譯を大成せし慈恩法師其の人の著作に、一の新譯の文を見ざるは亦甚だ怪訝すべき所ならん。

之を要するに慈恩は西方要決の著者にはあらざるべし。啻にその中に記載する事項が、他の自作の章疏に矛盾するのみならず、前にも記する如く彼は勇進なる彌勒崇拜者にして、決して西方の求願者にあらざればなり。若し果して之をその眞撰となさば、慈恩は兜率を欣慕するの傍ら、兼ねて極樂を志願せざるべからず。若し然らば死して何處にか生すべき。上方に向つて去る可らず、西方を指して往く可らず、彼れは殆ど中有に彷徨せん。寧ろ滑稽の甚き者にあらずや。或は謂ふ、要決の卷首に署して「大慈恩寺沙門基撰」といふ、然るに基の名多人に通ず。三論の明匠に道基あり、又玄基あり、慈恩寺に圓基あり。要決の作者は所謂窺基法師にあらずして、他の基法師ならんのみと。若し此の說に依る時は、西方要決は卽ち擬託の書にあらざるが如し。

されど是れ一種の想像にして、素より信憑するに足らざるなり。蓋し思ふに往昔の世、名を上賢に藉りて經教を擬託する者甚だ衆し。皆護法の精神に出で所宗の敷衍を圖らんとするに因る者にして、敢て其の志を罪す可らずと雖も、然れども涇渭を混淆し、紫朱を紛綸して、累を哲人に及ぼせるの責は固より免るべからざる者あるなり。

二

次に彌陀經通讚疏に就いて、其の眞僞を考定すべし。此の書今三卷あり、六門を以て料簡す。第一總敍源由、第二別明宗旨、第三彰經體用、第四翻譯時人、第五論於頓漸、第六正釋經文是なり。別に前序あり、略して經題を解す。古より稱して慈恩の作といふも、予は之を熟讀して、頗る其の眞撰にあらざるを疑ふ所ある者なり。其の後跋に記する所を見るに、此の書は高麗の僧統義天が、元豐元祐の間(西紀一〇七八―一〇九二)支那に入りて方めて齎らせる所にして、其の高麗より日本に傳へしは、永長二年(一〇九七)三月廿三日なりといへり。義天は入宋して有名なる靈芝の元照(一〇四八―一一一六)に師事せし人なるが、其の元照が著はせる彌陀經義疏上卷には、慈恩法師通讚一卷を作ると記し、又王古が元豐七年(一〇八四)に撰述せる直指淨土決疑集の中に、此の書の本文を引載し、楊傑が同集の序にも、慈恩通讚首稱十勝」と記するを見れば、當時已に此の書が眞撰として流行せしことを知るに足るなり。その後、宗曉が樂邦文類、大佑が彌陀經略解、並に淨土指歸、袾宏が彌陀經疏鈔等に、此の書を引說せりと雖も、曾て其の眞僞を疑ふ者なきが如し。吾が邦に在りては、記主禪師の如き盛に之を引用し、決疑鈔第五には、西方要決、小經通讚及同經疏の三部を列ねて並に慈恩の眞撰となせり。唯仁岳一人のみは此の書の眞僞に關し曾て之を云云せり。卽その著彌陀經新疏序に云く、

茲經也、始慈恩法師嘗有撰釋、復有疏本、亦題基公之名。相傳云、此無名師假托而行也。校其文旨實大同而小別、

これ崛竟の證文なり。仁岳は初め知禮の門に遊び、治平元年(一〇六四)に歿す。元照、王古等の先出なり。然るに當時已に慈恩の彌陀疏二本あり。其の文旨大同小別にして、同く基公の名を題すといふ。此れ豈に今日見行の單疏と通讚疏との二本にあらずや。予嘗て此の二本を比較するに、文前分別は所載太だ殊れり。卽通讚疏は六門を以

て料簡し、單疏は七意を以て分別せり。六門は前の如し。七意とは、第一敍佛身、第二敍其土、第三敍不退轉、第四敍偏讚之心、第五敍體性、第六敍部類宗趣、第七判釋文義是なり。然るに經文解釋に至りては、其の文段の分科全く相同く、細節といへども毫も差點を見ることなし。一經を序正流通の三段に分ち、如是我聞已下を序分とし、爾時佛告舍利弗已下を正宗となし、佛說此經已以下を流通分となし、正說の中更に六段を開き、又其の一段毎に各數節を分つこと、二本全く殊らず。但その名目相同からざるのみ。試に其の例を出すべし。

正說分中文有六節、一標淨土果二擧淨土因三引六方以證誠四指三生以顯實五他述希有六敍甚難、就初文復分二先略後廣、就略中復有七段、一指方處二述遠近三擧國號四顯導師五明垂化六徵題目七釋得名、廣中初明依報器世間淸淨依果後明正報如來功德淸淨正果、就初文中有八一寶林曜顯二德水澄爛三妙鼓鳴天四檀金飾地五時華舞廻六羽駕遊方七鳥韻法音八風生善念(單疏)

第二正宗分大文分六、第一標淨土之宗果、第二明極樂之因殊、第三諸佛證明第四三生發願第五彼尊讚嘆、成曰希奇第六我佛敍陳獨稱難事、初文分二初略明淨土二廣明淨土、初文有七一指方所二明數量三顯國名四明化主五辨說法六徵國名號七結成極樂、第二廣明淨土文分爲二、初明國土莊嚴二辨佛身功德、初文分八第一樹飾四珍第二池嚴衆寶第三空盈天樂第四地布黃金第五華雨長天第六人遊諸國第七鳥吟妙法第八風吹樂音(通讚疏)

餘は准じて知るべきなり。蓋し一の經文に兩種の疏を作ることは、古來その例甚だ稀なる所なり。但だ異常の事實ありて前說を是正するか、若くは大に之を布衍するかの要あらば、之を敢てすることなきにあらざるべしと雖も、然らざる以上は何人といへども徒らに文筆を弄して、同一疏釋を再びするの愚をなさざるは明かなり。今此の二本を見るに、實に大同にして小別なり。慈恩何の暇ありてか是の如く兩種の疏を製して、而かも一經を釋せんや。予は定むで其の孰れかゞ必ず假托の書なることを知る者なり。然るに前に引ける仁岳の文には、唯だ譔釋といひ又疏本といひて、見行の二本の中何れを眞となし僞となしたるや知るべからずと雖も、予の私見を以てすれば、無名師の假托して行ふ所のものは必ずや單疏には非ずして卽通讚疏なりしならんと推想する者なり。今先づ通讚疏に就きその疑點をあげ、次に單疏

の信ずべきことを論せん。

嚮にもいへる如く、通讃疏には總じて六門あり。その中、前の五門は文前分別、所謂懸談にして、後の一門は正しく經文を釋せるなり。然るに其の文を熟讀するに、徹頭徹尾剽竊にして慈恩の他の章疏を悉く斷截拔萃したる者の如し。就中、文前分別及序分は主として法華玄贊に依り、正說分は單疏に憑れる者にして、復兼ねて義林章及彌勒上生經疏の文を拔錄せし所なきにあらざるが如く、釋義の體裁は玄贊に酷肖すと雖も、文法稚弱にして固より同日に論ずべからざる者あるに似たり。且く文前分別の初の二門は法華玄贊により、次の二門は單疏によりて設くる所なり。卽玄贊の「一敍經起之意」は、此の疏の「第一總敍源由」にして、「二明經之宗旨」は、此の「第二別明宗旨」なり。又單疏の「第五敍體性」は、此の疏の「第三彰經體用」にして、「第六敍部類宗趣」は、此の「第四翻譯時人」なり。是の如く彼の二書の文前分別を參酌綺互して以て此の書の懸談を製したること、文に在りて自ら明かなるを得べし。先づ「第一總敍源由」の一段の中、初の法華經方便品云云の五行半は、玄贊一左二酬願因の下の全文にして、又如論說云云の五行は、亦同左四酬請の文を要略せる者なり。但だ彼れには「說此經」といへる

を、此れには改めて「說諸經」となせり。是れ蓋し失謬の甚き者なり。何となれば玄贊の中には、別して法華經の興起を敍するが故に、自ら法華の文を引いて盡く之を述成せり。餘經に通ずるの義全く無きに非ずと雖も、而れども是れ卽ち法華一經の興由にして、移して諸經に準例すべからざる者なればなり。三種輪云云の文も定めて慈恩の何等かの章疏に出でたる者ならんも、未だその據を見出すに暇あらず、學者幸に研詳せよ。次に「第二別明宗旨」の中、初に此方先德の四宗の判敎を出せり。此れ亦玄贊一左十明經宗旨の下の全文にして、唯その中、捨化城等の九字の蛇足を加ゑたるのみ。然るに玄贊の文を見るに、慈恩は元と此の光統等の四宗を排斥せんが爲めに、先づその所立をあげたる者にして、決して之を信ずるが故にあらず。开は文に在りて尤も明白なるに。今の通讃の文に、唯先德の四宗をあげて、却てその破文を略したるが如き、豈に無意味の甚き者にあらずや。次に三敎八宗の慈恩の判敎を出せり。これ復玄贊一左十の全文にして、亦唯末尾の「此經乃是應理圓實宗收卽淨土爲宗」の一行を加筆せり。然るに向きにもいへる如く、此の疏の中には四宗の判敎を破せず、又玄贊に「今依文判敎」云云とあるを、此の中「今」の字を略したるが故に慈恩の正意が果して此

れにありて、彼れに在らざることを詮顯するに由なく、一段の文は全く沒意味に陷いれり、豈に笑ふべきにあらずや。復次に其連文に更に說法不說法の二宗あることをあげたり。是れ亦玄贊一（左四十）の全文にして、唯その中、無性難答の一節を省略せるのみ。然るに慈恩の判敎は三敎八宗にして、此外に說法不說法の二宗を建立して、一代を割判せしことなし。玄贊及義林章第一に依るに敎體を判ずるに兩說あり。龍軍無性等は、佛不說法の義を立て、護法親光等は佛說法の義を立つ。慈恩は護法に私淑するが故に、佛說法の義を取り、却て無性等を破せりと雖も、而も唯此等は印度論師の一種の異說に過ぎずして、敎判にあらざると固より明かなり。而るに今「別明宗旨」の下に之を引き、三敎八宗と竝べ列ねたるは甚しき失謬といはざるべからざるなり。

「第三彰經體用」の下五門分別せり、一攝相歸性、二攝境從心、三攝假從實、四體用別論門、五聚集顯現門なり。是れ義林章一本（左二十八下）體性不同の文の取意にして、卽前の護法等の佛說法家の所說を拔萃せる者なり。若し文の連絡をいはゞ、向きに出せる說法不說法の二家の異說は、宜く此章の上に引用すべし。徒らに剽竊の痕を蔽はんと努むるが故に、無意味に連文を斷截し、却て馬脚を露白するの情寧ろ甚だ哀れむべき

なり。況や義林章に依るに、護法等の所說の出體に唯四重あり。一攝相歸性體、二攝境從識體、三攝假隨實體、四性用別論體是なり。此の外に更に第五の聚集顯現體なる者あるとなし。但だ彼の文に四重の出體を釋し訖りて、次に廣く聚集顯現の義を明かし、此の義あるに由るが故に說者聽者義皆圓滿し、俱に聲字二種究竟して、自心の上に聚集顯現するを以て敎體となすことを論せり。然るに通讃の匿れたる作者は、その趣旨を解せざるを以て、彼の一段の文を總じて聚集顯現門となし、之を前の四重の出體に併せて五門となしたるや明かなり、豈に妄昧の甚しき者にあらずや。加之、攝假從實、體用別論の下の解釋、全く謬れるのみならず、無性等の不說法家を破せんとして、影像敎體等の文字を濫造せし如き、到底文を讀むでその何事たるかを解する能はざる所なりとす。第四翻譯時人」の下、初に彌陀經に前後四譯あることを記せり。然るに此れ亦失謬たるを免れず。此の經には予が曾て論ずる如く、唯三譯あり。後出彌陀偈頌の如きは、唯五十六句にして、恐くは無量壽經の抄出に過ぎず、決して彌陀經の異譯にあらざることは文に在りて明白なり。たゞ後出阿彌陀偈經と題するが故に、漫に此の經の異譯と妄推せしや疑なし。寧ろその愚を笑はざるべけんや。次の

連文に「三時之中此經是何時所攝」と問ひて、其の答文に「因此問故略明諸師判教」といひ、而して其の已下此土判教五家、西天判教二家を出せり。此れ義林章第一及び法華玄贊の撮略なり。然るに前の「第二別明宗旨」の下に已に三時の判教を列らねて、其の第三非有宗に深密法華及此の經を攝すと明記したれば、再び此の章に至りて亦此の經の所攝を問ふを要せず。況や此の章は翻譯時人を明すの處なれば、諸師の判教を列ぬるに固より便ならざるおや。若し必ず之を出さんと欲せば、宜く「別明宗旨」の中にかゝぐべき所なりとす。第五論頓漸」の下の一段は、亦玄贊一左七の文を拔錄せし者なり。然るに彼の文は菩薩に「頓悟漸悟の二種あることを論じたる者にして、教の頓漸を明せるにあらず。教の頓漸を明せる處は、彼の文一左三に在り、卽頓に凡夫より佛果を求むるを頓教となし、二乘より佛果を求むるを漸教となせる者なり。通讃の作者、教の頓漸を論せんと欲して、過つて菩薩の頓悟漸悟の文を引けり、豈に一大笑に値いせざらんや。教の頓漸を論せんと欲したることは、其の末尾に「此經者一心不亂十念專精便往淨土頓拋濁世卽頓教所收」といへるに見て明かなり。是れ卽ち淨影、天台の觀經疏等に倣ひて、亦此の彌陀經を頓教に攝せんと企てたるや言を俟たざるなり。其の他いづれの章段を見るも、用語未熟にして殆ど句をなさゞるのみならず、哀れにも剽竊の痕を掩はんが爲めに、種々の新語を濫造し、或は擅に原文を取捨改易して、却つて愚人を迷惑せんと勉めたる者少からざるが如し。要するに文前分別の五門は唯法華玄贊及び義林章を無意味に拔錄したる者にして、其の過謬尤も多く、初心の學童と雖も、尙之に優るの解說を試むべきや必せり。曷ぞ支那法相宗の大成者たる慈恩法師その人にしてかゝる謬解をなすべけんや。かゝる愚作を貽すべけんや。

次に正釋本文の中、序分の一大段は亦全く玄贊の文を剽竊し、及び處々に上生經疏等を摘採せり。且く先づ前序の中に已に經題を解したるに、今また序分の劈頭に題目を解するは豈に繁重にあらずや。「如是我聞」を贊する一段の中、「若依古師序分有六」の下の六行の如き、卽此れ上生經疏卷上五二右十の全文にして、「五所被機」の半行は、例に依りて無意味に改竄せる者なり。次に其の連文の「如是我聞等以三門分別」已下の七十一行無慮一千三百餘字は、玄贊一三十五右下の全文を一字をも改めず引載したる者にして、其の無謀なる大膽には何人も驚く所なるべし。但た尤も笑ふべきは、玄贊には「如是

に關し種々の義をあげ了りて「以上合有一十五釋」と結歸したるが故に、通讃にも之に倣ひて尤も拍子拔けに「已上數解」と記したる如き抑も何たる滑稽ぞや。又その連文の「言我聞者傳法菩薩」已下の三十四行は、亦玄贊一三十九左已下の全文にして、何等の異同も見ることなし。總じて如是我聞の一段は一筆をも加えず、悉く慈恩の他の章疏より剽竊せし者なり。次に「一時」の下、初の十一行は玄贊一四十一左已下の全文にして、「不別約四時八時」等の一行半は、同四十二左の二處の文を補綴せしこと言をまたず。「佛」の下十六行二百九十餘字あり、亦玄贊一四十三左已下の全文にして、一字をも改むる所なく、「在舍衛國」の下、三十六行六百七十餘字あり、悉く上生經疏上三十三左已下の全文にして、其の中、唯「眞諦法師」云云の二十餘字を省略せり。茲に笑ふべきは、法華經は靈山の說會なるが故に、彌陀通讃の中に之を摘採するに由なく、上生經は舍衛國給孤獨園の說會なるを以て、賴いに之を剽竊し得たること是なり。「與大比丘衆」の一段は、亦復玄贊一四十八右已下の文を謄寫せるものにして、而かも稍改易せり。卽ち彼れには五門分別なるを、此れには四門とし、又彼れには五の來意をあげたるを、此れには二の來意となしたる如き、具略少く異れりと雖も、斷取の痕歷々として固より掩ふ可らず。「皆是大阿羅漢」の下は、まさに其の馬脚を露はせり。什譯法華經の初に、阿羅漢の嘆德唯六句あり。然るに菩提流支竝に勒那摩提の翻せる法華論の中には十六句あり。法華玄贊一五十二左に此のことを記して、

經皆是阿羅漢至心得自在、贊曰此嘆德也、經有六句、新翻及舊論中有十六句、云皆是阿羅漢諸漏已盡無復煩惱得眞自在云云

といへるを、通讃の作者は、其の旨を解する能はず、無意味に之を拔錄せり。卽ち

經云皆是大阿羅漢衆所知識、贊曰第二嘆德也、新翻大般若及舊論中有十六句、皆是阿羅漢諸漏已盡無復煩惱得眞自在等、此經之中是初一句

これ果して何といふことぞや。玄贊は法華の疏なるが故に、新翻及び舊論と什譯經との嘆德の多少を比較するの要あり。今彌陀通讃の中、何の用ありてか法華論との同異を對校せんとはする。且夫れ六句十六句の數へ方は、皆是阿羅漢を一句となすものなり。若し然れば大阿羅漢衆所知識は明かに二句なり。然るを「此經之中是初一句」といへるは、全くこの一段の文を解せざる者の言なり。復その連文の「阿羅漢者唯識論中」已下の四行は亦玄贊一五十九左の文「舍利弗」の下「梵云奢利弗咀羅」の一句は玄贊一六十一左の文、已下の十二行は、上生經疏上四十四左已下の全文、「摩訶目犍連」の下、初の五行は玄贊一

二六十全文「與鶩子少爲親友」已下十一行は上生經疏上四十四右已下の文を稍改削せる者なり。爰に笑ふべきは、法華經の中には「大目犍連」といふが故に、玄贊に「梵云摩訶沒特伽羅言」大目犍連者訛也」と記せるものなるも、彌陀經には「摩訶目犍連」といひて、大目犍連といはず、然るを通讃の作者、漫に注意せず、猶彌陀疏の中に「言大目犍連者訛也」と記せり。此れ豈に剽竊の爭ふべからざる瘢痕にあらずや。「摩訶迦葉」の下、四十四行八百廿餘字は、上生疏上四十右已下の全文「摩訶迦旃延」の下、初の八行は玄贊一六十右已下二の全文「摩訶俱絺羅」の下、初の一行半はまた玄贊一二六十の全文にして「曾與妹論義」已下の十二行半は玄贊の例指によりて、律の本文を摘錄したる者なり。「離婆多」の下、初の一行半は例の如く玄贊一二六十の全文にして「智度論說」已下は、亦玄贊の例指によりて智論の文を拔載せる者なり。「周利盤陀伽」の下、十四行あり、こは單疏二十右の文にして、稍省略せり。「難陀」の下、初の三行は玄贊一二六十の全文にして「佛化難陀」已下は自ら律文を取捨せる所なり。文勢卑醜智者を俟たずして乃ち辨ずべきなり。「阿難陀」の下、初の三行はまた玄贊一四六十の全文「又論云」已下の二行半は單疏三十右の全文「羅怙羅」の下、初の一句は玄贊一四六十右に出づ、餘は恐くは慈恩が無垢稱經聲聞品疏の中に在らん。予未だ此の書を見ず、故に明言する能はざるのみ。「憍梵波提」の初の三行は例に依りて玄贊一二六十全文「恐人謗毀」已下七行は單疏四十右の文を稍改易せる者なり。「賓頭盧頗羅墮」の一段は單疏四十右の文を取捨せしものなりと雖も、而かも事實は多く錯謬せり。「迦留陀夷」の初の四行は單疏五十左の文「摩訶劫賓那」の初の二行は玄贊一二六十の文「薄拘羅の一段は亦玄贊一六十右已下三の文にして少く改易せり。「阿菟樓馱」の初の一行半は玄贊一二六十の文にして、其の餘は諸種の章疏を雜糅して自ら句を成せる者なり。「竝諸菩薩」の初の六行は復玄贊二初右の全文「云摩訶薩者」の二行は同初左の文「文殊師利」の下「是北方常喜世界」已下の三行は玄贊二十右の全文「法王子者」已下の二行は單疏九十右の全文「阿逸多」の下の一段は上生經疏上十右の文を改削せる者なり。然るに此中甚だ錯謬あり、先づ「阿逸多此云慈氏」は誤謬なり、上生經疏等に依るに、阿逸多は彌勒の字にして。此に無能勝と翻ずる所のものなり。「慈」と翻ずべき梵言には二種あり。若し母の性慈なるが故に、因つて彌勒を慈氏と名くといはゞ、梅咀利曳尼といふべし。尼は是れ梵音女聲なるが故なり。若し彌勒自ら生々に慈行を行ずるの義に取らば、梅咀利曳那といふべし。那は是れ男聲なるが故なり。然るに通讃の作者、都べて之を知らず、或は阿逸多此に慈氏と翻ずといひ、或

は母性不調、子を懐むで以來、慈心厄を救ふ、因て號を立てゝ梅咀利曳那と稱すといふ。そも何たる失謬ぞや。玄奘の譯場に參し、其の上足として學殖一時に竝びなき慈恩法師その人が、かゝる過誤を犯さんことは斷じて之れなき所なるべし。「乾陀訶提」の一段は單疏[illegible]の文なり。但し「名不休息」の下、「未知爲」「卽翻」「此乾陀訶提爲當非也」の一句を省略せり。是の故に文意不通となす。「釋提桓因」の初の六行はまた玄贊二[illegible]の全文なり。要するに序分の一大段は、盡く玄贊等の剽竊にして新たに筆を著けたるもの殆ど稀なり。適〻之ある時は、行文俚俗にして木に竹を接ぎたるの觀あり。加之、努めて單疏の文を引用するを避けたる者の如く、若し已むことを得ずして之を斷取するも其の痕跡を掩はんとして、空しく苦心せるの狀宛として見るべき者あるが如し。或は謂ふ、序分の如きは、何れの經に在りても大同なり、故に之を贊釋するに、彼此の文句相同ことあるは固より免れざる所なり。今法華玄贊と彌陀通讃と文字章句互に殊らずと雖も、同一人が同一の經文を釋して異說あるこそ却て疑端すべけれ、相同きは適〻以て兩疏が竝に其眞撰なることを證するならん耳と。此れ一往その理なきにあらざるなり、恐らくは通讃の匿れたる作者も、此の一往の理を幅竟の依憑として、斯かる大膽の剽竊を敢てしたる者ならん。されど如何に同一人が同一の經文を釋すればとて、斯くも善く相同き者は世に稀なるべく、若し全く異說なくむば、他の多くの場合に於ての如く之を例指して可なるべし。徒に重言覆述するは空く繁縟を加うるに過ぎざればなり。假令ひ又書冊異るが故に繁縟なりと雖も、之を重錄するの要ありといはゞ、其の中、過誤錯失五三にして止らず、破綻の歷々として掩ふべからざる者あるを如何せんや。今但だ序分の一段を見るも、疑端すべき所如此甚だ多し。正說分に至ては猶之より甚きものあり、乞ふ少く之を論せん。

響にもいへる如く、正說分の分科は全く單疏に同く、毫も其の差點を見ることなきのみならず、一々の下の釋義も亦大抵同疏の文を拔錄せり。唯その名目及び次第相同からず、勉めて剽竊の痕を掩はんとするの狀歷々たり。されど隱れたるより顯れたるはなし、苟も此の二疏を比較する時は、何人と雖も容易に其の眞膺を知悉すべし。但だ古今の學者未だ審かに對撿せず、是の故に曾て其の紫朱を辨じ涇渭を分つ者あることなく徒らに明白白たる僞書をして長く天下に行はれしむ。寧ろ太だ苦がからずや。「有世界名曰極樂」の下、七門を以て分別せり。その中、極樂と世界を相違釋

となし、極樂は能居の者にして、第六識相應の樂受なり。世界は所居の土にして、卽無情なりといふが如き、抑も何たる釋體ぞや。彼に世界あり、名けて極樂といふ。極樂は卽その世界の名にはあらずや。此に山あり、名けて富士といふ。富士は富める士なるが故に有情、山は無情、是故に富士と山とは相違釋なりといはゞ、人誰れか其の狂妄を笑はざる者あらんや。五位分別、三科收攝、皆例して之を破すべし。總じて此の一段の分別は、頗る稚氣あることを免れず、法華玄贊の杖を失へる通讃の作者は、あはれ今より金口の本文に對し盲目たらざるべからざるなり。「今現在說法」の下「慈悲廣大利物弘深現」「初地之報身」「化」「無邊之根器」故云「今現在說法」の文あり。然るに慈恩の意は、前にも論じたる如く、凡夫報土に入ることを許さず。今若し果して今現在說法の彌陀を初地の報身となさば、則此疏の中に盛に凡夫往生を鼓說するものと正さに自害をなす。此れ矛盾の尤も大なるものにあらずや。又「佛告告語也」「說者演說」「故者所以義」、「又者復也重也」「又者如前解」「道者路也」等、亦何ぞ「たる妙釋ぞや、「但受諸樂」の蓮華化生等の五行は單疏三三ページの文を改削し「有七寶池」の七寶の解釋は玄贊二四ページの全文「八功德水」の清淨覺經已下二行半は亦單疏五三ページの全文「池中蓮華」の觀經及平等覺經已下は同六三ページの全文「青色青光」の清淨經已下一行半は同六三ページの全文「黃金爲地」の觀經已下二行は同七三ページの全文「晝夜六時」の曼陀羅華已下七行は玄贊二右二十五下の文にして、その中、但だ五德を減じて四德となせり。又甚だ笑ふべきは、此の間處々に無量壽經を引くに、或は無量壽佛經といひ、或は瑞相經といひ、或は瑞應經といひ、或は廣經といひて一準ならざること是なり。無量壽經を瑞相經若くは瑞應經と名くることは、予等の未だ曾て聞かざる所、恐くは種々の經名を附して博涉を味者の間に衒はん所存ならん、豈におろかの至りならずや。「各以衣裓」の准諸經等已下は單疏八三ページの文「飯食經行」の一段は亦同八三ページの取意「五根五力」の下道品を釋する十六行三百餘字は玄贊六八四ページの全文とす。「光明無量」の無量壽佛經已下四行は單疏下四の全文「壽命無量」の無量壽經已下六行は同七四ページの全文「聲聞弟子皆是阿羅漢」の下の二問答は同八四ページの二問答を擅に改易し、尤も拙く剽竊の跡を暴露せし者なり。且夫れ「不說化淨土中四果皆有加行位中」云云の如き、文法をなさず。又「在」と「有」との別を辨せず、和人と雖もかゝる愚文を弄する者甚だ稀なり。「皆是阿鞞跋致」の下五種の不退を列ね復た問答せり。是れ單疏七左及同五十已下の撮要にして、而かもその旨趣を謬解せ

る者なり。五の不退とは、一信不退、二位不退、三證不退、四行不退、五煩惱不退なり。此の中、信不退とは、單疏に「以彼地勝緣强時長無間、遂得不退」といへるを指せる者なり。恐くは信心を以て、往生して不退を得るが故に、信不退と命じたる者ならん。位不退とは、亦同疏に「若依瓔珞本業經地前第七住名不退轉住」といへるを指し、證不退とは「依彌勒問論及智度論云菩薩若未至初地正位(中略)未能得不退轉」といへるを指し、行不退とは「依資糧論云若菩薩得無生忍時卽住不動地」といへるを指せる者なり。此の四不退は、獨り慈恩のみならず、諸餘の師にも亦其の意あり。然るに煩惱不退といへることは、經論の中に未だ其の說あることを聞かず。通讚の作者不明にして、單疏の文を誤解し定めて此の新名目を作りたるならん。卽ち單疏九右に上の四不退を敍し了りて、次に「若言念佛非斷惑者此非解煩惱性故不能斷然能伏惑令其不起」云云といへるに依り、念佛する者は煩惱の爲に退轉せられざるの義あるが故に、漫に煩惱不退の名を立て、之を第五に置きたるや疑を容るべからず。豈に是れ謬解の甚きものに非ずや。「應當發願願生彼國」の下、淨土の十勝天宮の十劣を出せり。西方要決の十異と相似たり。並に皆安樂集、淨土論、遊心安樂道、及び群疑論等を取捨して、この比較をなせるは已に明かなり。馬脚を露はさんことを恐れて、止た其の標目を陳らね、一一の解釋を避けたる如き、聊か苦衷を察すべきなり。「執持名號」の文殊般若經已下八行は亦單疏五五右の全文を謄寫し、「其人臨命」の珍禪師云云は同疏の文を拔錄したる者なり。「是人終時」の下、十疑論を引けり。然るに此の論は、天台の眞撰にあらず、後人擬托の書なることは、予が曾て論ずる所の如し。而かも通讚の作者、素より之を知らず、僞論の文を引いて、僞疏の理を證す、其の醜愈甚きを加ふる耳。加之其の連文に群疑論の中有の說を引けり。然るに懷感禪師は慈恩の後進にして、決して其の先輩にあらず。瑞應刪傳及び宋高僧傳第六に、其の生年竝に示寂の年を出さずと雖も、善導に謁して宿疑を氷解せしは事實なり。而るに善導は新修往生傳中卷に依るに、唐永隆二年(六八一)に寂を示す。卽ち慈恩の死(永淳元年西紀六八二)に先だつ僅に一年なり。已に慈恩は善導と同時なれば、その門人たる懷感が、慈恩の後進なること言を俟たざるべし。又設令ひ後進ならざりしとするも、慈恩が同時の出なる懷感の著書を引いて、自說を證するの理萬々之れあるべからざる者なり。古來佛敎を學する者、毫も歷史上の研究をなさず。尤も明白なる事實をも前後倒置すること甚だ少からず。通讚の作

者、素より其の尤なる者にして、識者の一大笑を値いする所なり。「恆河沙」の下、梵云殑伽云云の六行は玄贊二(四十左)の全文、證小事已下四行は單疏(九十)の文を稍改易し、諸佛名號の解釋は亦盡く同疏の文を重寫したる者なり。「若有善男子」の下、初の三行は單疏(四十右)の全文、阿耨多羅の解は上生經疏下(四右)の全文、次の問答は單疏(六十左)の全文、「是諸人等」の一段は單疏(六十左)の全文、「於彼國土」の一段亦同(六十)の全文、「如我今者」の終三行は同(六十)の全文なり。「五濁惡世」の下、五濁を解するに廣く五門を以て分別し、總じて五十七行一千八十餘字あり。此れ卽玄贊四(十六左已下)の全文にして、唯相攝の下、九十餘字を省略せるのみ、豈に無意味の剽竊にあらずや。蓋し彌陀經の疏釋として論說を要する者甚だ多し。佛身の如き、佛土の如き、淨土の因行の如き、所被の機根の如き、不退轉の如き是なり。而かも此等の問題に對しては、始終緘默して一言をも發せず、却て序分の如き、或は其の他、不必要なる文句を嘵々として解釋するが如き、豈に經疏の體を得たる者ならんや。慈恩は百本の疏主と稱し、論理精透文章勁拔、古今その比ある者殆ど罕れなり。安むぞかゝる愚書を製して、笑を天下後世に貽さんや。通讚の匿れたる作者は、當に百拜して誣妄の罪を慈恩法師の尊靈に叩謝せざるべからざるなり。其の他、

瑣末の剽竊、固より數ふるに逞あらず、今稍尤なる者を擧ぐるに大概上の如し。

之を要するに、彌陀通讚なる一書は、徹頭徹尾剽竊にして、慈恩の他の章疏を盡く斷截拔萃し、尤も拙く一の愚本を成せる者なり。之を喩うるに隣家の樹石等を悉く竊盜して、一の庭苑を造れるが如く、其の材料の尙隣家に屬するよりいはゞ、寧ろ之を隣家の園と稱するの至當なるに如かず。今もその如く、釋義の材料を悉く慈恩の章疏より剽竊して、一本を成せるものなれば、寧ろ之を慈恩の作と稱するの却て當れるやも知るべからず。是の點より見る時は、通讚の匿れたる作者は、他の擬托者に比して聊か恕すべき事情なきにあらざるなり。蓋し此の疏の文體を見るに、措辭用語甚だ幼稚にして、旨意貫徹せざるのみならず、往々にして句法を過まる者あり。素より唐宋名家の筆に似ず、頗る和臭あるを覺ゆ。若くは是れ日本撰述にあらざるなきか、甚だ疑なき能はざるなり。但し以ふに唐武會昌(八四五)の厄ありてより、支那の敎卷多くは散亡し、延いて唐末五代を經て兵火交〻競ひ、逸失加〻甚しく、或は海に杭して吳越に入り、高麗に流るゝ者尠からず。天台三大部の如き、吳越王の求によりて高麗國より之を送還し、仁王經疏の如き、四明の當時已に二本あり、衆咸くその僞を斥ふ

を以て、更に僧を日本國に遣はし、空くその却送を乞へりといふ。かくの如きは寧ろ一二にして止まざるなり、是の故に海舶往返の際、玉石を混淆し、一併して此の通讃の如き僞疏をも輸送せしや固より測られざる所なり。

三

次に阿彌陀經疏に就て更に論ずる所なかるべからず。此の書は、その後批に記する所を見るに、福州開元寺常契和上、大中七年(八五三)九月日以て、圓珍に捨與せし者といへり。珍は唐宣宗大中七年入唐、同十二年(八五八)歸朝せし者なれば、定めてその當時齎らし歸りし者ならん。その後、幾星霜を經て久しく逸亡し世に傳はらざりしが、寛政四年(一七九二)典壽和尚、京都智積院の藏中に此の書の存することを聞き、校訂を加へて之を鐫梓せり。今傳ふる所は卽ち典壽校訂の本なり。一卷あり、署して京兆慈恩寺基法師撰といへり。七門を以て料簡す。卽ち第一敍佛身、第二敍其土、第三敍不退轉、第四敍偏讃之心、第五敍體性、第六敍部類宗趣、第七判釋文義これなり。別に前序あり、略して經の題目を解せり。前きに引ける仁岳の序に、慈恩の彌陀疏二本あることを記し、又遵式(九六四―一〇三二)の往生西方略傳序に、慈恩法師造彌陀經疏二卷といへば、當時已に此の書の流行せしことを知るべし。義天が敎藏總錄にも、此の疏と通讃疏との二部を慈恩の作と記し、長西錄にも同く之を錄せり。唯だ東域傳燈錄には阿彌陀經疏一卷基撰と書し、その下に左の如くいへり。

此疏文義頗與慈恩師異、年來所疑也。此疏有兩本、一本云贊述、共云基撰、眞僞難定。基撰下云口決、定慶目錄所載同之。贊述者傳法院本、疏者北院本也。不可兩定。園城寺錄又有基疏一卷、

之によりて見る時は、當時彌陀經疏に兩本あり、一は贊述といひ、他は單に疏といふ。共に基撰といふも、眞僞定め難かりしを知るべし。但し茲に兩本ありといふは、同一本文にして、唯表題のみ異なれるの謂か、或は表題のみならず、その中に記載せられたる本文までも殊なれるの謂か、孰れとも測り難し。若し本文までも異れる別本とすれば、永超が疑ひし所はその何の本なりしか、若し別本にあらず卽今の單疏を指しゝ者とすれば、其の所疑は果して何の點にありしか、今日より之を推知することは素より能はざる所なり。加之、東域錄に、別に阿彌陀經疏一卷沙門懷成述と書し、その下にいふ、

或人傳云、此疏在延暦寺唐院、文與慈恩疏同

此の記載による時は、懐成の名を署せる彌陀疏もまた慈恩疏と同かりしを知るべし。但し茲に慈恩疏といへるは、通讃疏なるや將た單疏なりや知りがたく、懐成の疏といへるものも、今日傳はらざれば、其の異同を比較するに由なきなり。蓋し通讃疏は、その後跋に記する所によれば、永長二年(一〇九七)始めて日本に傳へし所なり。然るに東域錄は寛治八年(一〇九四)に纂集せし者なれば、當時通讃疏は未だ本邦に渡り居らざるべし。若し然らば此の錄の中に慈恩疏といへるは、當然單疏ならざるべからざるが如しと雖も、然れども前にも論ずる如く、通讃疏を若し本邦人の撰述とすれば、當時必ずしも其の本なしと斷言すべからず。已に慈恩疏に兩本ありといひ、復た懐成の疏は慈恩疏に同じといふを以て見れば、當時種多の本ありて或は慈恩と書し、或は懐成等と書したることを知るべし。又長西錄に依るに、僧肇が名を署せる阿彌陀經義疏一卷あり。記主禪師の法事讃私記等にも、この僧肇の疏を引用する所ろ甚だ多し、然るに了秀が法事讃記撿要第四に記して云く、今の記に引く所の肇公の疏を見るに、既に晉後所譯の稱讃淨土經、正法念經等を引くが故に、知ぬ晉の肇公にあらざること必せり。推知するに唐末宋始の人ならん乎。但し未だその本を見ず、後賢焉を詳にせよと。予始めこの記載を見、所謂僧肇の疏を獲てその眞似を考へんことを希望せり。この頃有る藏中に於いて偶、其の古寫本を得たり。中部稍缺けたりと雖も、初後は則完し。就て之を讀むに、文相全く慈恩の單疏に相同じく、稀れに一兩字の差殊を見るのみ。依て思ふ、往昔の世、經論を書寫し展轉相傳ふるの間、魯魚の差脫少からず。同一の本文といへども、有る者は甲の造と書し、有る者は乙の作と書して、後世に至りては遂にその眞否を判ずる能はざる者少からざるべきを。今それ僧肇は羅什の門下にして、晉義熙十年(四一四)に寂を示せる者なり。然るに僧肇の彌陀疏といへる者の中には、晉已後の經論を引證すること甚だ多し。此れ明かに此疏が肇公の所造にあらざるを示せる者なるに、長西錄を始め記主、望西等の諸師がその文を引用して、敢て之を怪まざるは、予の解する能はざる所なり。況や法事讃私記の如きは、慈恩の單疏と此の僧肇の疏とを併せ引用する所少からず。署名は殊れるも而かも同一本文なるべきに、有る時は肇云と記し、有る時は恩云と記すること甚だ以て謂れなきに似たり。但し記主所覽の本は、今の傳ふる所と稍同からざりしや

も未だ測られずと雖も、而かも私記所引の肇云の文を見るに、毫も慈恩單疏と異らざるのみならず、その卷下末に少善根の釋の下の如き、肇公義疏を引き畢りて慈恩同之と例し、同科にも、肇云の文の後、復た慈恩同之といへり。されば假令ひ些少の異點ありしとするも、十中九分九厘は互に相同きこと言を要せざるなり。然るに一言の之が眞否に關して辯說を試みられざるは予の甚だ惑ふ所なり。已に是の如く慈恩の單疏に關して、東域錄は眞僞定め難しといひ、或は懷成の疏と同本といひ、長西錄等は同一本文なるに、而かも僧肇と慈恩との二人が各撰する所となせり。晉の僧肇にあらざることは明かなるも、了秀がいふ如く唐末宋始に同名の人なしとも限るべからず。若し然らば果して何人の著作と定むべきや、素より斷言し易からずと雖も、予は次に記すべき事由によりて、定めて此の書が慈恩法師の直撰なるべしと信ずるなり。

先づ第一に、此の疏の分科が、通讃疏の分科と毫も殊らざるは、適此の書の信ずべき主なる原由ならん。通讃疏は前に論ずる如く慈恩の眞造にあらざるや明かなり。然るにその匿れたる作者が、單疏の科判を剽竊して全く範を茲に取りたるは、誠に此の疏が慈恩の眞撰なるに由らざるべからず。加之、正釋經文の中の如き、亦大抵單疏の文を拔錄せり。通讃の作者は、慈恩の他の著書より悉く文句を斷截して、以て一本をなさんと企てたる者なれば、若し此の單疏が慈恩の眞撰にあらざりしならんには、彼れは之を剽竊することを敢てせざるべければなり。是の故に予は若し通讃疏の僞造だに明らめ得べくんば、同時に單疏は眞撰として殘れる者なることを信ぜざるべからざるなり。次に又東域錄、義天錄、長西錄及諸宗章疏錄等に、皆阿彌陀經疏一卷窺基撰とせり。是れ亦此の疏の信ずべき證遷といはざる可からず。勿論通讃疏も諸錄に窺基撰といふと雖も、前に論ずる如くその中の記事は明かに僞作なることを表證せり。若し然らば予は今順序として單疏の內容を撿究せざるべからず。

文前分別六門の中、第一に佛身を敍せり。その說によるに、彌陀は報化二身に通ず。所謂登地の菩薩は佛の受用身を見、地前の菩薩凡夫二乘は變化身を見る。卽機の福力不同なるに由るが故に、身を現ずること麤妙の別あるなり。觀經に彼の佛の身長六十萬億那由陀恆河沙由旬と說けるは卽報身の證にして、鼓音經に彼の佛に種姓父母生處あり、及得道の菩提樹あることを示せるは卽化身の證なりといへり。是れ義

林章佛土章の說と正に相合する所なり。或はいふ、慈恩に通報化の義なしと。これ甚だ謬れり。義林章の文に明かに兩釋を設け、初釋は唯報非化の義を立つと雖も、後釋は報化二土に通ずるの義を明せり。上生疏は且く初釋に准ずるが故に凡夫難生と說くも、慈恩の意必ずしも凡小の化土往生を許さゞるにあらず。前きに文を引いて略して之を辨ずるが如し。次に第二に佛土を敍せり。佛土に四種あり、一に法性土、二に自受用土、三に他受用土、四に變化土なり。是れ卽ち義林章に成唯識論第十を引いて說く所と相同じ。此の四土の中、若し相を取つて言はゞ、西方に二土あり、所謂登地の菩薩は他受用土を見、地前生の者は化土を見る。淨土論に二乘女人不生と說けるは、是れ報土に據りて言をなすのみ。平等覺經に凡夫及び初發心の菩薩彼に往生すといひ、觀經彌陀經に三輩九品の往生を說き、及び彼佛に聲聞の弟子あり、又善女人執持名號等といふは、彼の化土の中に凡小の往生を許すの證なりといへり。此れ亦佛土章の因行を辨ずる中の意と相同じ。然るに若し西方を化土となして凡小の往生を許さば、攝大乘論に十念往生を別時意となすの說解し難きに似たり。此の疏に卽之を通じて云く、

論言別時意者有二意一以彼土增上樂處非少福能生二見衆生多不修道空唯發願有斯二意故道別時卽是彌陀經云不可以少善根得生是也若六時念佛卽三業無闕非便是持於十善或一日乃至七日由念佛故一念卽除八十億劫生死之罪此卽有多行又復願生行願相資

義林章及び上生疏の文と其の意稍同からずと雖も、然れども彼の章等は唯報の義に約し、此の疏は化土の義を取るが故に、自らその通意を殊にせざるべからず。已に西方を報化二土に通ずと許す以上は、攝大乘の別時意を解するにも、亦當然兩釋なかるべからざるは言を俟たざる所とす。西方要決にも之に類するの辯あり。されど彼の中には報化を分判せず、但だ發願の者は生ずべからずといふのみ。是れ尙未盡の解といはざるべからざるなり。次に第三に不退轉を敍す。彼の國に生ずる者は地勝れ、緣强く、時長く、無間なるを以て遂に不退を得、生じて卽是れ不退なりといふにあらず。又不退轉に住するにその三處あり、所謂第七住と初地と第八地となり。觀經謬準ずるに衆生彼に生じて不退轉を得るとは、但だ初地に生法二忍を得て更に退轉せざるを謂ふ、七地を取るにあらずといへり。かの上生疏の中に、西方決定不退の

說を否認せず、卽今と相同きを知るべきなり。又此の中、兜率に退ありといはず、故に要決の如く葛藤を生ぜざるなり。次に第四に偏讚の心を敍し、隨願往生經を引いて、若し十方に皆淨土ありと言はゞ、衆生の心則ち緩慢ならん、若し唯だ一處を示さば、心卽慇重なり。是の故に獨り西方を讚すといへり。此れ太だ分明の說にして、復た疑難の容るべきなし。次に第五に略して體性を敍せり。所謂淨土は佛及び菩薩の唯識智を以て體となす等なり。是れ佛土義林の中の出體の意にして、更に不審の處を見ざる者なり。次に第六に部類の多少と宗趣の所明とを敍せり。卽この經の部類に四本あり、觀經と無量壽と小阿彌陀と鼓音經となり。通じて淨土を明すをその宗旨となすと雖も、而かも別して之を論ずれば觀經は定散二善を以て宗となし、無量壽經は淨土を以て宗となし、小阿彌陀は斷疑證實を宗となし、鼓音經は轉業護難をその宗となす。而して此の四經の前後は、若し道理に準せば、無量壽は初、觀經は第二、小阿彌陀は第三、鼓音經は第四なりと雖も、若し事を以て推驗する時は、却て觀經は初、無量壽は第二なるべしといへり。是れ自ら公正の所論にして毫もその間に疑訝すべき點を見ることなし。要するに文前分別に六門ありと雖も、曾に些の紕繆を見出さざるのみあらず、慈恩の他の章疏に對撿するも何等矛盾の點あることなく、文勢は例に依りて雄健に、引證亦太だ概博にして、中古佛家の重鎭たる慈恩法師その人の眞撰として毫も褪色なきが如し。是れ予が獨り此の疏を信せんと欲する所以なりとす。

第七判釋文義の中、文廣く義繁くして、一一に之を品隲すべからず。且く唯其の二三をあぐれば、西方淨土は住は欲界に似たれども、而かも三界の攝にあらず、故に實の畜生なしといふが如き、又此の彌陀經は化土に約して說く、故に地前菩薩及二乘凡夫あり、但だ四種聲聞の中、增上慢の者なしといふが如き、又廣く阿鞞跋致を釋して、三處の不同あることを示し、其の中若し衆生彼に生して卽ち七八地に至ることを得ると言はゞ、其の位太だ高し、若し初地に至らば、卽ち觀經と相應す。然るに若し彼に生じて漸々に七地に至ることを得と言はゞ、理に於て妨なし。彼の佛は衆生をして悉く作佛せしめんと欲するが故に、彼に生じて爾許の時修道して卽ち佛を得るに至るべし。是の故に但だに七八地に住するのみにあらずといふが如き、又更に廣く別時意の難を通するが如き、又諸經を引いて淨土の種々の因行を示せるが如き、

悉く皆重要の論說なりといふべし。然るに此の中復た何等の疑點をも含むことなく、論理明晰にして自ら一家の說を成せり。慈恩にあらずして誰れか能く之れをなさんや。

思ふに宋初の頃、支那に於て已に慈恩の疏兩本あり。然るに其の後單疏の本恐くは散逸して多く傳らず、是の故に唯通讚疏を慈恩の眞撰と誤認し、展轉依用して以て謬を後世に貽したる者なるべく、支那撰述の書中に、通讚疏を援引すること少からざるも、單疏を用ゆる者殆ど罕なるの事實、以て之を證し得べし。本邦に於ても、亦中ごろ單疏の本を逸失し、了秀の如きも未だその本を見ずといへり。典壽の再刻あるに非ざれば幾ど僞を以て眞を濫りて、復び慈恩の素意を明らむるに由なからんとす、豈に殆からずや。

二八　善導大師の事蹟

善導大師は淨土敎に於て最も重要の祖師なり。法然上人は善導の敎に依りて淨土宗を開き、彌陀の化身なりと信じて深く之を尊崇せられたり。選擇集の中に、偏に善導一師に依りて淨土の宗旨を建立することを宣言し、事每に善導の判釋を規矩とせられたり。眞宗にては七祖を立つと雖も、而も中に就て善導を以て獨り佛の正意を明らめたる者となし、西山派に於ては、五祖の中、特に善導の釋義を古今楷定獨得の法門となせり。日本の淨土敎は、善導流の專修念佛ひとり其の隆盛を極め、法然上人の淨土開宗以來、七百餘年間、民間に於ける實際の信仰は一に善導の敎義によりて繫がれたるものと謂はざるを得ず。支那淨土敎史に在りては、廬山慧遠の地位最も高しと雖も、而も善導の感化亦決して鮮少にあらず。瑞應刪傳に、佛法東行より未だ禪師の如き盛德あらずと云ひ、遵式の西方略傳、擇映の修證儀、用欽の白蓮記等、悉く彌陀の化身なりと讚し、樂邦文類、佛祖統紀、淨土指歸等、亦皆慧遠を以て蓮社の初祖とし、善導を第二祖となせり。

善導の事蹟を記する史傳少からず。今試に之を左にかゝぐ。

續高僧第二十七(道宣)瑞應刪傳(文諗少康)共錄)念佛鏡(道鏡善道)共集)西方略傳(遵式)淨土往生傳卷中(戒珠)新修往生傳卷中(王古)新編淨土寶珠集(陸師壽)帝王年代錄(玄暢)往生淨

土略傳(清月)龍舒淨土文第五(王日休)樂邦文類第三(宗曉)佛祖統紀第二十六(志磐)淨土指歸卷上(大佑)廬山蓮宗寶鑑第四(普度)釋氏稽古略第三(寶洲)往生集第一(袾宏)淨土晨鐘第十(周克復)以上。支那類聚淨土五祖傳(源空)京師和尚類聚傳(幸西)善導和尚類傳(覺瑜)善導和尚行狀記(諦忍)善導大師別傳註(鐵空)光明大師別傳纂註(葵翁)

此の中、續高僧傳は南山道宣の撰する所にして、善導と同時に在れば、其の記載最も古く且つ信ずるに足るべし。瑞應刪傳は文諗少康の共錄するところ、文諗の事蹟は不明なれども、少康は後善導と稱せられたる高僧にして、唐貞元廿一年を以て寂せられたれば、其の記載亦隨て古し。念佛鏡は道鏡、善道の共集にかゝる。此の二師の事蹟亦全く詳ならずと雖も、其の中に記する所によりて考ふるに、少康と殆ど同時にして、太曆の頃世に在りし太行の門人ならざりしかを疑ふべきものあり。兎に角此の書に記載せる斷片も、亦多少の價値なきに非ざるべし。西方略傳以下は卽ち宋代以後の著作にして、多くは瑞應刪傳等を敷衍せしに過ぎず。類聚淨土五祖傳以下、日本の撰述にかゝるものは、唯だ支那の史傳を集錄したるまでにして、固より創作にあらず。是の故に善導の紀傳としては、吾人は續高僧傳、及び瑞應刪傳を最も依憑すべきものと信ずるなり。然るに此の二傳は其の記事簡潔にして、共に一代の行化を詳にせず。蓋し案ずるに、善導は光を韜み德を隱くして、敢て世と交らざりしを以て、人其の行跡を知るものなく、遂に間世の高德をして傳を後代に逸せしむるに至りしものなんらん。

瑞應刪傳に依るに、善導は姓は朱、泗州(安徽省泗州盱眙縣北一里)の人。少うして出家せし時、西方の變相を見て大に感悟し、次で具戒を受くるに及で、妙開律師と共に觀經を看て悲喜交〻至り、乃ち歎じて曰く、餘の行業を修するも迂僻にして成じ難し。唯だ此の觀門のみ定んで生死を超えんと。遂に道綽禪師の許に至り、因て念佛せば實に往生を得べきや否やを問ふに、綽は一の蓮華を辨せしめて、七日行道して、若し其の華萎まずんば、卽ち往生を得んと答へたりとあり。續高僧傳第二十七には、凡て鄉貫氏族を記せず。唯だ近ごろ山僧善導なる者あり、寰寓に周遊して道津を求訪し、行いて西河(山西省太原縣)に至り、道綽に遇ひて、唯だ念佛彌陀の淨業を行せしことを敍し、蓮華行道の事に及ばず。蓋し善導が道綽に就て淨土の敎を受けたることは、諸傳の一致する所にして、固より事實疑ふべくもあらず。然るに新修往生傳卷中に

は二人の善導を出だし、共に教を道綽に稟けたることを記する中、一人の善導は道綽を晉陽(山西省太原縣)に訪ふの途上、時適ま玄冬の首に逢ひ、落葉の深坑に塡滿する中に入りて安坐し、一心念佛して覺えず數日を度り、遂に空中の靈告を聞きて、進んで綽禪師の所に至りて、無量壽經を受け、因て入定して七日起たざりしことを敍し、其の連文に、或人善導に問ふに、念佛して往生を得るや否やを以てせしに、導は一莖の蓮華を辨ぜしめて之を佛前に置き、行道七日するに、若し花萎悴せずんば卽ち往生を得んと答へたるを以て、其の人、師の言の如く行じたるに、果然七日花萎黃せざりしかば、道綽は其の深詣を歎賞せし由を記せり。新修傳の記載が錯謬多かるべきは、後に至て之を論ぜんも、此の一段の記事は、瑞應傳と全く主客を顚倒せるを見るべし。續高僧傳第十九に掲ぐる道綽傳の中に、又乾地に蓮華を挿むに、萎まざるもの七日とあり。是れ恐らくは善導受敎の事を指せるならん。若し然らば蓮華行道は、綽と導との間に起りし事實と見るを可とせん。

善導が道綽を訪問せし年代に就ては、續傳、瑞應共に之を記せざれども、戒珠往生傳、新修傳、龍舒淨土文、樂邦文類等、皆竝に唐貞觀中と云へり。佛祖統紀第三十九には、之を貞觀十五年の條下に置けり。吾人は次に記載する事實に依りて、少なくとも貞觀十年以前に在らざるべからざるを信ずるなり。卽ち瑞應傳に依るに、東都英法師、華嚴經を講ずること四十遍。綽禪師の道場に入り、三昧に遊んで而して歎じて曰く自ら恨む、多年空しく文疏を尋ねて身心を勞せしのみ。何ぞ期せんや念佛の不可思議なることを。善導云く、經に誠言あり、佛豈に妄語せんやと。此の一段の答問は、言ふ迄もなく善導が道綽の室に入りし後に起る。然るに英法師と云ふは華嚴の道英なり。續高僧傳第二十五、竝に華嚴傳記第三に依るに、道英は深く禪定に達し、又曾て竝州(山西省太原縣)に遊びたることを記せり。而も彼れは貞觀十年九月を以て寂を示したれば、道綽の道場を訪問せしは、勿論其の以前に在らざるを得ざればなり。

善導が道綽の教を受けて後、長安(陝西省西安府)に入りて念佛を弘通せしことは、續高僧傳已下、諸傳に悉く之を載せり。續傳に依るに、旣に京師に入りて廣く此の化を行じ、彌陀經を寫すこと數萬卷、士女奉ずる者其の數無量なり、時に光明寺に在りて說法すと云ひ、瑞應傳には、彌陀經を寫すこと十萬卷、淨土變相を畫くこと三百鋪。所見の塔廟、修葺せざることなしと云へり。變相とは所謂曼陀羅にして、當時旣に淨土

曼陀羅の流行せしを見るべし。善導は出家の時、西方の變相を見て大に感悟せしを以て、人をして亦信念を發起せしめんが爲に、多く之を描寫せしものならん。又續傳に依るに、人あり、善導に告げて曰く、今佛名を念ず、定で淨土に生ずるや否や。導曰く、定で生ず定で生ずと。其の人禮拜し訖りて、口に南無阿彌陀佛を誦じ、聲々相次で光明寺の門を出で、柳樹の表に上り、合掌して西を望み、倒に身を投じて下り、地に至て遂に死す。事、臺省に聞ゆと云ひ、西方略傳には、長安の屠兒寶藏なる者、善導が人を勸めて念佛するに因りて、滿市、肉を買ふ者なきを憤り、刀を持して往いて導を害せんとせしに、導は懇に之に淨土を示したれば、彼れ遂に高樹に上りて捨身往生せしことを、記し、新修往生傳には、京華諸州の僧尼士女、善導の敎を見聞して或は身を高嶺に投じ、或は命を深泉に寄せ、或は自ら高枝より墮ち、身を焚いて供養する者百餘人に向んとし、又梵行を修して妻子を棄捨し、彌陀經を誦すること十萬より三十萬(統紀等五十萬に作る)に至り、阿彌陀佛を念ずること日に一萬五千より十萬遍に及ぶ者、及び念佛三昧を得て淨土に往生せし者數を知るべからずと云へり。以て敎化の盛なりしことを見るべし。

善導の行狀は、極めて如法峻嚴にして、己れを持すること頗る謙讓なりしが如し。瑞應傳に依るに、禪師平生常に乞食を樂み、每に自ら責めて曰く、釋迦すら尙ほ乃ち分衞す。善導何人ぞ、端居して供養を索めんやと。乃至、沙彌にも竝に禮を受けずと云へり。又新修往生傳に依るに、堂に入れば則ち合掌胡跪して一心に念佛し、力竭くるに非ざれば休まず。乃至寒冷にも亦汗を流して以て至誠を表す。出れば卽ち人の爲に淨土の法を說きて諸の道俗を化し、道心を發して淨土の行を修せしめ、暫時も利益をなさゞることなし。三十餘年、別の寢處なく、暫くも睡眠せず、洗浴を除くの外は曾て衣を脫せず。般舟行道禮佛方等を以て己れが任となし、戒品を護持して纖毫も犯さず。曾て目を擧げて女人を視ず。心に一切の名利を念ずることなく、亦綺詞戲笑せず。到る處、爭ふて飮食衣服を供養せられて四事豐饒なるも、皆自ら之を捨てゝ他に廻施し、唯だ粗惡を食して纔に身を支ふるのみ。乳酪醍醐皆飮噉せず、覰施あれば悉く寫經の料に供し、燈明常に絕ゆることなく、三衣瓶鉢、人をして持洗せしめず。每に自ら獨行して衆と共に去らず、人と行く〳〵世事を談論して行業を妨げられんことを恐るればなりと。以て其の行持の峻嚴なりしを見るべし。

又有る人、曾て善導に問ふに、佛名を念ずれば定んで往生を得るや否やを以てせしに、導は定生定生と連呼せし由、前述の如く續高僧傳に見えたり。戒珠傳等には、汝の所念の如く汝の所願を遂げんと答へられたりと云へり。念佛鏡に依れば、善導闍梨、西京の寺內に在りて金剛法師と念佛の勝劣を校量し、高座に昇りて遂に發願して言へらく、諸經中の世尊の說に準ずるに、念佛の一法にて淨土に生ずるを得、一日七日一念十念すれば定んで淨土に生ずとあり。若し是れ眞實にして衆生を誑かさずんば、卽ち此の堂中の二像をして總て光を放たしめん。若し此の念佛の法虛にして、淨土に生せず、衆生を誑惑するものならんか、卽ち善導をして此の高座の上より直に大地獄に墮し、長時に苦を受け永く出期なからしめよと。斯く誓を立てゝ乃ち如意杖を以て一堂中の像を指せしに、像皆光を放ちしことを記せり。善導の信念の確固たりしことは、之に依りて想像するに尙ほ餘あるべし。又瑞應傳、竝に宋高僧傳第六に依るに、懷感は、初め少時念佛して逕に安養に生ずることを信せず。善導に謁して其の疑難を披陳するに、導曰く、子、敎を傳へて人を度するに、信じて後講ずるか、はた茫として詣る所なきか、感曰く、諸佛の誠言、信せずんば講せず。導曰く、若し然らば念佛も亦佛說なり。子之を信せざるは、抑も念佛往生を虛說となすに由るか。試に至心に念佛せよ。當に證驗あるべしと。感因てその敎を奉じて三年念佛し、遂に念佛三昧を證して釋淨土群疑論七卷を撰述せしことを記せり。

續高僧傳、瑞應傳、念佛鏡等には、凡て示寂の事を記せざれども、戒珠傳等には、善導は捨身往生せられたりとし、其の狀景を記して云く、導は乃ち自ら阿彌陀佛を念じ、一聲すれば則ち一道の光明ありて其の口より出づ。或は十聲百聲するに、光亦每に口より出づ。後、導此の身の諸苦逼迫して、情僞變易暫くも休息なきを厭ひ、乃ち所居の寺前の柳樹に登り、西に向て願じて曰く、願くは佛の威神をもて驟に我を接し給へ。觀音勢至亦來りて我を助け給へ。我が此の心をして正念を失はず、驚怖を起さず、彌陀法の中に於て退墮を生ぜざらしめ給へと。願じ畢りて其の樹上より身を投じて自ら絕す。時に京師の士大夫、誠を傾けて歸信し、咸く其の骨を收めて以て葬る。高宗皇帝、其の念佛して口より光明を出すを知り、又捨報の時精至此の如くなりしを知りて、勅を下し其の寺に額して光明と爲すと。新修傳、龍舒淨土文、樂邦文類、佛祖統紀等、亦皆此の文を轉錄せり。されど是れ恐らくは續高僧傳に、有人の捨身往生を記せ

るを、錯りて善導となせるものならん。或は善導も亦晩年厭欣の情發して抑へ難く、遂に身を捨てゝ西歸の期を早められたるものか。其の示寂の年月に關しては、續傳、瑞應等、竝に皆之を記せず。新修往生傳に依るに、永隆二年三月十四日、春秋六十九を似て長逝すと云ひ、帝王年代錄には、同年同月二十七日となし、釋氏稽古略第三には、龍朔二年入滅と云へり。各說の是非今之を詳にするに由なし。

然るに新修往生傳に依るに、二人の善導あり。一は續傳、瑞應傳、及戒珠傳等を敷衍せしものにして、鄉貫氏族を不詳とし、光明寺に在りて、捨身命終せりとなすも、他は臨淄(山東省青州府臨淄縣治)の人なりとし、幼にして密州(山東省青州府諸城縣治)の明勝法師に投じて出家し、法華、維摩を誦せしが、後大藏の中に就き、手に信せて之を探りて無量壽觀經を得、因て喜んで十六觀を誦習し、次で慧遠の勝躅を欣ふて廬山(江西省九江府德化縣治)に往き、其の遺範を觀て豁然として思を增し、自後、名德を歷訪して、遂に跡を終南山悟眞寺に遁がれ、未だ數歲を逾えざるに、三昧を發得し、乃ち方に隨て利物を事とす。時適、道綽禪師の晉陽(山西省太原縣)に開闡するを聞き、往いて綽の所に至りて無量壽經を受け、次で請に因りて入定して綽の往生の得否を觀じ、後所住の寺中に於て、急に淨土の變相を畫成し、數日を經て忽然として微疾を感じ、室を掩ふて怡然として長逝すと云ひ、年を六十九とし、時を永隆二年三月十四日となせり。佛祖統紀も亦王古を信じて二人の善導を出せり。案ずるに、同名異人は何れの世にも之れなきに非ず。既に明かに臨淄の人と云ひ、又明勝(吉藏の門人なりと)に就て出家すと云ひ、跡を悟眞寺に遁かると云ひ、乃至死沒の年月を記する如き、或は續傳、瑞應等の善導と同名異人なるやも知るべからず。されど殆ど同時の出にして且つ同く道綽を師とし、同く念佛を弘通し、同く變相を畫くと云ふに至て、吾人は聊か惑なき能はず。傳通記第一には、此の二人の善導に三異十一同あることを記し、三異(唯だ三異のみに非ず)ありと雖も十一同あるを以て、結局同一なりと結論せり。然れども一は光明寺に在りと云ひ、他は悟眞寺に遁るとあり。悟眞寺は隋開皇中、淨業の經始する所にして終南山の一丘に在り。固より光明寺と別處たり。或は光明寺に居り、或は悟眞寺に往かれたるやも知るべからざれど、續傳以下諸傳に、曾て悟眞寺の事を傳へざるは訝かるべきに非ずや、別傳纂註に、善導の字を淨業とせるは、悟眞寺淨業の事蹟を混淆したるものにして、固より信ずるに足らず。臨終要訣に、淨業和

尙とあるを證とすと雖も、此の書果して善導の作なるや否や疑ふべきものあり。吾人は、王古が何を所憑として、二人の善導を傳したるやを詳にせず。されど若し今試に同名異人なりとせば、淨業寺善導傳中、道綽を師とし變相を畫き、及び念佛を弘通せし事實は、全く光明寺善導の行蹟を混入せしものならんと想像する者なり。若し傳通記に云ふ如く同一人とせば、生國、出家、住寺、及び死沒の年月等は、卽ち過つて他の或る師の傳を雜糅して、之を傳へたるならんと思考する者なり。

善導の門人少からざるべきも、僧傳に見ゆる所は、唯だ懷感一人のみ。若し平昌孟銑の撰せる群疑論序によらば、懷惲なる者あり、懷感と同く導公の神足なりと云へり。されど懷惲は紀傳の徵すべきなし。

四明曇省、嘗て善導大師像讃を作る。其の詞に云く、

唐善導和尙眞像　四明傳法比丘曇省讃

善導念佛　佛從口出　信者皆見　知非幻術　是心是佛　人人具足

欲知善導　妙在純熟　心池水靜　佛月垂光　業風起波　生佛殊迥

紹興辛巳二月一日

元祖法然上人、亦善導垂迹の身に就て十德を數ふ。一に至誠念佛德、二に三昧發得德、三に光從口出德、四に爲師決疑德、五に造疏感夢德、六に化導盛廣德、七に遺身入滅德、八に帝王歸敬德、九に遺文放光德、十に形像神變德なり。若し本地內證に就かば、卽ち阿彌陀佛の化身なりと云へり。其の如何に和漢諸師の間に崇重せられたるかを見るべし。

二九　善導大師の著書

善導大師の著書としては、五部九卷と云ふて、觀經疏四卷、法事讚二卷、觀念法門一卷、往生禮讚一卷、般舟讚一卷を擧げるのが普通である。此五部九卷は、古來善導大師の作と傳へて、決疑鈔第五には、記主禪師が是等の書を鎭西上人より相傳されたと云ふことが書いてあり、其後淨土宗は勿論、日本の淨土敎に取つては非常に重要なる聖典として尊重せられてゐるのである。元祖上人御在世の頃には、般舟讚は(支那から持つて來たのは早いが)未だ流布しなかつたからして、選擇集には、引いてないけ

往生禮讃

れども、其他の觀經疏は勿論、往生禮讃、觀念法門、法事讃は所々に引用されてある。

往生禮讃　五部九卷の中、往生禮讃一卷は、唐の智昇が撰した集諸經禮懺儀と云ふ書物の下卷に、比丘善導集記として、其の全文を悉く掲載し、而して智昇が唐開元十八年に、自分で撰述した開元釋教錄の第十三卷に其の禮懺儀を入藏したと云ふことを書いておる。現に縮冊藏經の調帙の第十にそれが收められてある。それのみならず、懷感禪師の群疑論第四に、往生禮讃に書いてある專雜二修の文を引いてあり、又少康法師が、洛陽白馬寺に於て善導の西方化導文を見たと云ふことが宋高僧傳第廿五、新修往生傳卷中等に書いてあつて、其化導文と云ふのが、往生禮讃だと昔から云ひ傳へてある。それから又遵式の作つた西方略傳序にも、善導和尙六時禮文一卷を作ると云つて居り、桐江擇暎の修證義、石芝宗曉の樂邦文類第四にも、專雜二修の文が引いてあり、惠心僧都の往生要集第二にも、善導和尙六時禮法ありと書いてあるから、此の書は善導大師の作られたものであると云ふことは疑がない。序でながら一寸云つておくが、往生禮讃は所謂集記されたものであつて、實際善導大師の作られたのは、前序と後序と日沒禮讃と初夜禮讃と日中禮讃とだけであつて、其他

觀經疏

の中夜禮讃は龍樹、後夜禮讃は天親、晨朝禮讃は彥琮の作られた偽を集められたもので、是は晝夜六時に禮拜懺悔する儀式卽ち勤行法を書いた書物である。此の往生禮讃は、蓮門經籍錄などに傳教大師が延曆二十四年に請來したものだと書いてあるが、乍去、傳教請來錄の中には其書名が見えてゐない。

觀經疏　觀經疏は四卷あるから、通常四帖疏と名けられてある。而して其四卷と云ふのは、第一卷が玄義分で、所謂總論。第二卷が序文義で、觀經の序文を釋したもので、第三卷は定善義で、所謂十三觀を釋したもので、第四卷は散善義と云ふて、所謂九品を釋されたものである。元祖上人が淨土宗を御開きになつたのも、其中の散善義の一心專念の文に依られたことであるから、日本の念佛宗に取つては、此上もなき重要の聖典であるけれども、群疑論を初め、唐以前の書物にはどうも、其の名が見えてゐない。宋の遵式の西方略傳序に、善導和尙觀經疏一卷を作ると書いてあるのが、支那に於て觀經疏の名の見えてゐる始めで、それから後は靈芝元照の觀經義疏に、玄義分の文が、一二箇處引用してあり、元照の弟子の作つた觀經扶新論にも、善導亦玄義ありと書いておる。されば宋代に及んで、支那では唯だ玄義分一卷だけが流行し

ておつたらしい。日本でも、惠心僧都の往生要集の中に、玄義分だけが引用されてあつて、其の序分義等が見えない樣である。東域傳燈錄には觀經玄義分一卷善導、同義疏四卷善導と書いてある。されば玄義分一卷は、日本でも昔は別行して居つたものであらう。義疏四卷と云ふのは、多分玄序定散を總稱したものであらうから、四卷の疏と一卷の玄義とが同時に竝んで行はれて居つたものと見へる。永觀律師の往生十因には、散善義の文が引いてあるから、其の時代には、四帖疏があつたことが解る。決疑鈔序、傳通記第一、決疑鈔裏書、勅修御傳第六、糅抄第一、直牒第一等に依つて見ると、此觀經疏四卷は、智證大師が天安二年に、支那から日本へ請來したものであつて、其ことは、智證大師將來の八帙抄と云ふものに書いてあると云ふてある。然るに其の八帙抄とは如何なる書物であるか詳かでない。糅抄第一に、一切經の目錄を八帙抄と名づくと云ふてゐるが、さすれば智證請來錄のことを云ふのであらうか。去り乍ら、現存の智證請來錄を見るに、智證大師が支那から傳へた處の經律論傳記等總計四百四十一本一千卷の書名を連ねてゐるけれども、其の中に所謂善導の觀經疏なる名目を出してゐない。一體請來錄と云ふものは、其人が請來して來たところの經卷道具等を悉く擧げたものであるから、此請來錄に記載されてあるものゝ外に、智證が支那から持つて來た書物はない筈である。されば此觀經疏は、智證の將來したものとは云へんやうである。然し乍ら八帙抄と云ふ書物が果して智證請來錄の略名であるか、それは不明でもあり、又記主禪師等が、明かに智證の請來と云はるゝには、確たる證據があるかも知れんから、斷言は出來ぬ。若しも八帙抄と云ふ書物があつて、其れに「觀經疏四卷善導」と書いてあるとすれば、是れが觀經疏の名の見える最初の記錄であると云はねばならぬ。處がこゝに不思議な事が一つある、それは他でもない、天平寶字七年に作られたと傳へらるゝ彼の有名な當麻曼陀羅の中に畫かれてある日想觀のところに、黑黃白の三色の雲が現はしてある。是れが定善義の日想觀の釋に、黑黃白の三障を除くとあるに符合してゐることである。勅修御傳の第六には、天安二年に智證が請來した善導の觀經疏が、それから九十六年以前卽ち天平寶字七年に作られた當麻曼陀羅に符合すると云ふことは、極めて不思議なことゞ嘆じてゐる。是れは勿論不思議なことに相違はないが、乍去、若し果して當麻曼陀羅が、天平寶字七年に、日本で出來たものとすれば、事に依ると、其の時代に已に此

の觀經疏が、日本に渡つておつたかもしれず。又若し當麻曼陀羅が、支那の模本であるとしたら、其の原本になつたものは、卽ち善導所畫の西方の變相であらねばならぬと思はれるのである。

又此の觀經疏には、往生の行を正雜二行と區別し其正行の中で五種正行を分類して居らるゝけれども、往生禮讚の說き方は專雜二修で、五念門を勸めてある處などは、兩書の考が一致してゐない。同一善導の作と見て、此邊は如何なものであらうか。

法事讚及び般舟讚　法事讚は二卷あつて、是も一種の勤行法を書いたものであり、般舟讚は一卷で、重もに觀經の讚を書いたものである。法事讚は、蓮門經籍錄には、慈覺大師が承和十四年に請來したものだと書いてゐるけれども、慈覺の請來錄には其の名が見えぬ。此の書物は、入唐八家の一なる靈岸圓行和尙が、般舟讚觀念法門と同じく、承和六年に支那から持ち歸つたもので、其請來錄に「轉經行道願往生淨土法事讚一部二卷善道師集記、依觀經等明般舟三昧行道往生讚一卷善道法師撰、觀念阿彌陀佛相海三昧功德法門一卷善道師集」と書いてある。處が此の善道と云ふ名に就いて、少し研究すべき點があらうと思ふ、何故なれば、王古の新修往生傳及び佛祖統紀に依てみると、善導に二人あつて、一人は其名が善道で、他は善導である。傳通記の第一には、此二人の善導に就て種々の研究を加へ、三異あれども、十一同があるから結局同一人だと判定してゐる。此說は思ふに正當であらふ。去り乍ら新修往生傳の二人の善導の外に、尙ほ一人の善導がある。それは念佛鏡と云ふ書物を作つた人である。傳通記には、念佛鏡の作者と、五部九卷の作者とは別人であると論じてゐるが、それは云ふまでもなく、別人であつて、其念佛鏡と云ふ書物の中に、善導大師のことを善導闍梨とも善導律師とも、書いてあるところに依て、別人なることが明かである。長西錄下卷には、此念佛鏡を以て僞妄錄に編入し、卽ち僞書だと云ふてゐるけれども、此書は決して僞書ではない。卽ち少康法師の少し以後位ゐに、支那に出られた念佛修行の高僧で、多分大歷頃世におつた大行と云ふ人の門人であらうと思はる人である。さすれば善道と云ふ人は、唐の時代に二人あつて、前の善導が所謂導と云ふ字の善導で、後のが道と云ふ字の善道である。今圓行目錄に、法事讚等の三部を善道の作と云ふておれば、單に名から云へば、或は前の善導の作でなかつたかも知れぬと思はれる。それから又恁ふ云ふことも一つ考へられる、法照禪師の五會法事

讃の序文に「今大無量壽經に依つて五會念佛す。若し廣く、法事を作さば、具に五會法事儀三卷に在り。彌陀、觀經を啓讃し、廣く由序を說く。問答釋疑、竝に彼の文に在り」と書いてある。さすれば法照禪師は、五會法事讃の外に、別に廣法事儀三卷を作つて、彌陀經及び觀經を啓讃せられたことが解かる。然るに此廣法事儀と云ふ書物は、世に行はれてゐないが、私は事に依ると此廣法事儀三卷と云ふものは、今の法事讃及般舟讃ではないかと思ふ。法事讃が二卷で、般舟讃が一卷であることは、其題下に明記してあれば、廣法事儀三卷と云ふ言葉に符合する。又法事讃は、阿彌陀經に依て法事を修行することが書いてあり、般舟讃は其標題にも見ゆる如く、觀經に依て作られたものであるから、彌陀、觀經を啓讃すと云ふ言葉に符合する。そればかりでなく、五會法事讃と今の法事讃及般舟讃との文句を比較して見ると、全く同一なる處もあり、又似た文句も少くない。是に依て、法事讃及般舟讃の二部三卷は、或は法照の作ではないかとも疑はれる點がある。宋の高僧傳に依て見ると、支那では相傳へて法照禪師のことを、善導の後身であると稱したことが書いてあり、又遵式の西方略傳、清月の往生略傳には、善導、五會の敎を立つと書いてある。然るに五會念佛を始めたのは、法照禪師であつて、善導大師ではない。是に依て見ると宋の初めには既に善導大師と法照禪師との二人の事跡が、混同せられておつたと云ふことが解る。さすれば法照禪師の著述を、善導大師の著述と誤り傳へたと云ふことがないとも限らぬと云ふのである。併し是れは私のホンの愚推である。

觀念法門。　觀念法門は亦一卷で、是は前述せる如く、靈岸圓行和尙が請來したものであつて、善導の導の字が道と云ふ字になつておるのである。此書は、往生要集にも引かれてあるから古くから、日本に行はれたことが解かる。乍去、どうも中に書いてあることが、他の法事讃、般舟讃と同じく、往生禮讃の專雜二修流の書き方ではなく、餘程觀察等の餘行を勸めてゐるやうな點があつて、孰れかと云へば、法照の五會法事讃に類してゐるところがある。

其他の著作　五部九卷の外に、善導の著述と傳ふるものがまだある。遵式の西方略傳序に、善導大師は、觀經疏一卷、六時禮文一卷の外に、二十四讃一卷と云ふものを作られたと書いてある。此二十四讃は、如何なる書物であるか詳にすることが出來ぬ。念佛鏡の念佛得益文の下に「善導闍梨の集に准ずるに、念佛の法に總じて二十三種

の利益あり、第一に滅重罪障の益、乃至、第二十三に還歸本國得陀羅尼の益なり。是はこれ西京善導閣梨の念佛集の中の利益なり」と書いてある。此念佛集なるものは、事によると二十四讃と云ふものかも知れぬ。二十四讃と二十三種の利益とは、數に於て一つ違うけれど、それは孰れかで其一を增減したものとも見ることが出來るからである。但し蓮門經籍錄には、此の二十四讃を少康の作として居る。是は宋高僧傳第二十五の少康法師の傳に「唱讃二十四契、淨邦を稱揚す」とある所から考へた說で、或は其れが眞かも知れぬ。若し然うとすれば、是も亦善導と少康とが混同された一例と云ふことが出來る。又智證請來錄に依て見ると、大乘布薩法一卷と云ふものがあつて、それは善導の作だと書いてある。けれども、今は傳はつてゐない。樂邦文類、龍舒淨土文、並に長西錄等に依て見ると、善導が知歸子と云ふ者に答へられた臨終正念訣と云ふ一篇の文章が載つてゐる。併し知歸子の事蹟は解らぬ。或は是れが元の日觀と云ふ人の號であるから、日觀を指したものであらうと云ふ說があるけれども、この正念訣は、宋代の樂邦文類などに引いてあるから、元の日觀とは勿論同人ではない、又長西錄僞妄錄の中に、善導大師遺言一卷と云ふのがある。是は長西の云ふ如く僞妄であらう。樂邦文類、龍舒淨土文、佛祖統紀等に、善導勸化の偈と云ふものが錄されてある。卽ち

漸々雞皮鶴髮　看看行步蹉踵　假饒金玉滿堂　難免衰殘老病
任他千般快樂　無常終是到來　唯有徑路修行　但念阿彌陀佛

是れは六言八句の一偈であるけれども、支那では餘程有名なものであつたらしい。但し蓮池大師遺稿には、之を傳大士の作としてゐる。それから又古來相傳へて善導に彌陀義若干卷の著作があつて、無量壽經を釋したものだと言はれてある。是れは定善義の中に「此八德の義は已に彌陀義の中に在て廣く說き竟ぬ」と書いてある所から起つた說であるが、此彌陀義なるものは、傳通定記第二、定善義略鈔第一等に言ふて居る如く、日本には傳はらぬ。又其の書が果して支那にもあつたか否か、支那の書物には其の名前も見えて居らぬ。然るに鎭西上人の弟子の白蓮社と云ふ人が、入宋して廬山に往つて容禪師と云ふ人に面した時、廬山の東林寺に、彌陀義が百卷ばかりもあつたのを見たけれども、それを日本に持歸ることを許されなかつたと云ふことが、鎭流祖傳第三に書いてある。乍去、是は信ずるに足るまい。又今日現に坊間

に彌陀經義集と云ふ一卷の書があつて、沙門善導集記と署名してあるけれども、是は云ふまでなく日本人の僞作である。

三〇　慈愍三藏の事蹟及び其の文集

選擇集に依るに、支那淨土教に三傳あり。所謂廬山慧遠法師と慈愍三藏と道綽善導等と是なり。中に就いて、慧遠は道安に稟け、安は佛圖澄に承く。澄は西域の人にして、西曆紀元三一〇に支那洛陽に來れり。此れ卽第一傳なり。又善導は道綽に、綽は曇鸞に、鸞は菩提流支に淨土の法を受く。支は北天竺の人にして、西紀五〇八に渡來せる者なり。之を第二傳となす。第三傳は卽慈愍三藏にして、渡天十有八年、自ら天竺の三藏に就いて親しくその所傳を稟く。かく淨土教の渡來には三傳あり。其の中、慧遠の傳は、支那に於て久しく流通せられ、道綽善導の傳は、日本に於て盛に敷衍せられたるも、獨り慈愍三藏の傳は、教義教系共に明ならず。是を以て古より斯の傳に關して別に唱說せる者なく、多少の史料も、今や漸く湮滅するに殆からんとす。是れ予が此の稿を草して、聊か斯學研究の資に供する所以なり。

慈愍三藏、諱は慧日、姓は辛氏、東萊(山東省萊州府)の人なり。幼にして義淨三藏の印度より歸錫(六七一入竺六九五歸朝)するに遇ひ、心竊に羨慕して自ら入竺を期す。嗣聖十九年(七〇二)遂に志を決して、誓つて西域に遊ばんと欲し、船に乘じて崑崙佛誓師子州等を經、三載を過ぎて始めて印度の境に達す。乃ち聖迹を巡拜し、梵本を尋求し、善知識を訪ふこと十有三年、具に法訓を咨稟し、大に得る所あり。是に於て錫を振ふて、陸路鄉に還らんと欲し、雪嶺胡鄉の間を涉ること凡そ四載、旣に多苦を經、悉く辛酸を嘗めて、深く閻浮を厭ふ。自ら思惟すらく、何の國、何の方か樂あつて苦なからん。何の法、何の行か能く速に佛を見ることを得んと。因つて徧く天竺の三藏に問ふに、學者說く所、皆淨土を讚せざるはなく、悉く言ふ、此の報身を盡くして、必ず極樂世界に往生することを得ば、親たり阿彌陀佛に奉事して、快樂安穩なることを得んと。師その教を頂受し、漸く行いて北印度健馱羅國に至る。王城の東北に一大山あり、山に觀音の像あり、志誠に祈請すれば必ず驗あり。師乃ち七日參籠し、又次いで斷食して畢命を期となし、一心に祈願してその徵驗を待つ。七日に至て夜未だ央ならず、觀音

空中に紫金色の相を現じ、長一丈餘、寶蓮華に坐し、右手を垂れ師の頂を摩して曰く、汝、法を傳へて自利利他せんと欲せば、當に淨土の法門、諸行に勝過することを知るべし。西方淨土極樂世界は彌陀の佛國なり、勸めて佛を念じ經を誦し、往生を廻願せしめば、彼の國に到り已りて、佛及び我を見て、必ず大利益を得んと、說き已つて忽ち滅す。師旣に斷食して身體疲困す、今聖告を聞くに及むで、頓に强健を覺ゆ。乃ち路を嶺東に取り、開元七年(七一九)を以て方に長安に達す。在天十有八年、七十餘國を經歷し齎す所多し。是に於て乃ち佛の眞容梵莢等を獻し、帝心を開悟せしむ。玄宗、勅して號を賜ふて慈愍三藏と稱す。生平、淨土の業を勤修し。敢て懈る所あらず。天寶七年(七四八)洛陽罔極寺に卒す。報齡六十九、白鹿原に葬り、小塔を建つ。贊寧之を贊して、其の道善導、少康と異時同化なりといへり。以て感化の大なるものありしことを見るべし。

著作としては、宋高僧傳第二十九に、往生淨土集を著すといひ、西方略傳序及び淨土指歸卷下には、慈愍三藏淨土慈悲集三卷とあり。然るに此の書今傳はらざるが故に、其の內容を知るに由なし。芝園集卷下に依るに、靈芝の元照は、宋紹聖三年(一〇九六)の頃、時世を慨して慈愍三藏文集を翻刻せしことを記せり。此の文集と彼の往生淨土集と同なりや否や、二書共に現存せざるを以て、亦之を推測すること能はず。當時禪僧中、此の文集に記する所の主張が、自己の宗義に背反する所多きを以て、之を元照が名を慧日に假りて僞作せしものと爲し、官府に訴へたるが如き、如何に其の論旨の有力なりしかを見るに足るべし。芝園集の文は左の如し、

論慈愍三藏集書

某月日、釋元照、謹齋沐裁、書獻于權府朝奉明公、貧道嘗聞、律佛所制也、教佛所說也、禪佛所示也、是三者皆出於佛、曰三學、曰六度、故爲佛者不可滯於一端、威儀軌度、持犯開遮、皆見於律、非學無以自明、權實偏圓、觀行因果、皆見於教、非學無以自辨、識心達本忘筌離相、皆見於禪、非學無以自悟、經曰、歸源性無二、方便有多門、是則律與禪同出而異名、殊途而一貫、所謂同出者、出於一心也、一貫者、會於一性也、心性也者、一切衆生見前覺知之體也、其量虛寂、其用互廣、潛于萬化之際、見于動用之中、四相流而不遷、三惑覆而常照、柰何溟生覺海、雲點大淸岸、逐舟移花因、眚發燼然、妄動瞻然、昏塞紛然、馳散非一朝一夕矣、吾佛哀之、將使復其本也、於是制其妄動、故謂之律、闢其昏塞、故謂之教、攝

其馳散故謂之禪以是觀之律亦心也教亦心也禪亦心也三者皆我自心豈容是非彼此於其間哉不然則心外有法未契佛祖上乘之旨也是以自古知識節行超邁未始不稟於律博涉經論未始不知於教希夷淡泊未始不通於禪歷觀三代高僧傳至有木食草衣孤節苦行卓然風霜不改其操鏗然憂喜未達其心故得振清望於當時垂令模於史籍近世慧林孝本法雲大秀皆釋門之豪傑擧揚宗風激勵修奉天下緇儒雲奔草偃率從其化自是其徒稍知頓悟漸修之門藉教悟宗之理但古今學者自有黨宗蔽曲之流謂了心見性何假修行認放蕩爲通方嗤持守爲執相殘毀正教暨罔來蒙故慈愍三藏文集於是乎作也斯實救一時之訛弊護佛法之紀綱耳而況一破一立或抑或揚乃釋門述作之通規義學討論之常事也西天諸論大小相攻或空有爭馳或性相勍敵二部五部十八五百異執支離于今不絕此方傳教華嚴賢首天台慈恩互相斥奪章疏競行亦猶儒家魯史春秋學開五傳國風雅頌分爲四詩孟氏辭闢於楊墨子雲無取於老莊鄭玄王肅師資形矛盾之談劉向劉歆父子有異同之論至如宗門自達磨西來衣鉢相傳迨于五祖而下則南北分宗其後各建門庭而五家派別雲門臨濟當世盛行然各據師承互相嗤笑又如古今語錄謂佛身爲屎橛指大藏爲故紙薄講學爲入海算沙貶聽習爲分別名相徧在禪策不復具擧即應講學之師執爲誘己而興於諍訟耶蓋不知古賢爲物清深方便苦口使求魚觀月不滯於筌指耳貧道少小辭親冠年從道尋師務學負笈橫經于茲三十一臘矣不料寡薄謬爲師首在處養徒晨夕講訓上酬佛祖開悟之恩次報王臣存護之德頃以前任太守王公脩撰特造公符邀命至此俾於南寺重建戒壇方欲糺募豪族發首興工無何諸師見忌異論鋒起以謂慈愍集乃貧道自撰假彼名字排我宗門曾不知此文得於古藏編于舊錄不省寡聞輒懷私忿以至訟于公府于長吏直欲投諸深穽加以大石恐憊督迫幾不能免竊惟古人有言出乎爾者反乎爾者我既無心於物物豈能加於我故唯緘默坐視未始一辭辨之然恐官司未委情實謹賫元得古本文集并敍始末三紙于左右是否枉直惟明公裁之不宣芝園集下（四十右）

是に依るに、所謂慈愍集なるものは、禪教律の偏廢すべからざることを主唱せしものなるを見るべし。蓋し禪徒の習癖として、僅に心を了し性を見ば、更に修行を假るの用なしと爲し、却つて放蕩を認めて通方となし、持守を嗤つて執相となせる者比比皆然らざるはなし。是れ彼の輩が千古の謬見なり。されど禪僧の中、往々にして其の然らざるべきを唱破し、萬善誦經を勸勵せる者亦之れなきにあらず。永明延壽の

如き、卽其の尤なるものにして、以下之に唱和する者少からず。元照亦夙に此の主義を奉持し、自ら戒行を守る甚だ嚴なり。今慈愍文集を公刊する、其の意實に亦當時禪門の流弊を矯め、以て佛法の紀綱を張らんとするに在り、旣に然らば、慈愍文集は、盛に念佛誦經の事行を說き、以て枵腹高心の徒を規したるものなるを察し得べし。

又永明延壽の萬善同歸集に、兩所に慈愍三藏の語を引けり。是に依りて見るに、慧日の敎義は、明かに敎禪一揆を主唱する者にして、乃ち宋以後に於ける禪淨合一の思潮は、早く旣に玆に胚胎せしことを知るに足れり。其の文左の如し。

慈愍三藏云、聖敎所說正禪定者、制心一處、念々相續離於昏掉、平等持心、若睡眠覆障卽須策勤念佛誦經禮拜行道、講經說法敎化衆生、萬行無廢所修行業回向往生西方淨土、若能如是修習禪定者、是佛禪定與聖敎合、是衆生眼目、諸佛印可、一切佛法等無差別、皆乘一如成最正覺。(騰四三十)

慈愍三藏錄云、若言世尊說諸有爲定如空華無有一物名虛妄者、虛妄無形非解脫因、如何世尊勅諸弟子勤修六度萬行妙因當證菩提涅槃之果、豈有智者讚乾闥婆城堅實高妙、復勸諸人以兎角爲梯而可登陟乎、由此理故雖是凡夫發菩提心行菩薩行、雖然有漏修習是實是正、有體虛妄非如龜毛空無一物說爲虛妄、皆是依他緣生幻有不同無而忘計又云、若三世佛行執爲妄想、憑何修學而得解脫、不依佛行別有所宗、皆外道行。(騰四四左四十)

其の意を見るに、聖敎所說の正禪定なる者は、禪淨合行し、事理雙修するを其の眼目となす。若し萬行は虛妄にして空華の如く、而かも修學するに足らずと言はゞ、此れ明かに外道を宗とする者なり。世尊は諸の弟子に勅して、六度萬行の妙因を勤修せば、當に菩提涅槃の果を證すべしと宣べ給へり。若し三世の佛行を執して謂つて妄想となさば、吾等は何によりて而かも解脫を得んや。是の故に凡夫と雖も、菩提心を發し、菩提行を行せば、設令有漏の修習も、是れ實、是れ正ならざるはなし。凡そ有爲の行は、依他緣生の法にして、偏計空無の法にあらず。有爲は虛妄なりといふも、龜毛の如く、空にして一物なきに同からず。是に由りて禪定を習ふ者は、須らく事理雙修し禪淨合行せざるべからず。是の如く修習するを佛禪定と名くといふに在り。是に由りて、慈愍三藏の敎義は、慥に永明延壽の先驅をなせるごとを知るべし。若し然らば永明の志を紹ぐ者は、卽慈愍三藏の敎系を稟くる者といふを得べし。其の感化寧ろ

大ならずや。又法照の五會法事讃に、慈愍和尚の名を署せる般舟三昧讃一篇あり。其の文左の如し、

般舟三昧讃　依般舟三昧經　慈愍和尚

般舟三昧樂願往生　專心念佛見彌陀無量樂　普勸廻心生淨土願往生　廻向念佛卽同生無量樂（已下二句毎に般舟三昧樂、專心念佛見彌陀の唱和あり、又各句に更互に願往生、無量樂の賡酬あり）

�劫已來流浪久、隨緣六道受輪廻、不遇往生善知識、誰能相勸得廻歸、憶受天堂暫時樂、福盡臨終現五衰、憶受人中胎藏苦、四蛇六賊競相催、憶受修羅餓鬼道、飢虛諍苦苦難載、憶受畜生相食噉、刀光捨命復牽犁、憶受地獄長時苦、業風吹去不知廻、或入鑊湯爐炭火、騰波猛燄劇天雷、或上刀山攀劒樹、皮膚骨肉變成灰、借問何緣受此苦、貪魚愛肉業相隨、鎔銅灌口犁拂口、飲酒妄語受其災、或臥鐵床抱銅柱、惣爲邪婬顚倒來、或墮阿鼻大地獄、經劫長年眼不開、上火下火交通過、刀輪鐵杵自飛來、銅狗嚙心幷噉血、鐵鳥喙眼復穿、鰓、今日道場諸衆等、恆沙曠劫惣經來、慶此人身難値遇、喩若優曇花始開、正値希聞淨土敎、正値念佛法門開、正値彌陀弘誓喚、正値大衆心廻、正値今日依經讃、正値結緣上花臺、正値道場無魔事、正値無病惱能來、正値七日功成就、四十八願要相携、普勸道場同行者、努力廻心歸去來、借問家鄉何處在、極樂池中七寶臺、彼佛因中立弘誓、聞名念我惣迎來、不簡貧窮將富貴、不簡下智與高才、不簡元非淨土業、不簡外道闡提人、不簡長時修苦行、不簡今日始生心、不簡多聞持淨戒、不簡破戒罪根深、但使廻心多念佛、能令瓦礫變成金、寄語現前諸大衆、同緣去者早相尋、借問相尋何處去、報道彌陀淨土中、借問何緣得生彼、報道念佛自成功、借問今生多罪障、如何淨土肯相容、報道稱名罪消滅、喩若明燈入闇中、借問凡夫得生否、如何一念闇中明、報道除疑多念佛、彌陀決定自親近。（此の讃皆韻を用ひたり、但し一二の韻相通ぜざるものあるは、恐くは傳寫の誤ならん）

此の讃文を見るに、嬙劫已來、流浪已に久しく、具さに六道生死の苦を受けたることを追悔し、今適にこの人身を受けて、淨土の敎門を聞くことを得たるを慶喜し、努力廻心して極樂の家鄉に歸るべきことを敎へたるの所、苦切慇懃、千萬言と雖も未だ此の短篇の祕要に如かざるを覺ふ。加之、彼の佛、因地に在る時、名を聞て我を念ずる者は、總べて迎來せんと誓ふ。是の故に貧窮と富貴と下智と高才とを問はず、長時の苦行と今日の發心とを簡ばず、多聞と無聞と持戒と破戒とを問はず、但だ廻心して多く念佛すれば、能く瓦礫を變じて金となさしむと說き、自ら淨土宗敎の眞髓を發

揮せり。又罪障多き者も名を稱すれば滅すること喩へば明燈の闇中に入るが如く、復凡夫も疑を除き多く念佛すれば、彌陀決定して親近し、卽彼の國に生ずることを得と明せるが如き、其の所唱の教義は、殆んど善導等の諸祖と徑庭する所なきが如し。宜なる哉、贊寧は、慧日を讃して、其の道、善導少康と異時同一化なりといへることや。

又宋高僧傳第二十九慧日の傳に、次の如き五辛に關する說あり、

行書出云、五辛此土唯有四、一蒜二韮三葱四薤、於興渠、梵語稍訛正云形具、餘國不見、廻至于闐方得見也、根粗如細蔓菁根而白。其臭如蒜、彼國人種取根食也、于時冬天到、彼不見枝葉、蔞蒿非五辛、所食無罪

是に依りて、慧日は亦戒學に精通し、所謂禪教律を兼ねて、以て其の化を敷揚せしを想見すべし。

三　支那の禪僧と念佛

禪と念佛との教理の交際は、定めておもしろからんと、平生に思ひ居れども、未だその研究を試むるの閑を得ず。唯嘗ておもへらく、禪と念佛は兩極端なり。禪は本來無東西を標榜すれど、念佛は西方を離れてその行を起し得べからず。又禪は無念ならんことを力むべきも、念佛は之に反して念想の轉た强盛ならんことを望む者なり。一方を空とすれば他方は有なり。禪を雅とすれば念佛は俗なり。されど兩極端なる者は往往にして融合することあり。積極電氣と消極電氣と中和するが如き、陰陽剛柔の必ず相待つが如き皆その例なりと。蓋し之を融合せざるべからずとなせる者は、支那宋朝已後に於ける禪僧の或る一派なるべし。

支那の禪僧は少からず、百丈懷海(西紀七二〇—八一四)の如き、病僧の爲に彌陀の名號を稱揚することををしへ、荼毘の際にも聲を引いて南無西方極樂世界大慈大悲阿彌陀佛と唱ふるを淸規となさしめき。現に今日もその淸規を守れる者少からず。因て古人は五家の宗派を合せ天下の禪僧を盡くして、悟と

未悟と一も未だ淨土に歸せざる者なしと言へり。百丈の功亦少からずといはざるべからず。永明延壽(九〇四―九七五)は法眼の冢孫にして達磨門下の驍勇なりといへども、彌陀十萬聲晝夜口に絶えず、萬善同歸集、神棲安養賦等を製して淨土を發明せり。古人尊びて支那蓮社列祖の一に加ふ、その四料揀の偈は最も有名なるものなり。但その間に於て酒僊遇賢(―一〇〇九)の如き例外もなきにあらず。彼れは唯飲酒を事とし醉へば則歌を作る、その歌にいはく、生在閻浮世界、人情幾多愛惡、祇要喫些酒子、所以倒街臥路、死後却產娑婆、不願超生淨土、何以故、西方淨土且無酒酤。天衣義懷九八九―一〇六〇)に勸修淨土說あり、その門に有名なる淨慈宗本(一〇五―一〇九(九)あり。生前已に淨土に蓮華ありて淨慈本禪師を待つといふ。歸元直指集の著あり、盛に淨土を鼓吹せり。善本はその門弟にして亦專ら淨業を修せり、時人呼むで大小本といふ。姑蘇守訥、慈受懷深みな其の餘慶をうくる者なり。訥に唯心淨土文あり、深に觀念佛頌あり。元祐の間、眞州長盧寺に宗賾あり、蓮華勝會を建てゝ廬山蓮社の規に遵ひ、普く僧俗を勸めて念佛しき。夢に普賢、普惠の二菩薩も來りてその會に加入せりといふ。支那蓮宗の一祖とす。次いで黃龍死心(―一一一五)の如き勸修淨土文を

撰し、眞歇清了(一一五一頃)の如き淨土說を述し幷に淨土を贊揚せり。馮楫は大慧宗杲に參して禪法の要を扣きしが、復た賢士太夫と繫念淨土會を建て蓮社の遺風を襲げり。西方禮文、彌陀懺儀等を著はす。以寧(一一三三頃)は正覺、清了等に參し豁然として得る所ありしも、老いて且病むに及むで遂に無量壽國の途を問へりといふ。降りて中峯明本(一二六二―一三二三)の如き、懷淨土詩百篇あり。門人天如惟則(一三四〇頃)淨土或問を作りて永明諸老の志を繼ぎ、力めて淨土の衰を扶け、淨土禪、禪淨土の說をなせり。西齋梵琦(一二九六―一三七〇)また禪に得る所あり、淨土詩三卷を撰して事理分張の惑を破す。智旭曾てその詩集に贊して云く稽首楚石大導師、卽是阿彌陀正覺、以茲微妙勝伽陀、令我讀誦當參學、一讀二讀塵念消、三讀四讀染情薄、讀至十百千萬遍、此身回向蓮華托、亦願後來讀誦者、同予畢竟生極樂、還攝無邊念佛人、永破事理分張惡、同居淨故四俱淨、圓融直捷超方略。その他智徹の淨土據要、恕中の淨土詩頌皆淨土の法を讚揚せる者なり。雲栖袾宏(一五三三―一六一五)は支那に於ける最後の禪淨融合論者にして、その影響も隨つて甚だ大なりき。今日支那南方諸州の信仰は實に悉く雲栖宗に屬する由。宏は年三十二にして出家し、遙に笑巖の許に往いて

開示を乞ふ、嚴いはく、汝三千里外に何の開示をか求むる。我れに何の開示あらむやと。因て辭して東昌に至り、途上樵樓の鼓聲を聞きて忽ち省する所あり、偈に曰く、三十年前事可疑、三千里外遇何奇、焚香擲載渾閒事、魔佛空爭是與非。後古杭の雲栖に住して盛に淨業を修す、著す所彌陀經疏鈔、往生集、禪關策進等數十種あり。この他支那禪僧の念佛を密修せし者尚少からざるなり、禪と念佛と相離るべからずとせば、此等の芳躅を追ふてその行を起すの要あるべし。されど必ずしも然るべからざる者あり、これ源空上人の淨土を別立せし所以なりとす。

三　雲栖袾宏禪師の淨土教義

雲栖袾宏禪師は、支那明末に於ける禪淨雙修家の巨魁なる者なり。唐末宋初より漸次にその萠芽を發したりし禪淨混融の思想は、袾宏に至りて既に爛熟せし者の如し。唯空理空論に耽りつゝある禪僧も、一念生死事大に想到せば、誰れか懼然として戰慄せざる者あらんや。これ禪淨雙修の因つて起るべき動機なり。禪僧にして念佛を兼修するは、其の宗に取りて慥かに異法なるべきも、遠慮ある者は區々の宗規に拘りて、內心に潛める自然の要求を拋擲去るべきにあらず。宋以後に於て、禪僧の淨土を密修せし者、その數甚だ多し。之を非難する者亦敢て少からざりしも、其れが爲めに此の思潮の汎濫を防遏する能はざりき。袾宏に至りては、禪淨混融の思想既に爛熟し、幾むど淨を以て禪を奪はんとするの概あり。周克復等、宏を推して支那蓮宗の第八祖となす。之によりて其の淨土に盡くすの功頗る大なるものありしを察するに足るなり。今數節を分ち、其の教義の一班を記述するに左の如し。

一　傳及著作

袾宏、字は佛慧、蓮池と號す。杭州浙江省杭州府錢唐縣治の人。年十七、諸生に補し、學行を以て稱せらる。鄰家に老嫗あり、日々佛名を課すること數千。宏その故を問ふ。嫗曰く、先夫佛名を持し、臨終に病なくして逝けり。故に念佛の功德不可思議なるを知ると。宏その言に感じ、此より心を淨土に棲ましめ、生死事大の四字を案頭に書して、以て自ら警策す。廿七歲にして父を喪ひ、三十二歲母亦喪す。是に於て嘉靖四十五年(一五六六)西山性天理和尙に就て出家し、尋いで知識に遍歷す。嘗て衆と辨融禪師に參

す。融曰く、名を貪り利を圖るを要せず、唯一心に道を辨じ老實に持戒念佛せよと。又笑巖禪師に柳庵に謁して、開示を求む。巖曰く、咄汝三千里外に遠く何を求めんと欲するや、我に何の開示かあらんと。宏卽悅然として辭して東昌に至る。道中樵樓鼓聲を聞きて忽ち大悟する所めり。偈に云く、三十年前事可疑、三千里外遇何奇、焚香擲載渾閒事、魔佛空爭是與非と。又北の方五台に遊び文殊の放光を感ず。後隆慶五年(一五七一)杭州雲栖に乞食し、山水の幽絕なるを見て玆に居り、終焉の志あり。山もと虎多し、宏の來るに及むで遂に患をなさずといふ。乃念佛三昧を精修し、普く遠近を敎化す。僧俗日に歸附し、遂に叢林を成す。宏復居常廣く衆善を修して、以て淨業を資く。時に戒壇久しく禁じて行はれず。宏卽求戒の者をして、三衣を具し、佛前に於て之を受けしめ、爲に證明をなす。又水陸儀文及び瑜伽燄口の法を定めて、以て幽冥の苦を拯ひ、又城の內外及び山中に放生池を開き、戒殺放生文を著はして、物の命を拯ふ。從つて化する者甚だ衆く、名公巨鄕陸光祖、張元汴、馮夢禎、陶望齡、虞淳熙、宋應昌の輩皆歸仰の心を致さゞるなし。萬曆中、慈聖、大衆中貴を遣はし、紫衣及黃金を賜ふ。萬曆四十三年(一六一五)七月四日、衆に囑して云く、老實に念佛して、我が規矩を壞ると莫れと。依つて正西念佛して逝く。年八十一、僧臘五十。名朝野に聞こえ、法華夷に布き、稱して過現未來善知識の樣子禪敎律部大和尙の標題となすといふ。著はす所多し、卽ち

阿彌陀經疏鈔四卷　往生集一卷
蓮池遺稿二卷　禪關策進二卷
楞嚴模象記一卷　梵網菩薩戒疏發隱一卷
竹窓隨筆三卷　沙彌戒律儀一卷
佛遺敎經論疏節要一卷　雲棲規約一卷
雲棲法彙有三十二種云

二　敎攝

宏は禪僧にして念佛を修し、亦戒律を精持せる者なりと雖も、其の崇尙する所は華嚴に在りしが如し。是の故に敎攝を論ずるにも、自ら賢首の判敎を用ひ、淨土の諸經は華嚴無量門中の一門なりといへり。その言に云く、世尊始めて正覺を成じ、大華嚴を演ぶ、大敎投じ難し、故に衆生の根に隨つて、三乘の法を說き、後乃權を會して實に歸し、悉く大車を賜ふ。此れ卽如來一代時敎の大系なるものなり。然るに其の中に於

て、復念佛の一門を出だして、大根小根を論せず、但念佛する者は卽往生を得、亦根熟を待たずして、方に乃之を會して實に歸し、但往生する者は卽不退を得せしむ、喩へば淨土の敎門は、不次の拔擢の如し、此れ卽如來の殊恩にして一代の變方なるものなり。凡そ佛淨土の諸經を說くに、略して十義あり、一には大悲、末法を憫念して、爲に津梁となさんが爲なり。二には特に無量の法門に於て、勝方便を出ださんが爲なり。三には生死の凡夫を激揚して、忻厭を起さしめんが爲なり。四には二乘の空を執して、淨土を修せざる者を化導せんが爲なり。五には初心の菩薩を勉進して、如來に親近せしめんが爲なり。六には利鈍の諸根を攝して、悉く皆度脫せしめんが爲なり。七には多障の行人を護持して、墮落に遭はざらしめんが爲なり。八には有念の心に卽して、無念に入ることを得るを的指せんが爲なり。九には巧に因を往生に示して、實に無生を悟らしめんが爲なり。十には徑中の徑路を示して、速に不退に至らしめんが爲なり。是の如き十義あるに由るが故に、如來は淨土の諸經を說き玉へるなり。然るに賢首に依るに、如來の聖敎に總じて五種の分類あり。一に小乘敎、二に始敎、三に終敎、四に頓敎、五に圓敎なり。中に於て、淨土の諸經は正しく頓敎の所攝、兼ねては終

敎及圓敎に通ず。正しく頓敎に屬する所以は、凡そ薄地の凡夫、聖地に登らんと欲するに、其の事甚だ難く、其道甚だ遠し。今は但だ持名念佛して、卽往生を得。旣に往生し已れば卽不退を得、彈指圓成、一生取辯、寶位を將つて直に凡庸に授くるが如し。階級を歷ざれば漸敎迂回屈曲の比に非ず、故に頓の義に屬するなり。兼ねて終敎に通ずとは、一切衆生、念佛して定めて當に成佛すべし。卽ち定性闡提皆作佛することを許すが故に、終敎の義に通ずるなり。分に圓敎に屬すとは、華嚴は全圓なり、今淨土の諸經は其の少分を得たり。凡そ一代時敎の所詮の敎觀を論ずるに四あり。一に事法界、二に理法界、三に事理無礙法界、四に事事無礙法界なり。前の三は諸敎に通じ、後の一は獨り圓敎に在り。圓敎は所謂唯華嚴經にして、名けて別敎一乘となす者是なり。事理無礙は、頓に同く終に同じと雖も、事事無礙は、彼の二に同からず。故に同敎一乘に揀別して、名けて別敎一乘となすなり。今淨土の經に就いて、圓に分屬するの義を明さば、略して十事あり。一には華嚴は器界塵毛形無形の物、皆悉く妙法の言音を演出すと說き、彌陀經は水鳥樹林咸く根力覺道の諸法門を宣ぶと說けり。二に華嚴には一微塵中十方法界の無盡の莊嚴を具足す。無量壽經には寶樹の中に於て十方の佛

刹を見ること、猶鏡像の如しといへり。三には華嚴は寂場を動ぜずして、法界に徧周し、無量壽經には阿彌陀佛常に西方に在まして、而かも亦十方に徧ずと。四に華嚴には喩へば藥王樹の如き、若し見ることある者は、眼淸淨を得、乃至耳鼻六根淸淨ならざることなし。衆生佛を見るも亦復是の如し。圓覺の佛を見、普門の法を聞くを以てなりと。無量壽經には阿彌陀佛の道場寶樹は、見聞する者をして六根淸淨ならしむと。五に華嚴には八難の者も、能く超えて十地を證すと說き、此の無量壽經には地獄鬼畜も、但念佛する者は悉く往生すと。六に華嚴には一卽一切なるが故に、如來能く一身に於て不可說の佛刹、微塵數の頭を現じ、一一の頭より爾所の舌を出だし、一一の舌より爾所の音聲を出し、乃至文字句義法界に充滿すと。此の無量壽經には彼の國に無量の寶華あり、一一の華中より三十六億那由他百千の光明を出だし、一一の光明より三十六億那由他百千の佛を出だし、普く十方の爲に一切法を說くと。七に華嚴には舍那釋迦兩相を雙べ垂るゝことを明かし、此の觀經には阿彌陀佛六十萬億那由他恆河沙由旬の身(舍那)を現じ、又丈六(釋迦)の身を池水の上に示すと。八に華嚴は盧舍那佛を以て敎主となし、此の經の阿彌陀佛は淸凉の云ふが如く亦卽ち本師盧舍那なり。九に華嚴を大不思議經と名く、此の阿彌陀經に亦自ら不可思議功德經といへり。十に華嚴の敎たる凡夫の心に卽して便ち諸佛の不動智を成ず、此の淨土の諸經は稱名を越えずして佛卽現前する者なり。是の如きの十事あるが故に、此の淨土の諸經は、淨名等の諸經に同く、華嚴の流類なりといはざるべからず。故に圓に分屬すといふなり。但し淨土の經に部と類との異あり。部とは無量壽經と阿彌陀經となり。此の二種は一部にして、唯詳略を異となすに過ぎず。類とは三種あり。觀經と鼓音聲經と後出阿彌陀偈經となり。此等の經はその部を同うせず、唯其の類を同うするのみ。從昆弟の父を同うせずと雖も、其の祖を同うするが如し云云。

三　身土

佛に三身あり、常の如し。中に於て、彌陀經には阿彌陀佛に光明無量、壽命無量の兩義あることを說けり。且く光明に復二あり、智光身光是なり。自受用身は眞法界を照らす、是を智光と名け、他受用身は徧く大衆を照らす、是を身光と名く。又佛壽に三あり、法壽報壽應壽なり。法身は如理を以て命となし、報身は智慧を以て命となし、應身は因緣を以て命となす。生滅に示同して始あり終あるは應身の壽なり。一たび得て永

く失はず有始無終は報身の壽なり。壽にあらず不壽に非ず無始無終は法身の壽なり。天台は阿彌陀佛の壽命は實に期限あり、人天數ふる者なし、是の故に彼の佛の無量は有量の無量なりとへいるも、而かも佛壽は機の所見に隨ふが故に、今の無量も亦無量の無量に卽すといふを得べし。何者華嚴の十回向の文に、無量阿僧祇といへるを、疏に釋して此れ但だ無數の言なり、局限すべからずといへり。今の經に亦無量無邊阿僧祇と言ふ、二經の文勢極めて相類すればなり。是の故に彼佛の壽命も亦同く無量の無量なるべし。又經に阿彌陀佛成佛已來十劫を歴といふも、是卽一期赴機の說に過ぎず、究極して之を言はゞ、成佛以來亦無量なること法華の本門壽量の說に同かるべき耳。但し孤山越溪等の師は、觀經と彌陀經との二經の優劣あることを論じ、其の中に觀經には佛身高六十萬億那由他恆河沙由旬と言ふも、彌陀經には之を說かず。是に由りて彌陀經所說の佛身は劣應なることを知るといへり。されど無量壽經に阿彌陀佛の道場寶樹は純ら衆寶を以て自然に合成すといへば、則木菩提樹下の身に非ず。若し然れば劣應に非ること明かなり。加之觀經に明かす所の佛身は卽報卽法といふと雖も、而かも那由恆沙數計なきに非ず、彌陀經の中には但光明無量壽命無量といふ、則是れ其の法身を指すものなり。又觀經に或は丈六八尺を現じ、或は大身を現じて虛空の中に滿つといへり。是に由るに佛身は機の所見に隨つて大小定ることなきなり。

次に佛土を論ずるに多種あり、或は分つて四土となす。一に常寂光土、二に寶報莊嚴土、三に方便有餘土、四に凡聖同居土なり。今極樂の如きは、其の國中に具に菩薩聲聞諸天人民あり。是れ卽凡聖同居の淨土なり。されど機の異なるに隨つて、其の所見も亦同からず。是の故に或は同居に於て寂光土を見るあり、或は同居に於て實報土若くは方便土を見るあり、又或は同居に於て但だ本土を見る者あり。法華に我が此の土は安穩にして天人常に充滿すと。像法決疑經に今日座中無央數の衆、或は此の處山林地土砂礫と見、或は七寶と見、或は是れ諸佛の行處と見、或は卽是不思議諸佛の境界と見ると言ふが如き、皆卽機の異なるに隨つて其の所見を同うせざる者なり。復或は分つて三土となす。一に法性土、卽前の寂光なり。二に受用土、復自他を分つ、卽前の實報に同じ。三に變化土、卽前の方便同居に同じ。今極樂は變化に當すと雖も、亦受用及法性に通ずといふを得べし。或は分つて十土となす。華嚴合論に云ふが如き、

一に阿彌陀經の淨土、二に觀無量壽佛經の淨土、此の二は是れ權にして未だ實ならず。三に維摩經の淨土、是れ實にして未だ廣ならず。四に梵網經の淨土、是れ亦實にして未だ廣ならず。五に摩醯首羅天の淨土、六に涅槃經の淨土、此の二は是れ權にして未だ實ならず。七に法華經三變淨土、亦是れ權にして未だ實ならず。八に靈山會に指す所の淨土、是れ實にして權に非ず。九に唯心の淨土、十に毘盧所居の淨土、此等の淨土は皆實にして權に非ずと。此の中、極樂は是れ權にして實に非ずと雖も、然かも是れ且く權實對待の分別に據りて之を言ふのみ。若し隨機を論せば、權實定まることなし。何となれば取相の凡夫未だ法空の實理を信せざれば、生ずる所の淨土は是れ權にして實に非ずと雖も、若し入理の者に就かば、其の見る所の淨土は卽權卽實なること、固より言を要せざればなり。要するに身土は機の所見に隨つて報化權實同からざるなり。是れ卽宏も亦通報化の義を取れる者といふべし。

四　機　教

淨土の所被を論ずるに、無信の者、無願の者、無行の者は器に非ず。是に反して信願行を具する者は皆此の教の所被の器となることを得べし。觀經に依るに五逆の者も猶生ずることを得といふも、無量壽經には之を除けり。此れ卽五逆にして謗法を兼ぬるに由るなり。若し五逆を具すと雖も謗法せざる者は未だ必ずしも生せざるに非ず。觀經の下品下生の如き卽その證なり。謗法は不信なり、不信なるが故に生ずること能はず。所謂疑へば則華開けざる者なり。されど若し總じて之を言はゞ、不信の者及誹謗の者と雖も、一たび彼の佛あることを聞知すれば、佛の一字已に識田に蘊むが故に、皆善根となりて多劫多生に畢竟じて解脫を蒙ることあるべし云云又此の所被の器の中に於て、三輩九品の別あり。若し之を細分すれば百千万億の輩品とならざるを得ず。何者均しく念佛と名け、同く往生すといふも、修に事理あり、功に勤惰あり。因に隨つて果を感ずれば、地位自ら別ならざる能はざればなり。又二乘の人は本と生ずることを得ず。彼れ臨終に大乘心を發すに由りて、亦乃生ずることを得る者なり。天台觀經疏に釋する所の如し。

次に往生の教行を論ずるに、凡そ彼の國に生せんと欲する者は、先づ當に信を生ずべし。所謂生佛不二、衆生念佛すれば定むで往生を得て、究竟成佛すべしと信ずるなり。經に汝等皆當信受我語といふ是なり。次に願を發すべし。所謂信は徒信に非ずし

て、子の母を憶ふが如く、瞻依向慕し、必ず其の教に依りて往生せんと願ずべし。經に應當發願生彼國土といふ是なり。次に行を起すべし。所謂願は虛願に非ず、必ず常行精進し、念念相續して間斷あることなきを要す。經に執持名號一心不亂と卽是なり。此の三事は淨土の資糧なり、資糧未だ充たざれば克く前進すること難し。又復此の三は鼎の三足の如し。或は俱に無く、或は一具して二を缺ぎ、或は二を具して一を缺ぐ、皆不可なり。又喩ふるに、其の信なき者は、種を栽培すれば定むで穀を成ずることを得と信ぜざるが如く、信じて願なき者は、佳種を知ると雖も穀を求むるに心なきが如く、願じて行なき者は、穀を得ることを望むと雖も、畊耨を事とせざるが如し。然るに汎く此の往生の行を論ずるに其の四種あり。(宗密の行願品疏によれるなり)。一に稱名、二に觀像、三に觀想、四に實相なり。稱名とは、彌陀經に說く所の執持名號なり。是に數種あり、或は明持とは聲を出して稱念す。或は默持とは聲なくして密に念す。或は半明半默持とは唇口を微動して念ず、呪家の金剛持の如し。又或は記數持或は不記數持あり、便に隨つていづれを用ゆるも皆可なり。觀像とは泥木金銅等の尊像を設立して注目觀瞻するをいふ。觀想とは我が心目を以て彼の如來眞身を想ふ、卽

觀佛三昧經、十六觀經等の所說是なり。實相とは卽自性天眞の佛を念ずるをいふ、此の佛は生滅有空能所等の相なく、亦復言說名字心緣等の相を離るが故に實相と名くるなり。華嚴經に我れ極樂世界の阿彌陀佛を見んと欲せば、意に隨つて卽見るといふもの是なり。此の中、稱名は是も淺きに似たれども、實は前前後後に徹す、故に必ずしも淺深を判ぜざるなり。

今此の中、彌陀經所說の持名の行に就いて、更に之を論ずるに、名號は是れ念境なり。執持一心は是れ念法なり。所謂念境とは彼の阿彌陀佛の四字の洪名を以て所念の境となして、色像等を兼ねざるをいふ。之に依りて修行すれば詣る所あるを以てなり。念法とは既に名號を聞かば、要ず執持すべし、執とは聞いて之を受くるをいひ、持とは受けて之を守るをいふ。此の中佛名を說くことを聞くは是れ卽聞惠、執受して懷に在るは是れ卽思慧、持守して忘れざるは是れ卽修慧なり。又佛名を說くことを聞いて心疑貳せざるは是れ卽信なり、信じ已りて執して心に樂欲を起すは是れ卽願なり、願じ已りて持して心に精進を勤むるは是れ卽行なり。然るに若し人四障あれば佛名を說くを聞くと雖も、而かも執持すること能はず。四障とは、一には妄に卽

心是佛の理を執するが故に、己れの心を捨てゝ他の佛を念ずるの要なしと謂ふ是れなり。然るに卽心是佛なれば、亦すなはち卽佛是心ならざるべからず。今却て卽心是佛を執して卽佛是心を許さずんば、則心と佛と是れ二にして、卽の義成せず。若し然れば念佛念心兩ながら成ずべからず。是の故に卽心是佛の理を知ると共に、亦深く卽佛是心の理に達して念佛を妨げざるを要すべし。二には妄に諸佛の偏念すべきことを執するが故に、唯だ一佛を念ずるを偏倚なりと謂ふ是なり。然るに心專らに志一ならざれば、乃三昧を成ずること能はず。普廣大士佛に問ふ、十方俱に佛土あり、何を以て獨り西方を讃ずるや。佛言く、閻浮提の人は心に雜亂多く、其れをして心を一境に專らにして乃往生を得せしめんが爲なりと。況や諸佛は同一法性身なるを以て、一佛を念ずれば卽一切佛を念ずるなり。是の故に今一佛に偏倚するが如きも、實には諸佛の偏念を妨げざるをや。三には若し一佛を念ずるを要せば、隨つて何れの佛を念ずるも可なり。必ずしも阿彌陀佛を念ずるを要せずと謂ふ是れなり。然るに阿彌陀佛は娑婆の諸の衆生と偏に因緣あり。故に諸佛の中に於て偏に彌陀一佛を念ずるを勸む。彼の佛の名號は人の樂むで稱する所、設令惡人も時ありて覺えず失聲して念佛することあり。乃至人善事に逢へば覺えず念佛して歡喜讃嘆し、若し惡事及苦難に逢ふも亦覺えず念佛して傷悲痛切す。機感因緣自ら然らしむる者あり。是れ卽彼の佛と諸の衆生と因緣偏に深重なるが故なり。四に若し必ず阿彌陀佛を念ずるを要とせば、則彼の佛の功德智慧相好光明の諸相を念ずるも可なり、必ずしも但だ名號を念ずべからずと謂ふ是なり。然るに持名は末法中に於て量も逗機の法なり、文殊般若經に衆生愚鈍にして觀解すること能はざれば、但だ念聲相續して自ら往生を得べしと。但だ鈍機に逗するのみならず、其の功德も亦不可思議なり。遺教經に心を一處に制すれば、事として辨せざることなしと。今心を佛號に制して。而かも一心至ることを得、其の體用豈に測るべけんや。是の故に獨り名號を稱するを要となすなり。是の如き四障を離るゝ者は、阿彌陀佛を說くを聞いて、精進にその名號を執持し、卽一心不亂に至るべし。一心不亂は執持の極を言ふなり。一心とは正境に專注し、不亂は妄念を生ぜざるなり。是に事理の別あり。事の一心とは、佛の名號を聞いて常憶常念し、心を以て緣歷して字々分明に前句後句相續して斷えず、行住坐臥唯此の一念ありて二念あることなく、貪瞋煩惱の諸念の爲に雜亂せられず、

信力成就するを事の一心と名く。唯信力を得て未だ道を見ず、故に唯定門の攝に屬するのみ、未だ慧あらざるが故に慧門の攝に屬せず。此の故に妄を伏すと雖も、未だ妄を破すること能はざるなり、唯定門の攝に屬す。理の一心とは、自の本心を護るが故に一心と名づく。中に於て二あり。一には能念所念、更に二物に非ず、唯一心なりと了知す。二には此の一心は有に非ず無に非ず亦有亦無に非ず非有非無に非ず、四句を離れ言亡慮絶名狀すべきなし。唯强いて一心と名くと了知す。是の如く唯理觀を專らにするを理の一心と名く。觀力を以ての故に能く妄を破し諦を見る、故に慧門の攝に屬す。復兼ねて定を得るが故に妄自ら伏するなり。又此の理の一心は、正しく文殊般若經の一行三昧、華嚴の一行念佛一時念佛なり。又起信に彼の佛の眞如法身を觀ずれば、畢竟じて正定に住することを得といふは、皆此の理の一心を指せるなり。加之、一心といふも實には觀經の三心、起信論の三心、往生論の三心乃至華嚴の十心、寶積の十心、皆此の中に具せざることなく、又淨名の八法、德雲の廿一念佛門、亦皆此の理の一心を出でざるなり。又此の一心は菩薩の念佛三昧なり、又卽達磨直指の禪なり。是の故に至心に阿彌陀佛を念ずれば、一聲に八十億劫生死の重罪を滅す、此

れ良に正しく理の一心を持するに由るものなり。

是の如き事理の二持は、勝劣二機の修する所にして、所生の依果亦相同からずと雖も、機に從て之を修すれば悉く往生を得べし。而かも事を專らにする者、若しくは理を專らにする者、又或は先に事持を勤めて後に漸く理を究むる者、是の如き勝劣漸頓皆機に隨つて精進すれば、悉く往生の大益を得べき者なり。

三三　滿益大師智旭の淨土教義

一

明朝三百年間に淨土を修せし高僧尠からず。中に於て尤も著名なる者二人あり、一は雲栖大師袾宏にてし、他を滿益大師智旭とす。此二人の中に就いて更に感化の優劣を比較する時は、後者は前者に及ばざること遠し。蓋し二人の者學德竝び高しと雖も、而かも袾宏は德を以て鳴り、智旭は學を以て勝さる。故に後世に及ぼせる實際の感化は旭、宏に如かずといへども、著述を起し學界を裨益せし點に至ては、旭は實

に明朝三百年間の一人なり。旭は元と禪宗に出家し、尋いで戒律及天台を究む。然れども生平淨業を精修し、西方を以て歸結の處となせり。淨土に關して論說する所甚だ多からず、太抵從前以來の敎禪一揆の思想を布衍せしに過ぎざるも、而かも亦多少の發明する所なきにあらず。今先づ其の前歷を敍し、後に敎義を述べん。

智旭俗姓は鍾、古吳木瀆の人、明神宗萬曆二十七年五月三日を以て生る。少にして儒學を好み、誓つて釋老を滅せんと欲し、論數十篇を作りて盛に之を破す。十七歲初めて雲栖の竹窓隨筆を讀み、大に反省する所あり、仍て著す所の闢佛論を取りて悉く之を焚く。二十歲父を喪ひ、又地藏菩薩の本願を聞いて始めて出家の志を發し、二十二歲に及むで志を念佛に留む。天啓元年七月、年二十三にして(時に尙ほ優婆塞たり)自ら四十八願を發し、其の第八願に我決生極樂世界速證無上菩提の文あり。翌二年一月の中に三たび憨山を夢みて其の誨を受く、山、名は德淸、當時禪門の巨匠たり。時に山、曹谿に在り、遠く從ふこと能はず、仍て其の門人雪嶺に就いて剃度し、名を智旭と命ず。其の年雲栖に往きて古德の講を聽き、尋いで徑山に坐禪して大に悟る所あり。二十六歲菩薩戒を受け、二十七歲徧く律藏を閱みす。天啓六年母を喪ひ、尋いで闢を掩ふて松陵に隱栖す。偶〻疾に罹り且に殆からんとす。是に於て方めて意を專にして淨土に生せんことを求む。嘗て自ら記して曰く、旭出家の時、宗乘自ら負ふて敎典を藐視し、妄に持名は曲げて中下の爲にすと謂へり。後大病に因りて意を西歸に發し、復た妙宗(知禮)圓中(傳燈)の二鈔、及雲栖の疏鈔等を硏き、始めて念佛三昧は實に無上の寶王なることを知り、方に肯て死心に名號を執持し、萬牛も挽くことなしと。蓋し旭は其の初め禪門に出家すと雖も、遂に沈空の徒とならず、專ら意を敎乘に注ぐに至りしは、他の誘因なきにあらざるも、而かも主として病の爲に善引せられたるや明かなり。永觀律師曰く病は人の善知識なりと、格言といふべきなり。崇禎二年、歲三十六にして律を講じ、嗣いで梵網を註せんと欲して、佛前に於て四闡を作る。一に曰く賢首を宗とす、二に曰く天台を宗とす、三に曰く慈恩を宗とす、四に曰く自ら宗を立つと。然るに頻りに台宗の闡を拈得せしを以て、爾來天台を宗として深く其の章疏を攻究す。然れども台家の子孫たることを肯ぜず、其の故は近世の台家は禪宗賢首慈恩と各〻門庭を執して和合することを能はざるを以てなり。三十三歲の秋始めて靈峯に入る。尋いで武水、九華、溫陵、漳州、湖州、石城、祖堂、晨溪、長水の諸處に住し、著書

を作す頗る多し。彌陀經要解は、永曆元年歳四十九にして祖堂に於て述する所なり。同七年夏新安に入り、安居を歙浦の天馬院に結び、翌年二月、年五十六にして靈峰に還る。夏病に臥し淨土十要を選定す、秋大藏を閲みし竟り、閲藏知津、法海觀瀾の二書を脱稿す。其の冬病漸く篤く、十二月三日門弟に遺囑する所あり、十三日に至りて乃ち淨社を啓建し其の願文を作り、又求生淨土偈を製す。願文に云く

甲午十二月十有三日、菩薩戒弟子智旭、一心歸命極樂世界阿彌陀佛觀世音大勢至清淨海衆及十方三世一切三寶、痛念智旭本爲生死大事、二十四歳出家、絶無半點好爲人師之念、不意幻緣所逼謬爲人師二十餘年、雖有弘法微善、而虚名不累、觀行荒疎弗能折伏煩惱、以登五品、今病患纏身心雖明了、力不自由、痛哭號呼罔知攸措、幸仗佛慈殘喘未絶、設非急圖淨業、何以永脱苦輪、爰發虔心、敬就靈峰藏堂、邀同志法侶（十人及外護菩薩沙彌五人）和合一心結社、三載每日三時課誦稱讚洪名、二時止靜研窮大藏、教觀雙修戒乘俱急、願與法界衆生決定同生極樂、智旭從今以去誓不登座說法、除同志執經問義、不敢倦答、若敷文演義自有照南靈晨性旦、略可宣傳、誓不背佛平坐除稍偏及對像坐、若受戒學律自有照南等慈可以教受、誓不應在家人請齋、除寺院靜室中、仰乞三寶證明攝受、令智旭諸緣未盡早就輕安、大限難逃徑歸安養、生則念佛兼著述、死則不墮亦不退、又願同行法侶無論旭存與否、堅志同修有始有卒、又願外護沙彌無論旭存與否、誠心營事勿懈勿失、以此殊勝淨因回向無上極果、普與含生咸歸祕藏（以上願文）

沈痾危篤是吾師　消却從前多少癡　已破百年閑活計　定開塵劫大通達　遙瞻落日增哀慕　夢禮慈容長智悲　六八願王恆攝取　金蓮育質可無疑（求生淨土偈六首の一）

以て求生淨土の痛切なるを見るべし。翌九年一月廿日病復發し、廿一日終に繩牀に趺坐し、西に向て手を擧げて逝く、年五十七、法臘卅四。靈峰大殿の右に塔すといふ。旭人と爲り峻嚴精到、名利を厭棄し戒品を固持して敢へて毀犯せず。嘗て意を弘律に決し多く戒本を註解すと雖も、誓つて和尚となりて人の爲に戒を授けず。蓋し當時開遮猶ほ明かならずして、而かも擅に和尚と稱する者比々皆然らざるはなきの弊に鑑むればなり。晩年弟子成時に語りて曰く、吾昔年念念比丘の戒法を復せんことを思ふ、近年に至ては念念西方を求むる耳と。生平閲藏著述を以て其の業となし、身を終るまで嘗て筆硯を放たず、文章雄勁にして、詩賦序跋亦甚だ多し。既に稿を脱せしもの四十餘種一百五十餘卷に達すといへども、而かも旭が解釋又は註脚を加

へんと期待せし所のものは、更に猶ほ二十餘種ありき、閲藏畢願文に列ぬる所の如し。中に就て閲藏知津は大藏諸經の要義を一一に抄錄せし者にして、眞に閲藏者の知津に備ふるに足れり。之を除いて他は律部に關するもの尤も多く、法華淨土之に亞ぐ。其の主唱せし所は禪教律の互に鼎立して、相排擠するの弊を矯め、所謂三學一源を鼓吹するを其の眼目となせり。禪は其の本宗なりしと雖も、而かも盲修瞎鍊は旭が最も嫌惡せし所、是の故に教律の二を以て力めて其の陋を匡救す。然るに律を弘むといふも、當時の所謂戒師に與みするを欲せず、教を演ぶといふも、宗見を骨張する台家の子孫たるを欲せず。是の故に自ら孤臣孽子と稱し、又八不道人と號す。蓋し八不とは古の儒禪律教は蹙然として敢てせず、今の儒禪律教は艴然として肩しとせざるに取ればなり。八不道人傳の末尾に旭自ら記して曰く

漢宋註疏盛而聖賢心法晦、如方木入圓竅也、隨機羯磨出而律學衰、如水添乳也、指月錄盛行而禪道壞、如鑿混沌竅也、四教儀流傳而台宗味、如執死方醫變證也、是故學世若儒若禪若律若教、無不目爲異物疾若寇讐、道人笑曰、知我者唯釋迦地藏乎、罪我者亦唯釋迦地藏乎

以て其の志を察すべし。門人成時私に諡號を撰して始日大師と號し、後人呼むで靈峰蕅益大師と稱す。實に明末に於ける教界の大龍象といふべきなり。門下尠からず、照南、靈晨、性旦等慈及成時は著はれたるものなり。中に於て成時は旭が晩年の付法なりしを以て、甚だ重むせらるゝに及ばざりしが如きも、而かも善く其の志を紹ぎて、篤く淨土を宣揚し自ら門下の白眉たり。今時の記する所によりて旭の著述を列ぬるに左の如し

阿彌陀經要解一卷
楞伽義疏十卷
大佛頂玄文十二卷
金剛破空論附觀心釋二卷
法華會義十六卷
法華綸貫一卷
遺教解一卷
後附授戒法學戒法梵網懺法問辯共一卷
占察玄疏一卷
盂蘭新疏一卷
準提持法一卷
心經略解一卷
妙玄節要二卷
齋經科註一卷
梵網合註八卷

優婆塞戒經受戒品箋要一卷
戒本經箋要一卷
大小持戒犍度略釋一卷
五戒相經略解一卷
唯識心要十卷
起信裂網疏六卷
四十二章經解一卷
觀想偈略釋法性觀懺
八大人覺經解一卷
禮地藏儀一卷
閱藏知津四十四卷
旃珊錄一卷
重訂諸經日誦二卷
闢邪集二卷
羯磨問釋一卷
毗尼集要十七卷
戒消災經略釋一卷
沙彌戒要一卷
八要直解八卷
大乘止觀釋要四卷
大悲行法辯譌一卷
壇軌式三種
占察行法一卷
教觀綱宗并釋義二卷
法海觀瀾五卷
選佛譜六卷
周易禪解十卷
靈峰宗論十卷

今次に智旭が佛教に對する一般の觀察を述ぶべし。蓋し旭が其の生涯を通じて主唱せし所の大義なるものは、所謂三學一源の所論に在り。三學とは禪と教と律なり、梵網及四分等の戒を護るを律といひ、天台、華嚴、法相幷に念佛等の教内の諸宗を教といひ、教外別傳の臨濟等の諸派を禪といふ。此等の諸宗は現に今吾が邦に於て見られつゝある如く、旭の當時に在りても、各門戸を異にして宗見を晉張し、互に其の短を指摘して怨家の如く誹謗し排擠しつゝありき。此の頽勢を看取して慷慨措く能はず。是に於てか三學一源の大義を唱道して、時弊を匡救し以て先佛世尊の醇正に復らんことを敎へき。

惟ふに旭の三學一源論は遠く宋初の敎禪一揆論に基き、近く雲栖一流の禪淨融合論に導かる。蓋し達磨の禪は不立文字にして唯だ心を以て心に傳ふるが故に、總ての敎乘法相を藐視し、敎内の諸宗と全く其の趣を殊にせるが如し。然るに宋初に及むで新たに敎禪一揆論を生じ、爾來隱約の間に斯の論は勢力を占め、支那の禪は元明の交に至て殆ど面目を一變し、其の對手なる敎乘と互に握手するに至れり。敎禪